

# 京都府遺跡調査概報

## 第 19 冊

1. 長岡京跡（立会調査）
2. 長岡京跡左京第124次
3. 長岡京跡右京第206次
4. 木津川河床遺跡
5. 山科本願寺跡
6. 長岡京跡右京第194次

1986

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく5年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にす考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和60年度は、33件の調査を実施しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅してはいはざありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は、遺跡の重要性を理解していただくために、またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものがあります。昭和60年度は、第18冊、第19冊、第20冊、第21冊の4冊にまとめることにしましたが、この第19冊には木津川河床遺跡ほか5件を収録しました。調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに炎暑の下、極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本冊に収めた概要は

1. 長岡京跡(立会調査) 2. 長岡京跡左京第124次 3. 長岡京跡右京第206次  
4. 木津川河床遺跡 5. 山科本願寺跡 6. 長岡京跡右京第194次

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 長岡京跡立会調査	長岡京市粟生ほか	昭60. 6. 21 } 昭61. 3. 14	京都府乙訓土木事務所	辻本 和美 石尾 政信 村尾 政人
2. 長岡京跡左京第124次	向日市鶏冠井町西金村	昭60. 5. 8 } 昭60. 8. 30	大阪高等裁判所	村尾 政人 黒坪 一樹
3. 長岡京跡右京第206次	大山崎町円明寺門田・一丁田	昭60. 9. 14 } 昭60. 12. 19	建設省近畿地方建設局	長谷川 達
4. 木津川河床遺跡	八幡市八幡一丁目	昭60. 4. 23 } 昭60. 11. 30	京都府土木建築部	松井 忠春 岩松 保
5. 山科本願寺跡	京都市山科区東野舞台町	昭60. 10. 29 } 昭60. 12. 16	京都府土木建築部	黒坪 一樹
6. 長岡京跡右京第194次	長岡京市開田3丁目	昭60. 6. 19 } 昭60. 8. 2	京都府乙訓土木事務所	黒坪 一樹

3. 本冊の編集には、調査課企画資料担当が当たった。

## 目 次

昭和60年度長岡京跡の発掘調査	1
1. 長岡京跡昭和60年度立会調査	2
2. 長岡京跡左京第124次発掘調査概要	7
3. 長岡京跡右京第206次発掘調査概要	19
4. 木津川河床遺跡昭和60年度発掘調査概要	23
5. 山科本願寺跡発掘調査概要	41
6. 長岡京跡右京第194次発掘調査概要	49

## 挿図・付表目次

### 昭和60年度長岡京跡の発掘調査

付表 1	昭和60年度長岡京跡調査地一覧表	1
------	------------------	---

### 長岡京跡立会

付表 2	立会調査箇所一覧	2
第 1 図	長岡京跡調査地位置図	3
第 2 図	立会調査及び工事作業風景	5
第 3 図	中海道遺跡立会調査地及び土層柱状図	6

### 長岡京跡左京第124次

第 4 図	調査地位置図	7
第 5 図	遺構平面図	8
第 6 図	土壇12450・12451平面・断面図	10
第 7 図	土壇12411・12452, 竪穴住居跡12450平面・断面図	11
第 8 図	出土遺物実測図(1)	12
第 9 図	出土遺物実測図(2)	13
第 10 図	出土遺物実測図(3)	14
第 11 図	石器類実測図	16
第 12 図	遺構変遷図	18

### 長岡京跡右京第206次

第 13 図	調査地位置図	19
第 14 図	トレンチ配置図	20
第 15 図	各トレンチ土層柱状図	21
第 16 図	出土遺物実測図	21

### 木津川河床遺跡

第 17 図	周辺遺跡分布図	25
第 18 図	木津川河床遺跡調査地位置図	26
第 19 図	OD地区検出遺構実測図	27
第 20 図	OD地区竪穴住居跡(SH01)実測図	28
第 21 図	OD地区竪穴住居跡(SH02)カマド実測図	28

第 22 図	OD地区SH02実測図	29
第 23 図	OD地区竪穴住居跡(SH03)実測図	30
第 24 図	OD地区(SH03)カマド実測図	30
第 25 図	JH地区検出遺構実測図	31
第 26 図	JH地区竪穴住居跡(SH01)・SX09実測図	32
第 27 図	JH地区SH01カマド実測図	32
第 28 図	1P地区弥生時代検出遺構平面図	33
第 29 図	OD地区出土遺物実測図	35
第 30 図	JH地区出土遺物実測図	36
第 31 図	1P地区出土遺物実測図	37
第 32 図	木津川河床遺跡調査地内検出竪穴住居跡分布図	38

#### 山科本願寺跡

第 33 図	調査地位置図	41
第 34 図	調査地周辺遺跡分布図	42
第 35 図	土居	43
第 36 図	遺構平面図	44
第 37 図	Aトレンチ南壁断面図	45
第 38 図	堤防状遺構・旧流路跡断面図	45
第 39 図	弥生土器実測図	46

#### 長岡京跡右京第194次

第 40 図	調査地位置図	49
第 41 図	土層断面図	50
第 42 図	遺構平面図	51
付表 3	検出溝座標値	52
第 43 図	SD19401内出土遺物実測図	53
第 44 図	墨書土器実測図	54
第 45 図	製塩土器実測図	55
第 46 図	遺物量器種別集計グラフ 1	56
第 47 図	遺物量器種別集計グラフ 2	56

## 図 版 目 次

### 長岡京跡立会

- 図版第1 長岡京周辺航空写真  
図版第2 (1)下植野大山崎線立会調査 (2)同上, 掘削面土層状況  
図版第3 (1)榎原高槻線(中海道遺跡)立会調査状況 (2)同上, 掘削面土層状況

### 長岡京跡左京第124次

- 図版第4 (2)第1トレンチ全景(西から) (2)SH12450・SK12451(北から)  
図版第5 (2)SK12451遺物出土状況 (2)SH12451中央土塚遺物出土状況  
図版第6 出土遺物(1)  
図版第7 出土遺物(2)  
図版第8 出土遺物(3)

### 長岡京跡右京第206次

- 図版第9 (1)調査地近景(南西より) (2)第2トレンチ(南西より)  
図版第10 (1)第3トレンチ(北東より) (2)第3トレンチ土層断面  
図版第11 (1)第5トレンチ(北東より) (2)第4トレンチ土層断面

### 木津川河床遺跡

- 図版第12 (1)OD地区調査全景(南から) (2)OD地区素掘り溝・柱穴群検出状況  
(北西から)  
図版第13 (1)OD地区検出竪穴住居跡群(北西から) (2)OD地区SK01(東から)  
図版第14 (1)OD地区SH02(南東から) (2)OD地区SH02カマド検出状況  
図版第15 (1)OD地区SH03(南東から) (2)OD地区SH03カマド検出状況  
図版第16 (1)JH地区調査地全景(東から) (2)JH地区断割り状況(北から)  
図版第17 (1)JH地区SH01・SX09(北から) (2)同上(南から)  
図版第18 (1)1P地区調査地前風景(南東から) (2)1P地区上層検出遺構(西から)  
図版第19 (1)1P地区素掘り溝群(南東から) (2)1P地区弥生時代～中世検出遺構  
(西から)  
図版第20 (1)1P地区SD14・SX21(南から) (2)1P地区SX26(北東から)  
図版第21 出土遺物

### 山科本願寺跡

- 図版第22 (1)調査地全景(南西から) (2)遺構検出状況(南から)

図版第23 (1)Aトレンチ全景(北から) (2)旧流路跡(SD01)検出状況

図版第24 (1)Bトレンチ全景(北から)

(2)堤防状遺構(SX01)検出状況(北東から)

図版第25 (1)Aトレンチ南壁断面 (2)堤防状遺構(SX01)西側斜面(Bトレンチ)

**長岡京跡右京第194次**

図版第26 (1)調査地全景(北西から) (2)遺構検出状況(西から)

図版第27 (1)溝(SD19401)検出状況 (2)溝(SD19402・04)検出状況(東から)

図版第28 SD19401出土土器





## 昭和60年度長岡京跡の発掘調査

昭和60年度当調査研究センターでは、長岡京跡の発掘調査として、宮域1件、右京域3件、左京域1件の計5件を行った。この他、府道大山崎・大枝線ほか計10か所の府道の立会調査を行っている。所在地等については、付表1及び第1図のとおりである。

これら調査のうち、京都府向日町競輪場のスタンド改築工事に伴う長岡宮跡第165次調査では、長岡宮跡で検出された遺構としては最も西に当る掘立柱建物跡を2棟検出するとともに、土塚から鉄釘と共に緑釉の唾壺が出土した。そのほか多数の軒瓦や「<sup>〔内カ〕</sup>□人給」と記された墨書土器が出土している。右京第193次調査は、京都府立乙訓高校の教室棟新築工事に伴うもので、自然流路を検出し、重機掘削中ではあるが軒瓦片等が出土した。右京第194次調査は、府道開田・神足線の歩道設置工事に伴う調査で、西二坊坊間小路の推定地に当る。ここでは、西二坊坊間小路東西両側溝のほか、長岡京期の掘立柱建物や宅地内溝等を検出し、須恵器・土師器・黒色土器・墨書土器・製塩土器等が出土した。墨書土器は、「田」と記されている。右京第206次調査は、国道171号線の歩道設置工事に伴う調査で、古墳時代の竪穴住居跡等が多数検出された右京第188次調査地の隣接地に当る。ただ道路に沿った狭小なトレンチでもあり、小型丸底壺等の出土した溝状遺跡を検出したにとどまった。向日町簡易裁判所建設工事に伴う左京第124次調査では、長岡京期の遺構はさほど顕著ではなかったが、弥生時代中期の竪穴住居跡や土塚を検出した。そのほか、府道立会調査では、長岡京跡及び中海道遺跡について立会調査を行ったが、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。今年度の概報では、これら計6件の発掘調査及び立会調査について概要報告を行う。

(山口 博)

付表1 昭和60年度長岡京跡調査地一覧表

	次 数	地 区 名	所 在 地	期 間	備 考
1	宮内第164次	7AN18B	向日市寺戸町西ノ段	60. 9. 2～60.11. 2	第1図-11
2	右京第193次	7ANNKN-2	長岡京市友岡1丁目1の1	60. 7. 5～60. 8.23	第1図-12
3	右京第194次	7ANKNT-2	長岡京市開田3丁目	60. 6.19～60. 8. 2	第1図-13
4	右京第206次	7ANSKT-2	大山崎町円明寺門田・一丁目	60. 9. 9～60. 9.14 60.11. 8～60.11.11 60.12.10～60.12.19	第1図-14
5	左京第124次	7ANENR	向日市鶏冠井町西金村	60. 5. 8～60. 8.30	第1図-15
6	府道立会調査		長岡京市粟生ほか	60. 6.21～61. 3.14	第1図-1～10

# 1. 長岡京跡昭和60年度立会調査

## 1. はじめに

今回の長岡京跡立会調査は、昭和60年度に実施された、京都府乙訓土木事務所管内の街路道路事業に伴うものである。

調査は、同事務所の依頼を受け、当調査研究センターが行い、調査課主任調査員辻本和美・同調査員石尾政信・村尾政人が担当した。

現地調査期間は、昭和60年6月21日から昭和61年3月14日までである。

今年度の立会調査箇所は、向日市・長岡京市・大山崎町にわたる合計10か所の地点である。遺跡の種別では、長岡宮内1か所、長岡京右京域8か所、中海道遺跡1か所が該当する。

今回も、道路敷部分の制約された工事範囲での立会調査であり、現地における作業内容としては、工事による掘削土層断面の観察および遺物出土の有無等の確認が主なものである。また、作業に当っては、必要に応じて重機の稼動を一時中断し、土層断面図の作成や写真撮影等を行うことにした。

なお、福富 仁・濱口和宏の両氏には補助員として協力を得たほか、調査全般について、各市・町教育委員会および工事請負の業者の方々には、諸々の便宜をはかっていただいた。それぞれの方々に対し深く感謝の意を表したい。

付表2 立会調査箇所一覧

地区 番号	路線名	所在地	工事延長(m)	備考
1	柚原向日	向日市向日	90	宮内
2	外環状	長岡京市今里	300	右京・昭和52～53年度発掘調査
3	向日善峰	〃 滝ノ町	110	右京二条二坊
4	大山崎大枝	〃 粟生	60	右京隣接地
5	長法寺向日	〃 更ノ町	40	右京二条二坊
6	〃	〃 今里	40	〃 二条三坊・今里遺跡
7	〃	〃 〃	5	〃 二条二坊・今里遺跡
8	奥海印寺納所	大山崎町円明寺	100	〃 八条三坊
9	下植野大山崎	〃 下植野	500	〃 九条一坊
10	檉原高槻	向日市物集女	40	中海道遺跡



第1図 長岡京跡調査地位位置図

## 2. 各立会箇所 の 調査概要

### (1) 柚原向日線

当地点は、向日丘陵の西斜面に位置しており、丘陵下に広がる小畑川段丘面との比高差は約7mを測る。長岡宮内に含まれ、その西方官衙地区の北西部分に相当する。また、同丘陵の稜線上には、元稻荷古墳をはじめとする古墳時代前期に属する古墳群が立地しており、当該工事区間にも古墳の残欠ないしそれらに関する遺構・遺物の存在が予想された。

工事中の所見では、道路掘削面のすぐ下から、洪積層の地山と思われる赤褐色ないし暗茶褐色の礫を含む粘質土があらわれ、遺構・遺物等については確認されなかった。地形的には、南側が名神高速道路建設による土取りのため崖状になっており、本来の地表面はすでに流出あるいは削平されたものと考えられる。

### (2) 外環状線

当地点については、昭和51～59年度に、外環状線道路建設工事に伴って発掘調査が実施されている。今回の工事は、道路舗装工事が主体であり、立会調査としては工事の状況確認に留まった。

### (3) 向日善峰線

今回工事箇所は、地形的には小畑川の氾濫原にほぼ相当する。道路側溝部の掘削部分の所見では、最深部においても盛土造成範囲で止まっており、それ以下の土層を観察することはできなかった。

### (4) 大山崎大枝線

粟生光明寺の門前から西山丘陵の山麓線に沿って延びる道路で、周囲は竹林等が広がる。長岡京の右京外であるが、周辺には、旧石器時代から中世までの長期にわたる遺物・遺構が検出されている、井ノ内遺跡・石見遺跡等が存在する。

工事掘削面は、ごく浅い範囲に留まり、顕著な遺構・遺物等は検出されなかった。竹林の土入れ等のため、土層の攪乱は激しかった。

### (5)・(6)・(7) 長法寺向日線

当地点は、長岡京右京域に属し、地形的には小畑川の段丘面に位置する。周辺部には、今里遺跡・乙訓寺等の乙訓地域における代表的な遺跡が存在している。

今回の工事内容は、既設道路の側溝附設、歩道の拡幅等であった。

当箇所についても、掘削範囲はごく一部に留まり、土層観察等は充分にできていないが、遺構・遺物は確認されなかった。土層の観察によれば、置土と思われる状況であり、遺構面及び地山までは達していない。

## (8) 奥海印寺納所線

今回の立会調査地は、円明寺住宅団地に通ずる道路で、周辺部は東から西に向かって緩やかに傾斜する地形を呈している。また、調査地の北側には、段丘崖が東西方向に延びており、段丘下には小泉川が流れている。道路側溝工事による掘削範囲は、長さ約30m、幅約60cm、深さ約1mを測る。今回の立会に伴う作業としては、掘削面の土層断面の観察・図化及び写真撮影等を行った。その結果、上面には道路舗装のアスファルトが厚く見られ、それ以下は全て盛り土と判断された。すなわち、盛り土面は、上から第1層が厚さ約20cmの茶褐色粘質土、第2層が灰褐色粘土で厚さ約35cm、第4層は、茶褐色粘質土で厚さ約60cmを測る。以上のように、今回工事による掘削範囲からは、遺構・遺物等は検出することは出来なかった。

## (9) 下植野大山崎線

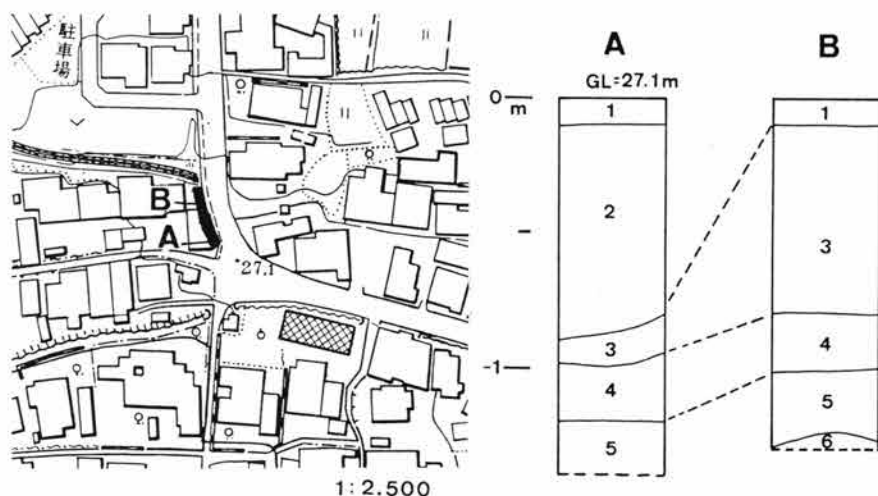
当地点は、下植野町の国道171号線に沿う道路で、一段高くなる北側段丘面の縁辺に沿った形状で道路面が敷設されている。周辺には、恵解山古墳、勝竜寺城跡等が位置している。

今回の立会調査は、国道171号線に接続する南北道路と東西方向に伸びる道路の2地点で実施した。南北道路面での掘削範囲は、長さ約20m、幅約1m、深さ約1.3mを測り、土層断面観察の所見では、上から耕作土・茶褐色土・黄褐色土の順に土層堆積が見られた。東西方向の道路面での掘削範囲は、長さ約10m、幅約2m、深さ約2mを測る。土層の堆



第2図 立会調査及び工事作業風景

1. 外環状線 2. 大山崎大枝線 3. 奥海印寺納所線 4. 椋原高槻線



第3図 中海道遺跡立会調査地及び土層柱状図

1. 攪乱層 2. 黄褐色砂礫層 3. 黄褐色土(礫混じり)  
4. 橙色粘質土 5. 灰色粘質土 6. 橙色粗砂

積状況は、上層が茶褐色土で、それ以下は全て黄褐色土の盛土であった。両地点とも今回の調査範囲からは遺構・遺物等は検出できなかった。

(10) 檜原高槻線(中海道遺跡)

今回の道路拡幅工事箇所が、中海道遺跡の一面に含まれることが判明したため、立会調査を実施した。中海道遺跡は、向日丘陵東麓の標高20~40mの下位段丘及び扇状地状地形を中心に分布する遺跡で、これまでの発掘調査によって弥生時代から古墳時代にわたる集落遺跡として知られている。遺跡は、京都市境に接する向日市物集女町中海道・御所海道・中条の地区を中心に直径約600mの広範囲に及んでいる。また、当遺跡の一面には、物集女城が所在しており、中世遺物も採集されている。

道路側溝の掘削に伴う土層観察によれば、工事区の北端では、地表下90cmまでが攪乱層、96cmまでが橙色土層、それ以下、暗青灰色粘質土(礫混じり)となる。中央部(土層柱状図B)では、地表下10cmまでが攪乱層、80cmまでが黄褐色土層(礫混じり)100~105cmまでが橙色粘質土、125cmまでが灰色粘質土、以下、粗砂となる。南端部(土層柱状図A)では、地表10cmまでが攪乱、80~90cmまでが黄褐色土層(礫混じり)、100cmまでが橙色粘質土、125cm以下が灰色粘質土となる。以上の表土攪乱層以下は、いずれも地山層(洪積層)と考えられる。すなわち、今回の工事区画内では従来から知られている黄褐色粘質土・暗褐色土及び黒褐色土層等の遺物包含層については、確認できなかった。また、土層観察の所見では、地山面は北方から南方へゆるやかな傾斜面をもつことが判明した。

(辻本・石尾・村尾)

## 2. 長岡京跡左京第124次発掘調査概要

(7ANENR地区)

### 1. はじめに

今回の調査は、向日町簡易裁判所庁舎等新営工事計画に伴い、当該地が長岡京跡の一部に当たっていることから、大阪高等裁判所から依頼を受け、行ったものである。調査は、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課の主任調査員 辻本和美・同調査員 村尾政人が担当した。調査に関しては、京都府教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・財団法人長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センターの方々の御協力と御指導を賜った。また、<sup>(注1)</sup>補助員・<sup>(注2)</sup>整理員として有志学生の協力を受けた。

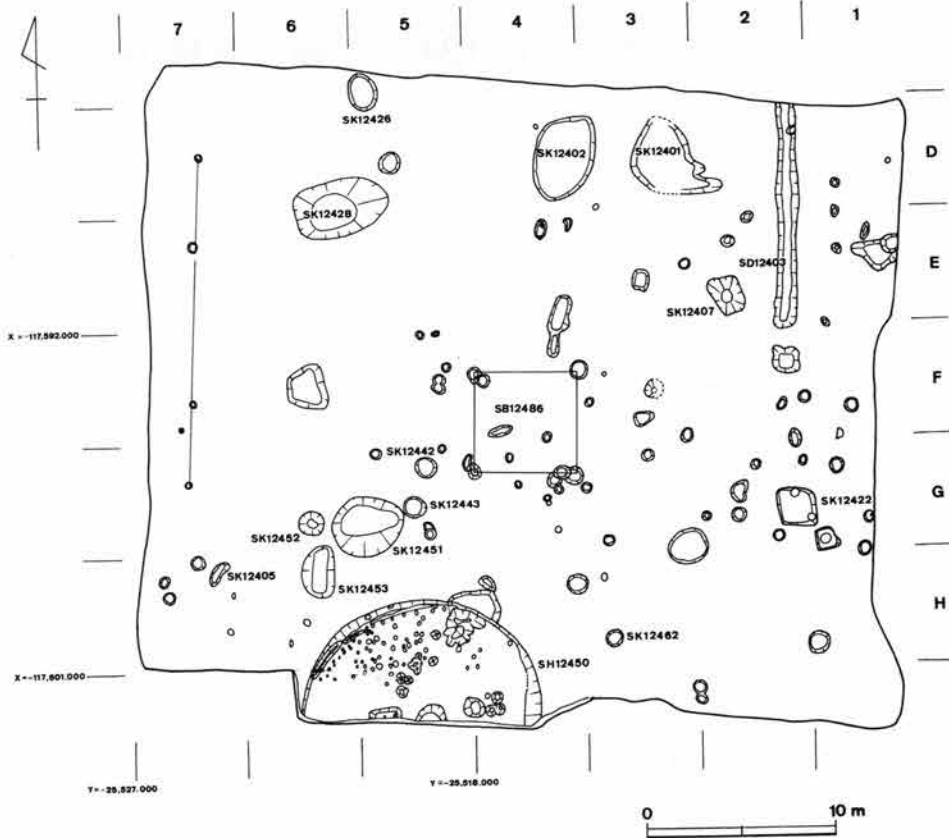
調査地は、向日市鶏冠井町西金村5番地にあたる。裁判所予定地面積は、約2,280m<sup>2</sup>ある。発掘調査は建物部分を主な対象として実施した。



第4図 調査地位置図 (1/5,000)

当該地は、長岡京跡の左京二条三坊八町に当り、近接して東側には東三坊坊間小路が予想される。また、当地の真西方向約200mに位置する長岡京跡左京第100<sup>(注3)</sup>次調査においては、左京第82次調査出土の墨書土器の検討から、左京二条三坊一<sup>(注4)</sup>町の地が車持氏の邸宅跡と推定されている。昭和59年度に行われた舞鶴倉庫建設に伴う調査では、長岡京期の遺構は検出しなかったが、弥生時代中期の溝が1条確認されている。さらに西側の国道171号線の立会調査においては、縄文式土器片が出土していることから、弥生時代の鶏冠井遺跡及び、それ以前の遺跡の範囲に該当することが予想される。縄文時代の遺跡としては、近接して石田遺跡があ





第5図 遺構平面図

り、それらに関連する遺跡と考えられる。弥生時代の遺跡としては、弥生時代前期の最も古い段階に位置する雲宮遺跡がある。この遺跡は、淀川水系をつたわって、山城地域にいち早く稲作が伝播したことを物語るものである。さらにこの伝播は、近接する弥生時代前・中期の鶏冠井遺跡や森本遺跡・神足遺跡へとひろがり、集落の規模は拡大してゆく。鶏冠井遺跡は、第1次調査(1962年)において弥生時代前期の集落跡であることが確認され、第2次調査においては銅鐸の鋳型が出土するなど、山城地域における拠点集落であったことがうかがわれる。

なお、本概要は、出土遺物の石器類を黒坪・平野が、ほかを村尾が執筆した。

## 2. 調査概要

調査は、昭和60年5月8日から建物予定地 512㎡ を重機によって掘削を開始した。厚いコンクリートと盛土・耕作土等を除去し、人力により掘削した。

調査地には、旧耕作土の上に約2mの盛土が昭和10年頃にされているため、その盛土の

搬出作業を行った。旧耕作土の下位に茶褐色土層の床土が約20cmあり、その下位の淡灰褐色粘土層の面において南北方向に走る中世素掘溝等の遺構を検出した。これらの中世の遺構面を約10cm掘削したところ、長岡京期の土壇・溝・柱穴等を検出した。しかし、この長岡京期の明確な建物跡や、それに伴う条坊等の検出はできず、少数の遺構の確認にとどまった。さらにこの長岡京期の土層面を精査したところ、わずかに下位の黄褐色粘土層に切り込まれた弥生時代の竪穴式住居跡・土壇・柱穴等を検出した。

弥生時代の遺構は、黄褐色粘土層を切り込んだものであるが、部分的に調査地の南西方向ではこの黄褐色粘土層はなく、粗い砂礫土層に切り込まれたものであった。このような状況にあるのは、本調査地が桂川の氾濫原上に位置していたことを物語るものである。すべての遺構を掘削し、写真撮影・図面作成の後、昭和60年8月5日に関係者説明会を実施した。最終的な調査として、黄褐色粘土、暗青灰色粘土層の断割を行った結果、小片の縄文式土器片が出土した。すべて流れ込みの遺物であり、遺構は確認できなかった。

### 3. 検出遺構

今回の調査により検出した遺構は、大きく分けると時期的に弥生時代・長岡京期・中世に3分類される。弥生時代は、中期の円形住居跡・土壇・柱穴群、長岡京期は、土壇・溝・柱穴群、中世は、南北方向の素掘溝群・柱穴等がある。

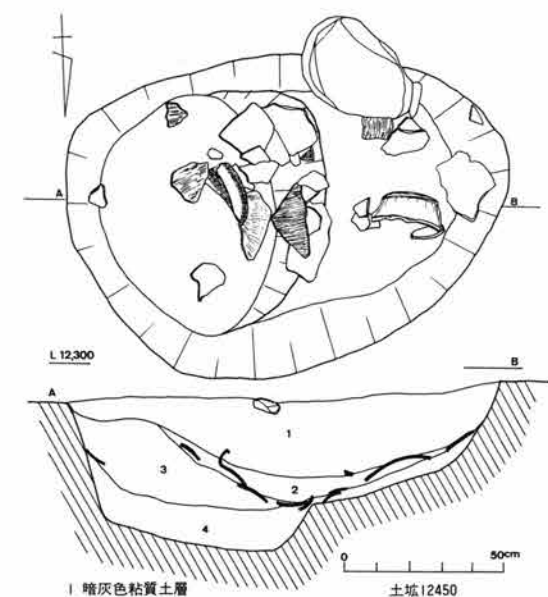
以下、各遺構について列挙する。

#### (1) 弥生時代の遺構

##### 竪穴式住居跡(SH12450)

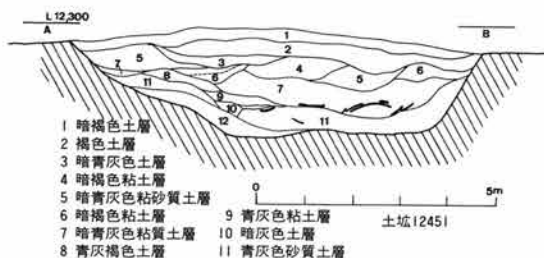
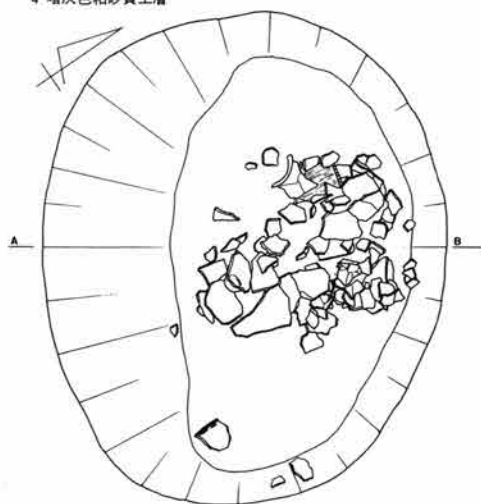
住居跡SH12450はI4～6地区において北側の半分だけを検出した。住居跡の平面形態は円形を呈するものである。規模は直径が約10mを測る大型のものである。壁の残存部分は東壁で約30cm、西壁で約12cmを測る。周溝は全周せずに西北部分にある。北壁部分においては、沿った状態で周溝がめぐるが、西壁においては少し内側をめぐる。周溝の規模は、幅約10cm、深さ約13cmを測る。住居跡内では、柱穴跡と考えられるものが15か所検出したが、支柱と考えられる明確なものは不明である。

住居跡の中央に位置する土壇SK12450は、直径約1.3m、深さ0.5mを測る。土壇内には弥生土器・台石・炭・焼土等を含んだ暗灰色粘土層が堆積していた。弥生土器(第8図6・7・11、第9図16)が出土した。台石は土壇の上面に埋まっていた。石材はチャート質のもので、扁平な長方形を呈する。この土壇は、焼土・炭等を含むことから、炉跡と考えられる。住居跡内からは他に弥生土器(第9図18・19)とサヌカイト質のスクレパー(第11図2)・剥片等が少量出土した。



- 1 暗灰色粘質土層
- 2 黒褐色粘土層
- 3 暗褐色粘砂質土層
- 4 暗灰色粘砂質土層

土坑12450



- 1 暗褐色土層
- 2 褐色土層
- 3 暗青灰色土層
- 4 暗褐色粘土層
- 5 暗青灰色粘砂質土層
- 6 暗褐色粘土層
- 7 暗青灰色粘質土層
- 8 青灰色褐色土層
- 9 青灰色粘土層
- 10 暗灰色土層
- 11 青灰色粘砂質土層

土坑12451

第6図 土坑12450・12451平面・断面図

### 土坑(SK12451)

竪穴式住居跡SH12450の北西に隣接している土坑である。平面形態は楕円形を呈する。規模は長径約2.17m, 短径約1.6m, 深さ約0.5mを測る。埋土は暗褐色粘土と暗茶色細砂質土, 暗灰色粘土の約3層からなり, 埋土中には炭を含んでいた。出土遺物は, 弥生土器(第8図2~5・8・10, 第9図12~15・17)が出土した。時期は出土遺物から住居跡SH12450と同時期の弥生時代中期(第Ⅱ様式)である。

### 土坑(SK12452)

土坑SK12452の西側に隣接している小形の土坑である。平面形態はほぼ円形を呈する。規模は直径約0.6m・深さ約0.23mを測る。埋土は暗茶褐色粘土層である。出土遺物は弥生時代中期前半(第Ⅱ様式)の甕(第8図9)が出土した。

## (2) 長岡京跡の遺構

### 土坑(SK12401)

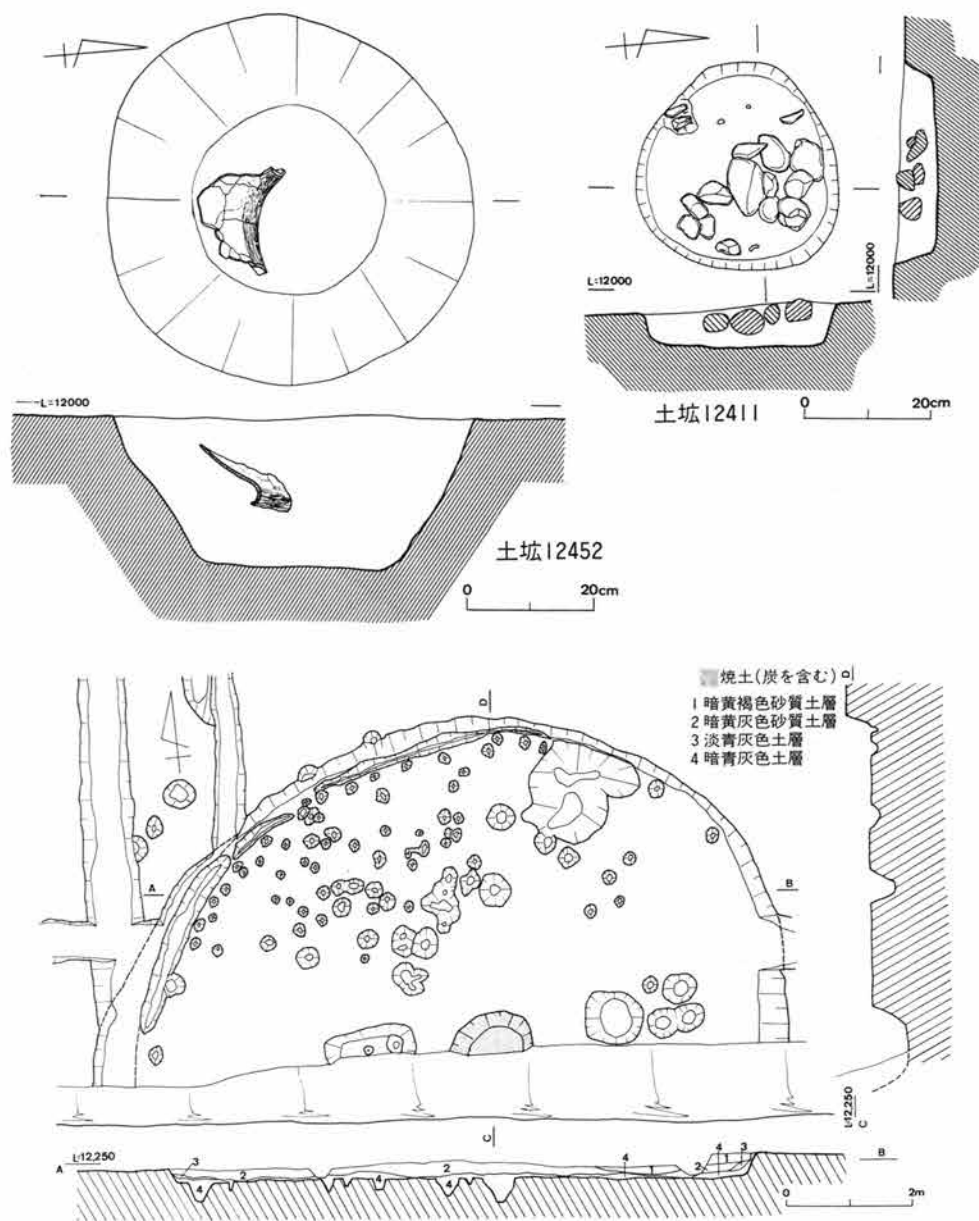
この土坑は平面形態が半月状の不定形を呈するものである。土坑の断面からは推定できないが, 平面形態から南北に長い楕円形の土坑と東西方向に長い楕円形土坑が切り合っている可能性がある。

規模は長さ約2.7m・幅約1.7m・深さ約0.1mを測る。埋土は, 青灰色粘土層である。出土遺物は,

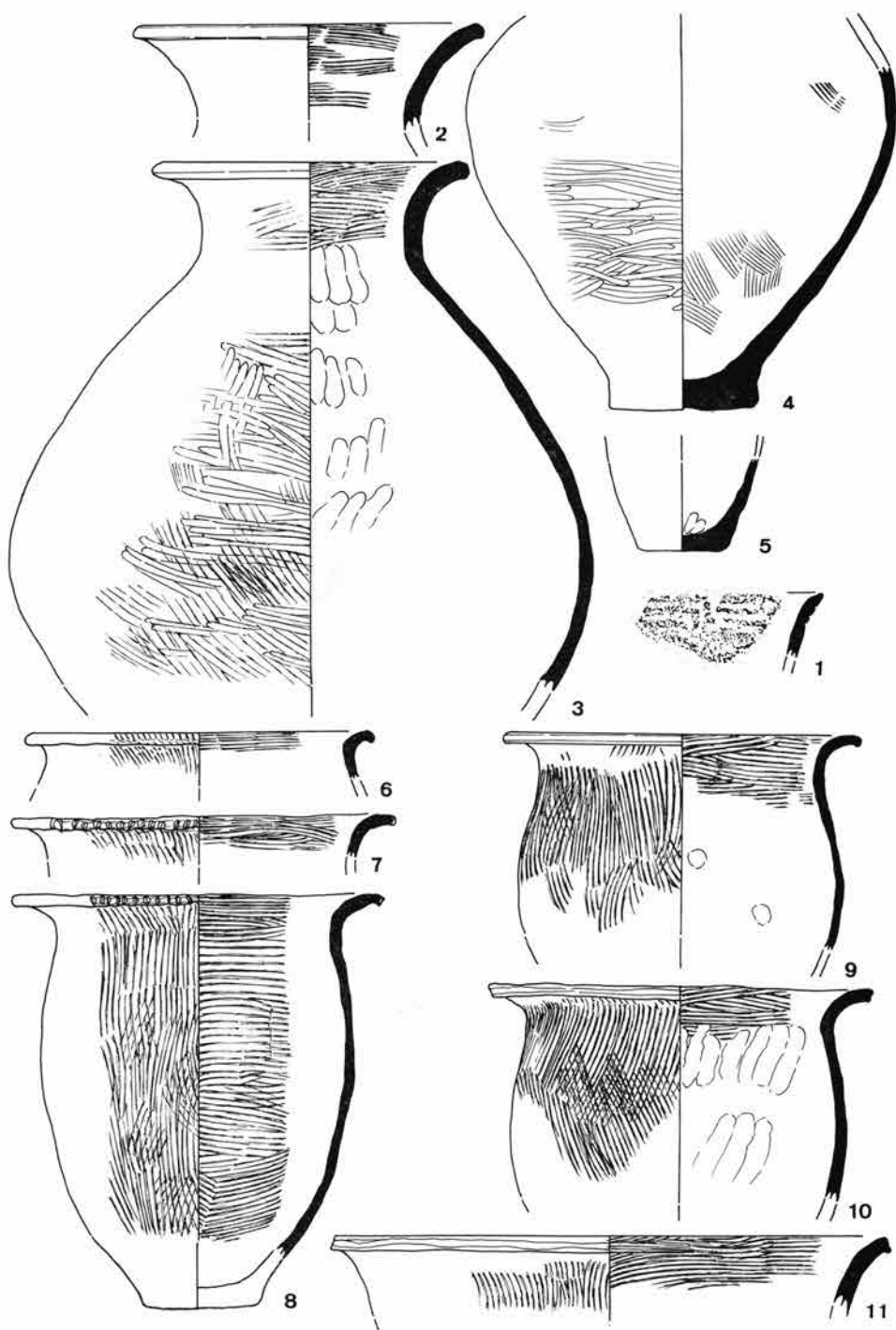
須恵器の大型甕(第10図20)が南北方向に押しつぶされた状態で検出された。

土壇(SK12402)

土壇SK12401の西側に近接しているものである。平面形態は楕円形を呈している。規模は長径が約2.2m・短径約1.6m・深さ約0.2mを測る。埋土は青灰褐色粘土層であるが、炭と焼土を多く含んでいた。土師器、須恵器(第10図21・22)・瓦片等が出土した。

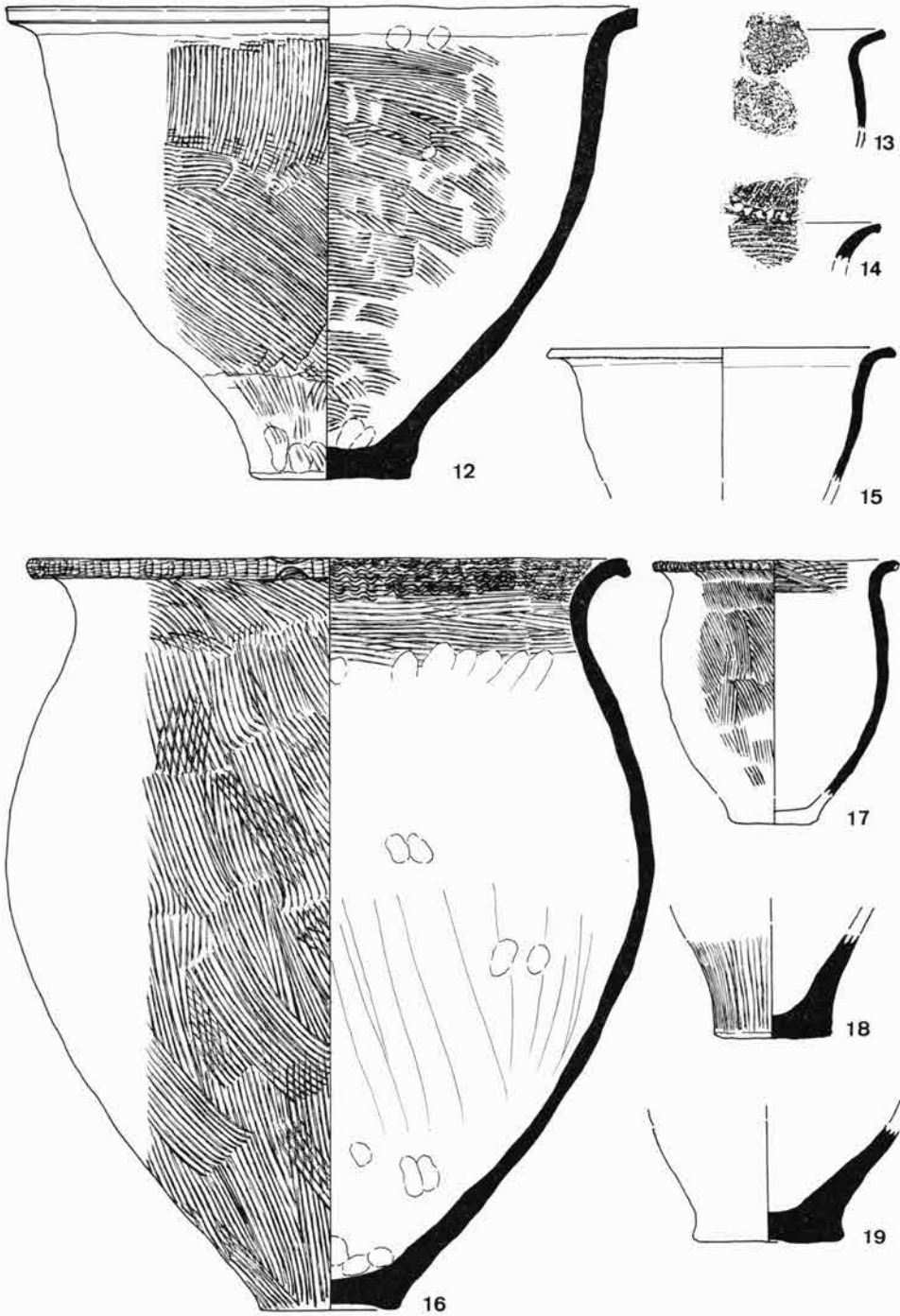


第7図 土壇12411・12452, 竪穴住居跡12450平面・断面図

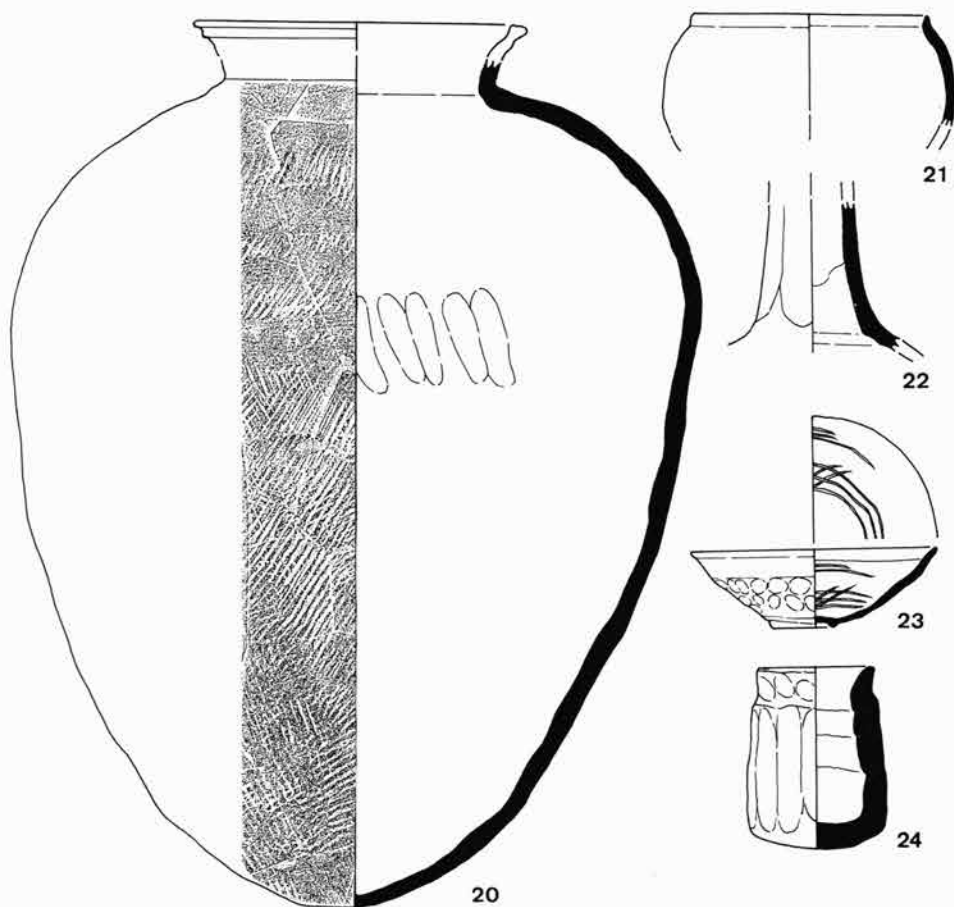


第8図 出土遺物実測図(1)

遺物包含層(1)・SH12450(6・7・11)・SK12451(2~5・8・10)・SK12452(9)出土土器



第9図 出土遺物実測図(2)  
SH450(16・18・19)・SK12451(12~15・17)出土土器



第10図 出土遺物実測図(3)

SK12401(20)・SK12402(21・22)・SD12415(23)・遺物包含層(24)出土土器

#### 溝(SD12403)

D～F 2 地区において南北方向に走る溝である。しかし、F 地区においては南側へ続かずに途切れている。

規模は幅約0.5m・深さ約0.2mを測り、検出した長さは8mを測る。埋土は青灰褐色粘土層の単一層である。出土遺物は認められなかったが、直径約5cmの円礫の石が散乱した状態で含まれていた。

#### 柱穴群

長岡京期の柱穴は全体の柱穴群の中でも少数である。平面形態は方形を呈するものと円形を呈するものがある。規模は方形のもので一辺が約0.6m・深さ0.2mを測る。円形のものは直径が約0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は青灰褐色土層である。

#### (3) 中・近世の遺構

## 中世素掘溝(SD12401～12415)

素掘溝は総数が12条を数えるが、すべて南北方向に走るものである。規模は長いもので全長22mを測る。幅は約0.4m、深さ約0.2mを測る。埋土は灰褐色粘土層の単一層である。出土遺物は、瓦器碗(第10図23)、土師器皿片等がある。

## 4. 出土遺物

出土遺物は縄文時代後期・晩期の土器、弥生時代中期の壺・鉢・甕、土師器、須恵器、瓦器等があるが、全体に量は少ない。この中でもっとも注目すべきものとしては弥生時代の土坑・住居跡内から出土した一括資料と長岡京期の土坑から出土した一括資料である。時代的に大きく分けると弥生時代中期前半(第Ⅱ様式)と長岡京期・中世の遺構内から出土したものが大半で、包含層から出土した遺物は非常に少ない。

以下、主要な出土遺物を時期別に列記する。

## (1) 土器類

## 縄文後期の土器(第8図1)

暗青灰色粘土層の遺物包含層内から出土した小破片で、いずれも遺構に伴わない。(1)は緩やかに外反した口縁部である。口縁端部に平行した3条の沈線がめぐる。破片のほぼ中央で上端の沈線は下端の沈線へつながり、沈線間には磨消縄文を施している。

## 縄文晩期の土器(図版第5-1・2・3)

後期の土器と同じく暗青灰色粘土層から出土した破片である。胴部から滑らかに口縁部へと外反したものである。胎土は暗茶褐色を呈し、細い砂粒を多く含んでいる。滋賀Ⅲ式に類似している。

## 弥生土器(第Ⅱ様式)(第8図2～11, 第9図12～19)

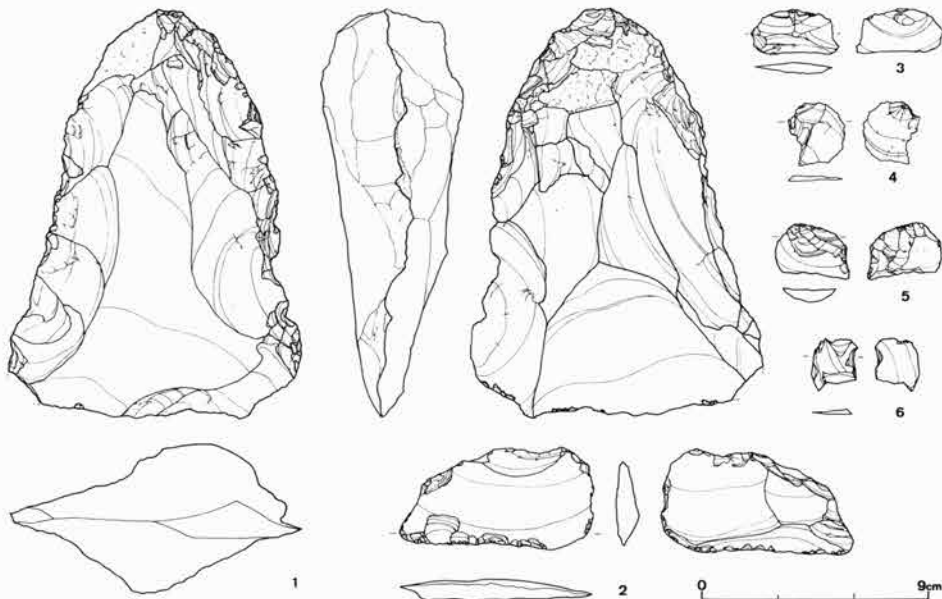
壺(2～4・19) 口縁部が短く外反し、球形の体部をもつb形態を呈する(2～4)がある。(2)は無文の口縁部である。口縁端部は丸くおさめている。(3)は球形の体部を呈するが最大径が中心より下半に位置する。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめている。(4)は底部から球形に張った体部である。いずれも無文の壺である。調整は外面に横方向のヘラミガキ、横方向のハケを施し、内面上半は横ハケを施している。(19)は壺の底部である。内・外面の調整は不明である。

鉢(12・15) 大型の鉢(12)と小型の鉢(15)がある。(12)は体部から口縁部にかけて緩かにのび、短く外反した口縁部をもつ。口縁端部に面をもち、無文である。調整は体部上半に縦方向、中位から下半にかけては斜め方向のハケを施す。内面は横方向にハケ目を施す。(15)は体部から緩かにのび、短く外反した口縁部をもち、端部は面をもち無文である。



甕(5・11・13・14・16～18) 口縁部から体部にかけて倒鐘型を呈する甕である。大型のもの(11・16)と小型のもの(5・10・13・14・17・18)がある。口縁部は巻き込んだ状態のもの(6～9・14・17)と端部に面をもったもの(10・11・13・16)がある。(6～10・14・17・18)はいわゆる大型の甕である。(6)は口縁部が強く折り込んだ状態のもので、外面に縦方向、内面に横方向の粗いハケを施している。口縁端部には細い刻み目を施している。(7・8・14・17)はあまり張らない体部をもつ。(8)は内面のハケが下半にまで及んでいる。口縁端部には粗い刻み目を施している。(9・10)はわずかに体部の張った甕である。口縁端部に刻み目をもたない無文のものである。(9)は口縁端部を丸くおさめている。(10)は端部に面をもつ。(11・16)は大型の甕である。口縁端部に面をもち、わずかに下方へ拡張気味である。(16)は体部外面に縦方向、内面横方向の粗いハケを施し、口縁部内面には一部に波状のハケ目を施している。口縁端面には、ハケによる簾状文と1か所に口縁端部を上下から摘んだ押圧痕を施している。体部の径が口径を凌いだ腹部の張ったものである。(13)は倒鐘型を呈した無文のもので、口縁端部に面をもっている。(5)は小型の甕の底部である。底部から体部にかけてあまり張らない。(18)は甕の底部である。外面に縦方向の粗いハケを施している。

土師器(第10図21・22) 土師器の出土点数は少く、図化できるものは2点しかない。(21)は球形の体部からわずかにつまみ上げられた口縁部をもつものである。(22)は高杯の脚台柱状部である。外面に面とりを行い、内面にしほり痕を残す。



第11図 石器類実測図

須恵器(第10図20) 底部が小さく、先底気味の丸底である。体部は長胴を呈する。口縁部は欠いている。体部外面にタタキ痕を残すが、内面はすべて横ナデを施す。

瓦器椀(第10図23) 器高が低く、底部には小さな高台がついている。

塩壺(第10図24) 器壁の厚い筒状の体部と上方へつまみ上げた口縁部をもっている。

## (2) 石器類

石器類の出土点数は少なく、わずか10点を数えるにすぎない。

器種の内訳は、撿形打製石斧1点、横形削器1点、剥片8点である。すべて讃岐石(サヌカイト)を石材としている。横形削器は堅穴式住居跡(SH12450)内、撿形打製石斧はSH12450に近接した4H区、そして剥片はすべて土塚(SK12451)内から出土したものである。特に剥片の出土状況は、土塚中に集めて廃棄されたことがうかがえて興味深い。

撿形打製石斧(第11図1)は、長さ16.3cm、幅11.5cm、厚さ5cmを測る。両側縁部には、細かな潰れ痕が部分的に観察され、荒けずに叉状剥離痕を形成している。この両側縁部が刃部として使用された可能性は高い。また先端(刃)部は、腹面側からの1撃で大きく取られた剥離面により作り出され、基部には自然面がわずかながら残り、整形のための階段状剥離痕が多く認められる。重量は755gもあり、極めて大型の万能石斧であると言える。

横型削器(第11図2)は長さ4cm、幅7.6cm、厚さ0.9cmである。薄い横長の剥片を素材に、片側の長辺部に刃部を造り出す。主に背面側からの打撃による細かな剥離痕が腹面側につけられ、刃部としている。また、片側短辺は素材の関係で極めて薄くなっており、こも刃部として使用したのであろう。重量は45gである。

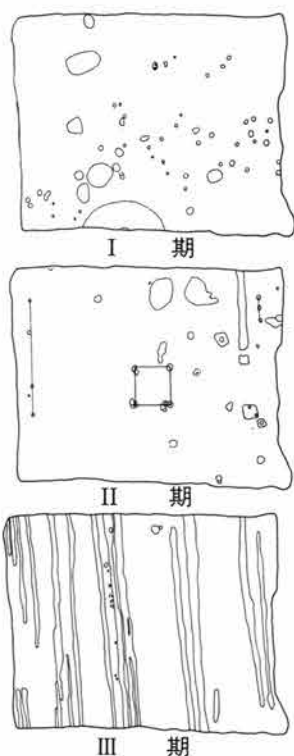
剥片(第11図3～6)は、図化していない4点の資料をも含めて、すべて小片である。いずれも二次的な使用痕および加工痕を認め得ないものである。法量を平均値にて示すと、長さ1.9cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm、重量2.2gを測る。

## 5. ま と め

今回の調査地は、長岡京二条三坊八町の推定地であるとともに、弥生時代の集落跡である鶏冠井遺跡にあたる。

今回の調査で検出した遺構は、3時期にわたる。これらをⅠ～Ⅲ期として図化(第12図)して、この調査地の変遷を試みたところ、次の事柄が判明した。

第Ⅰ期の弥生時代の面においては、住居跡周辺から北東にかけて柱穴群の分布がみられ北西側には確認されない。地質の方面から推定した自然堤防上の微地形が南東方面に高く、北西方面が低い事からも、この柱穴群の分布と一致する。つまり、調査地の南東方向に集落等が拡がり、北西方向には谷状地形があるため、遺構が少ないと考えられる。



第12図 遺構変遷図

また、弥生時代については、前回までの鶏冠井遺跡の調査で多数のピット・溝内からの遺物の出土、銅鐸の鋳型の出土等から集落の存在が予想されていたが、住居跡は確認されていなかった。今回検出の円形住居跡は、鶏冠井遺跡の広がりや、この地に中期前半(第Ⅱ様式)の集落が存在し、さらにこの地から南側に広がっているものと考えられる。

第Ⅱ期は、長岡京期の遺構である。南北方向にのびる溝と建物、柱穴がある。溝は東三坊坊間小路の西側溝と当初予想されたが、溝が南側に続かず途切れている点や、溝の両側に長岡京期の柱穴が確認できることから東三坊坊間小路以外の何らかの溝と判断した。

第Ⅲ期は、南北方向に走る中世素掘溝である。溝内から終末期の瓦器椀が出土していることから、鎌倉時代以降のものである。

出土遺物は全体に少ないが、その中でも土塚・住居跡から出土した弥生土器の一括資料は注目される。今回の出土した弥生土器の中には、前期のヘラ描文と中期の櫛描文が1点も出土していないことから、第Ⅱ様式の前段階に位置

づけられる。壺は長胴化した無文のものばかりで、第Ⅰ様式新段階のものとはほとんど同一であるが、甕においてはすべて体部内・外面に粗いハケを施した大和甕である。

これらの出土遺物や、鶏冠井遺跡における住居跡の発見は、この地域の弥生時代を知る上で大きな役割をはたすものである。(黒坪一樹・平野仁佳子・村尾政人)

注1 鶴島三寿・太田友康・酒井珠里・鈴木良章・詫摩恵子・中村美也・野々村寿良・林 洋一・藤澤達也・藤原ひとみ・平野仁佳子・吉田野乃・松山智昭

注2 澤田尚子・土屋桂子・野田侑記子・室田博子

注3 山中章「長岡京跡左京第100次(7ANEND地区)=左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第3次～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集 向日市教育委員会) 1984

注4 注3と同じ

注5 佐原 真「山城における弥生文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細別と雲の宮遺跡出土土器の占める位置」(『史林』50-5) 1967

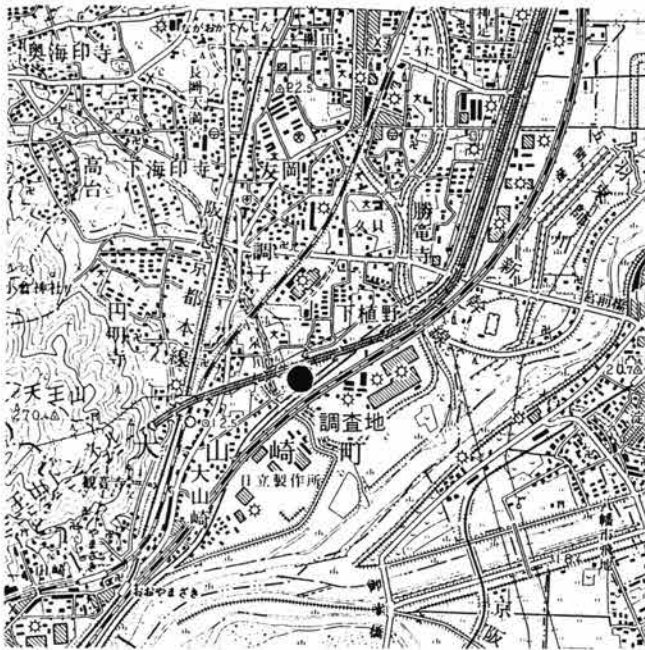
### 3. 長岡京跡右京第206次発掘調査概要

(7ANSKT-2地区)

#### 1. はじめに

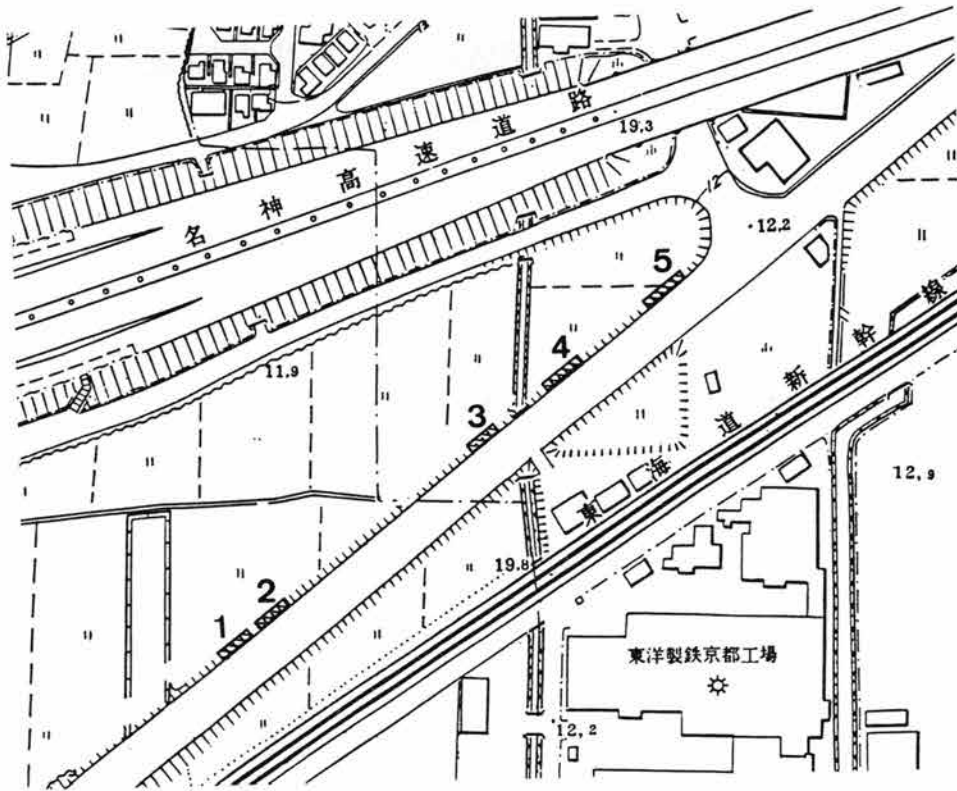
この調査は、国道171号の歩道設置工事に伴う事前調査である。発掘調査対象地は、京都府乙訓郡大山崎町大字円明寺小字門田から、大字下植野小字五條本にあり、対象地をほぼ南北に流れる水路が大字界となっている。調査は、昭和60年9月9日から12月19日までの間、建設省の委託を受けた当調査研究センターが主体となって実施した。調査の開始から終了まで3か月余りが経過しているが、工事の進行にあわせて現地に入るため、実際には、3回に分けて断続的に調査を行っている。

調査地は、国鉄東海道本線「大山崎」駅の北東約2kmの位置にあり、本来水田として利用されていたが、宅地化が進み、耕作地は減少の一途をたどっている。京都盆地の南端部にあたり、東に石清水八幡宮の鎮座する男山、西に天王山が迫り、近傍で桂川・宇治川・木津川の3河川が合流している。遺跡としては、長岡京跡の最南部にあたり、条坊推定復



第13図 調査地位置図 (1/50,000)

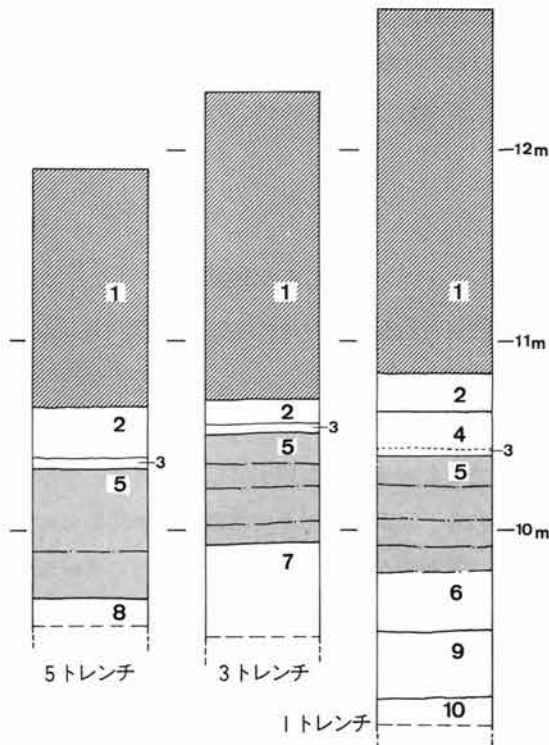
元によれば、調査対象地内を九条大路が東西に通り、南北道では、西一坊大路が対象地東端付近で九条大路に接する位置であるが、桂川あるいは、その支流の小畑川、小泉川に挟まれた沖積地であり、不確定な要素も残している。また縄文時代以降の集落地である宮脇・松田遺跡にも重複し、長岡京、平安京の玄関口ともいえる山崎津があり、さらには、平安時代に移されてきた国府にも近いという環境にある。



第14図 トレンチ配置図 (1/2,500)

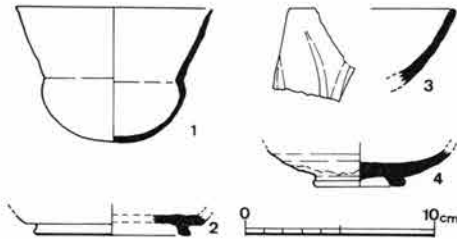
## 2. 調査概要

工事対象区間は、国道171号西縁に沿って、主に小泉川から小畑川に至るまでの間であったが、発掘調査は、周辺の諸条件によって、耕作地に面した部分を対象として実施した。調査地は、幹線道路の縁辺部にあたるため、一部には、下水道、電柱、広告塔などの構築物が設けられていた。またこの調査は、工事の性格上、道路境界の内側で、現道路面までが中心となり、主に道路盛土法面を掘削する形となった。トレンチは5本入れ、便宜上、南面から第1～第5トレンチとした。各トレンチの基本的な土層は、道路側で1.2～1.9mの盛土以下耕作土、黄灰色粘質土（床土）灰褐色粘質土があり、その下層はトレンチによって異なっている。灰褐色粘質土は中世以降に推積したものであり、地点によって厚さが変化している。その中で、砂粒の多少、若干の色調の明暗によって、さらに細分することができるが、その変化は、中世から、水田化と再堆積を繰り返していた痕跡と考えられる。第1・2トレンチでは、灰褐色粘質土の下層に淡青灰色砂層、暗灰色粘質土層が堆積し、後者から、古墳時代の小型丸底土器が出土した。この層は、長岡京右京188次調査においても認められた古墳時代前期を中心とする遺物包含層と考えられるが、当調査で確認し得



第15図 各トレンチ土層柱状図

- 1 道路盛土 2 耕作土 3 黄灰色粘質土層  
 4 灰色砂質土層 5 灰褐色粘質土層 6 淡青灰色砂層  
 7 暗灰褐色砂礫層 8 茶褐色粘質土層(混礫)  
 9 暗灰色粘質土層 10 灰褐色砂礫層



第16図 出土遺物実測図

- 1 土師器 2 須恵器 3 磁器 4 陶器

た範囲では、遺物の出土量は少量であった。第3トレンチでは、下層に極めて硬い砂礫層が堆積し、その上面に張り付くように少量の遺物が認められた。4・5トレンチでは、灰褐色粘質土層直下に量の多少はあるものの、砂礫を包含する層があり、それ以下にまた、粘質土層が続くという状態を示していた。第5トレンチでは、灰褐色粘質土中で、ほぼ東西に掘り込まれた溝を検出したが、溝内からの出土遺物は皆無であった。この溝は、地表面で、現在も使用されている畦畔に重なっており、周辺の出土遺物からも、中世以降に掘削されたものと考えられるが、時期を限定することはできなかった。

### 3. 出土遺物

第1～第5トレンチを通して出土した遺物には、古墳時代以降、近世に至るまでのものが断片的に見られるが、小破片が多く、その全体を復元できるものは極めて少い。出土遺物を、所属時期に関係なく列挙すると、土師器、須恵器、瓦、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器がある。古墳時代に属するものには、小型

丸底壺、後期の須恵器杯蓋などがあり、主に第1・2トレンチから出土している。小型丸底壺は、口径10.3cm、器高7cmを測るもので、表面はやや風化している。胎土は緻密であり、焼成も良好で、色調は表面黄灰色を呈するが、破断面では、暗茶褐色である。第16図2は、須恵器杯B底部で第4トレンチから出土した。3は、青磁碗の口縁部破片で淡緑色の口縁部破片で淡緑色の釉が施されている。外面に蓮弁を有しているが、蓮弁は、稜を持たず、輪郭も十分には完結していない。中国からの輸入品と考えられる。4は、内外面と

もに灰釉の施された椀の底部である。釉は底部外面までは及ばず、体部下半には、ロクロによる削り調整の痕跡を残している。そのほかの遺物には、長岡京期に前後する頃のものとして、土師器杯、須恵器杯A・Bや杯蓋、鉢があり、鎌倉時代以降のものとして播鉢などが出土している。

#### 4. おわりに

今回の調査は、トレンチ底で幅1m前後という限られた面積の調査であったため、顕著な遺構は確認できなかったが、各時代の遺物包含層がこの付近にまで及んでいることが判明した。この周辺は近年まで、周辺の大小河川の氾濫原と考えられ、古代の集落等の存在は考えられていなかったが、長岡京右京第87次<sup>(注2)</sup>、169次<sup>(注3)</sup>、188次<sup>(注3)</sup>、192次等の調査によって天王山裾から東方に広がる低位段丘がのびてきていることが確実となってきた。その微高地に立地しているのが、宮脇・松田遺跡であり、当調査地もその縁辺の一面にあたっている。しかし、この低位段丘の終息する状況は不明瞭な点もあり、今後の調査の進展によって具体化していかなければならない側面を残している。この付近の土砂の堆積は極めて激しく、山崎津第4次調査<sup>(注4)</sup>では地表下4mから古墳時代の遺物が出土し、小泉川右岸の右京第192次調査では地表下約3.5mで古墳時代の住居跡が検出されている。また近年、対岸の八幡市で調査された木津川河床遺跡<sup>(注5)</sup>や新田遺跡<sup>(注6)</sup>で古墳時代の集落が検出され、さらに木津川河床遺跡周辺のボーリング調査では約8m下位に有機物を含む層があり、城陽市では浄水場工事の際、地表下約13mから樹幹が出土している<sup>(注7)</sup>。このように、京都盆地南部は縄文時代以降をとっても膨大な土砂の堆積が見られ、現在、一見平坦な沖積地であるが、その中の多少の起伏を持つ土地に、数多くの集落等の存在したことが確実視されてきている。しかし各時代の景観は、現状でおしはかることのできない程変化している部分もあることが類推され、遺跡・自然地形ともども、その復元は今後の課題である。調査にあたって、数々の御協力を賜った大山崎町教育委員会・国体室・下水道課、隣接地の所有者小山助雄氏をはじめとする関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。(長谷川 達)

注1 現地調査は、当調査研究センター主任調査員長谷川達、同調査員竹原一彦・石尾政信が担当し、補助員として、城田正博が参加した。

注2 竹井治雄「長岡京跡右京第87次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報第3冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注3 大山崎町教育委員会、林 享、近沢豊明氏の御教示による

注4 引原茂治「山崎津第4次調査概要」(『大山崎町文化財調査報告第4集』)1984

注5 昭和57年度以降の調査によって、古墳時代を中心として遺構・遺物が検出されている。

注6 奥村清一郎「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』京都府教育委員会) 1984

注7 石田志郎・山田 治・伊東隆夫「城陽市第3浄水場建設に伴う樹幹の出土」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書第10集』城陽市教育委員会) 1981

## 4. 木津川河床遺跡昭和60年度発掘調査概要

### 1. はじめに

木津川河床遺跡は、京都府南部地域にあっては最大規模の低湿地遺跡であり、弥生時代から江戸時代に至る複合遺跡でもある。近年に入って、本遺跡内に京都府洛南浄化センターが建設されることになり、昭和57年度の試掘調査を第1次として、以後年度毎に発掘調査を実施してきた<sup>(注1)</sup>。その結果、弥生時代～古墳時代初頭の土器溜り、古墳時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、中世～近世の田畑に伴う東西・南北走る溝などの諸遺構を検出するとともに、弥生土器・土師器・須恵器・金環・中国製陶磁器・国内産陶磁器・土馬・滑石製石鍋など、多種多様な遺物が多量に出土するに至った。

今年度は3地点の発掘調査と3,700mの立会調査を行うべく昭和60年4月23日から着手し、断続的ではあるが11か月の長きにわたった。調査は、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課調査員 岩松 保が担当し、同主任調査員 松井忠春が補助した。<sup>(注2)</sup>

(松井忠春)

### 2. 歴史的環境

木津川河床遺跡は、国道1号線木津川大橋付近より宇治川・桂川と合流する地点に至る木津川河床内約4kmを中心とする範囲を持つ。これは、明治2年の河川改修によって流路が変えられ、河床内に没したものである。

木津川は、三重県布引山地にその源を発し、京都府南部の笠置山系を縫い南山城平野に流れ出す。そして南北に長い平野部をその流れで東西に分割しつつ、久御山町付近で流れを西に変え、男山丘陵と天王山が対峙した狭部で桂川・宇治川と合流する。この地点は京都盆地と山城平野を流れる河川が収束される地であり、流路が主要な交通路とされる原始・古代にあっては、またこの地は道の収束されるところでもあった。

男山丘陵は鳩ヶ峰(男山142.5m)を最高峰とする孤立山地であり、その地質は秩父古生層を基層として、南部の丘陵地と裾野の台地は大阪層群で構成される。この丘陵及び台地には大小の開析谷がみられ、それらが形成した扇状地が連続して丘陵を縁取っている。これらの丘陵・台地・扇状地から流れ込む土砂により、木津川は沖積地を形成した。沖積地は洪水の度に水に洗われるような氾濫原であり、条里制地割がよく残っているもの(氾濫原Ⅰ)とそうでないもの(氾濫原Ⅱ)に大別できる。<sup>(注3)</sup> 氾濫原Ⅱは氾濫原Ⅰより低位で、条里制地割の乱れにより中世以降も頻繁に洪水に見舞われたものと思われる。木津川は古来より



流路が一定しない「暴れ川」的性格を持ち、周辺の集落は大水の度に甚大な被害を受け、移動・消失したと考えられる。八幡市周辺の低地の所々に微高地が認められ、その周辺に土器の散布地が広がっているのは、このためと考えられる。木津川流域の低地性集落を考える上で、旧流路を復原する試みは、表層地質・沖積低地の発達を捉える試みと表裏一体とな<sup>(注4)</sup>って、重要な視点となるものである。

次に、南山城の遺跡を弥生・古墳時代に重点を置いて概観してみたい。

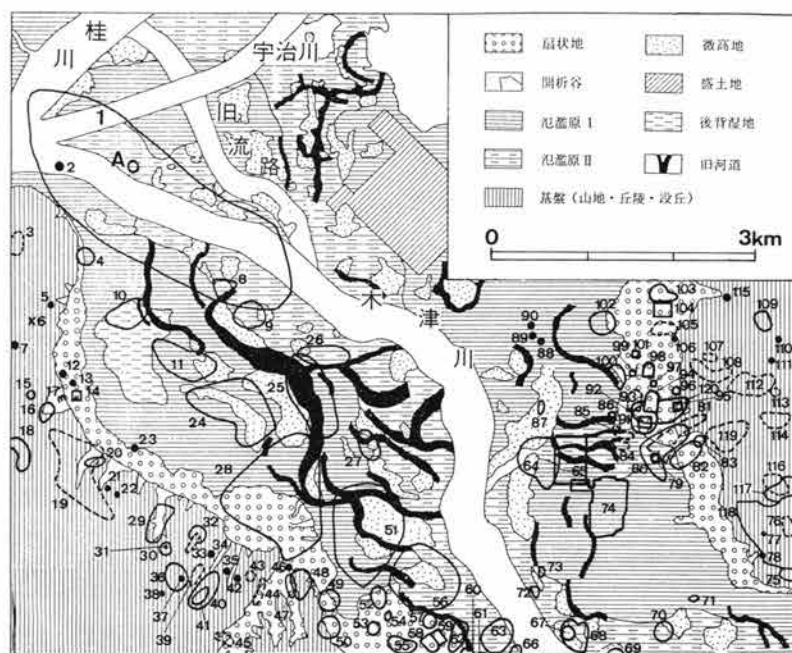
弥生時代前期の遺跡は、後に紹介する中・後期の遺跡に比べてほとんど知られていない。わずかに、相楽郡木津町燈籠寺遺跡より数点の土器片が報告されているのみである。

中期以降には遺跡は急増する。平野部縁辺の丘陵地・台地上の各地に集落が形成される。これらは当時の集団間の緊張関係を背景とする、防衛的・軍事的性格を備えた、いわゆる高地性集落である。八幡市幣原遺跡・城陽市森山遺跡・田辺町飯岡遺跡・同天神山遺跡などが挙げられ、向日市北山遺跡・宇治市羽戸山遺跡などと共に密接な関わりを持つと思われる。高地性集落と並行して低地にも集落が営まれている。木津川河床遺跡や八幡市新田遺跡からは発掘調査により後期の土器が出土している。また、八幡市式部谷からは突線紐Ⅲ式銅鐸が単独で出土しているが、周辺に後期の集落が存在していた可能性が高い。

山城地方の弥生土器は先学により畿内・乙訓などの遺跡のものと比較されて<sup>(注5)</sup>いる。近江型土器の出土比率を見ると、中期にあつては桂川流域・乙訓地域・大阪府三島郡では近江型の比率は低い値を示すのに対して、鴨川東部や幣原遺跡ではほぼ半数が近江型のものである。後期には、長岡京市今里遺跡で近江型の土器の比率が高くなり、乙訓地域は鴨川東部・八幡市周辺に似た様相を示すようになる。これは、時期・地域によって集団間の交流が変化していることのあらわれで、八幡市周辺の集落の複雑な交流をうかがい知ることができる。

古墳時代前・中期には、木津川流域の交通の要所に首長墓が築造される。平尾・椿井古墳群、久津川古墳群、飯岡古墳群、男山古墳群がこの時期に造営された。これらの大型首長墓からなる古墳群は前期大和政権の木津川→淀川ルート<sup>(注6)</sup>を把握しようとする意図のあらわれと見てよい。

前・中期の古墳に対して、八幡・田辺地域では横穴式石室を内部主体とする後期群集墳の顕著な形成を見ない。かわって美濃山・荒坂・狐谷などに横穴群が広く分布しており、この地域の特色を成している。これは、後期に田辺町大住周辺に移住した大隅隼人との関係が深いとされて<sup>(注7)</sup>いる。このような外来集団の移配を許した在来集団の衰退もあわせて考える必要がある。しかし現在のところ、八幡・田辺地区においてこれらの古墳を築造した集団の集落が調査された例は少ない。ここで報告する木津川河床遺跡と新田遺跡が同時期のものとして挙げられるのみで、集団間の関係や横穴群との関連を論ずるには至ってい



第17図 周辺遺跡分布図 (地形図は中塚論文より転載・加筆)

- A 調査地 1 木津川河床遺跡 2 御幸橋古墳 3 鳩ヶ谷経塚群 4 男山城跡  
 5 石不動古墳 6 式部谷遺跡 7 茶臼山古墳 8 川口環濠集落 9 下奈良遺跡  
 10 島遺跡 11 戸津遺跡 12 西車塚古墳 13 東車塚古墳 14 志水廃寺跡 15 石城跡  
 16 仲ノ山遺跡 17 志水窯跡群 18 幣原遺跡 19 南山古墳群 20 南山遺跡  
 21 西二子塚古墳 22 東二子塚古墳 23 ヒル塚古墳 24 内里五丁遺跡 25 内里八丁遺跡  
 26 上奈良遺跡 27 西岩田遺跡 28 新田遺跡 29 金右衛門垣内遺跡 30 井ノ元南遺跡  
 31 野上遺跡 32 狐谷遺跡 33 狐谷横穴群 34 円墳 35 内里池南古墳 36 木郷遺跡  
 37 三条古墳 38 小塚古墳 39 美濃山横穴群 40 美濃山廃寺跡下層遺跡 41 美濃山廃寺跡  
 42 荒坂古墳 43 女谷横穴群 44 荒坂横穴群 45 口仲谷古墳群 46 天神社古墳  
 47 向山遺跡 48 松井横穴群 49 散布地 50 散布地 51 魚田遺跡 52 散布地  
 53 西野遺跡 54 河原遺跡 55 杉谷遺跡 56 散布地 57 東林遺跡 58 大住南塚古墳  
 59 大住車塚古墳 60 散布地 61 三野遺跡 62 散布地 63 三本木遺跡 64 塚本遺跡  
 65 塚本東遺跡 66 西薪遺跡 67 水主城跡 68 水主遺跡 69 枇杷庄城跡 70 外野城跡  
 71 東田部遺跡 72 水主神社遺跡 73 水主神社東遺跡 74 寺田城跡 75 森山遺跡  
 76 梅の子塚古墳群 77 めのと塚古墳 78 長池古墳 79 久世廃寺跡 80 芝ヶ原遺跡  
 81 芝ヶ原古墳群 82 正道遺跡 83 正道廃寺跡 84 南垣内古墳群 85 北垣内古墳群  
 86 箱塚古墳 87 里ノ西西遺跡 88 七ツ塚2号墳 89 七ツ塚1号墳 90 且棕神社旧跡  
 91 古宮遺跡 92 平川廃寺跡 93 寺山古墳 94 車塚古墳 95 山道古墳 96 丸塚古墳  
 97 鍛冶塚古墳 98 芭蕉塚古墳 99 青塚古墳 100 室木遺跡 101 大竹古墳  
 102 大久保環濠集落 103 一里山遺跡 104 広野廃寺跡 105 坊主山古墳群  
 106 金比羅山古墳群 107 下大谷古墳群 108 西山古墳群 109 八軒屋谷遺跡  
 110 八軒屋谷古墓 111 尖山古墳 112 上大谷古墳群 113 上大谷東古墳群  
 114 大谷古墳群 115 庵寺山古墳 116 宮ノ平古墳群 117 宮ノ平遺跡 118 芝山遺跡  
 119 尼塚古墳群 120 横道遺跡

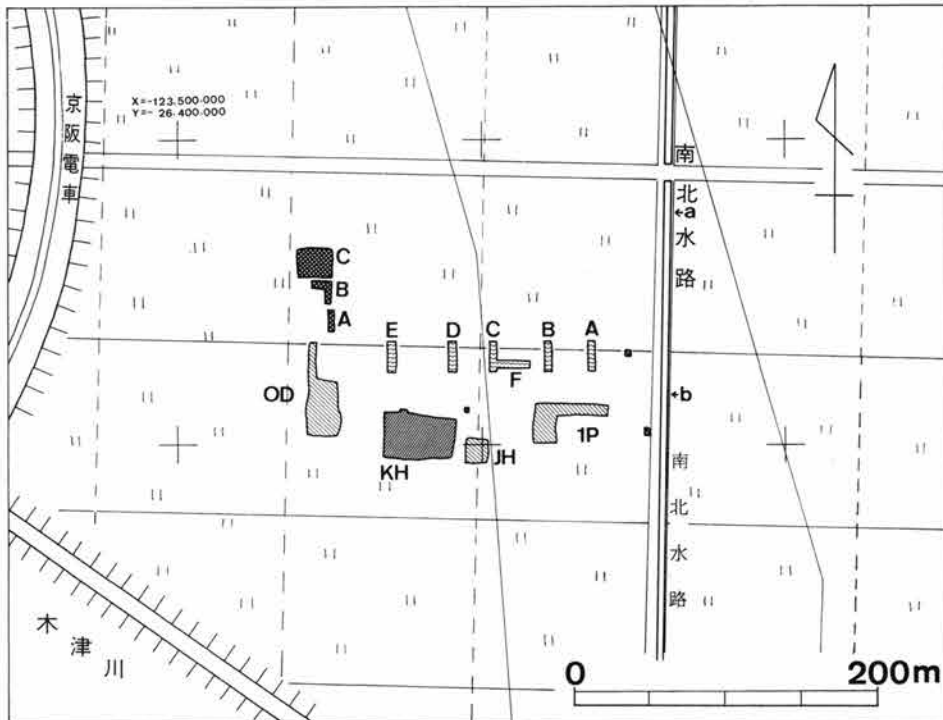
ない。

奈良時代には、八幡市周辺では西山廃寺・美濃山廃寺・志水廃寺等が建立され、在来氏族の繁栄がしのばれる。(中井栄策)

### 3. 測量と調査位置

今年度の調査は、汚泥脱水機棟(略称「OD」)、自家発電機棟(同「JH」)、第1ポンプ棟(同「1P」)の各建設予定地内の発掘調査と場内整備に係わる掘削の立会調査が予定された。そのうち、OD・JH・1P地区については国土座標を算出するための測量調査を行った。

今回の調査に伴うトラバース測量は、昭和58・59年度調査時と同様「美豆」<sup>(注8)</sup>、「生津」の両三角点を基準とし、3か所の発掘区のそれぞれについて行った。OD地区は昭和60年4月26・27日、JH地区は同年8月3日、1P地区は同年9月3・4日に実施、各日とも快晴・微風の状態であった。測量の路線について、OD地区はトレンチ北東部に点P<sub>1</sub>、他に任意に2点を、JH地区はトレンチ南部に点P<sub>2</sub>、他に1点を、1P地区はトレンチ南部に点P<sub>3</sub>、他に任意に2点をそれぞれ設置し、3か所とも「美豆」から各点を通り「生津」へ至る結合トラ



57年度調査 58年度調査 59年度調査 60年度調査

第18図 木津川河床遺跡調査地位位置図

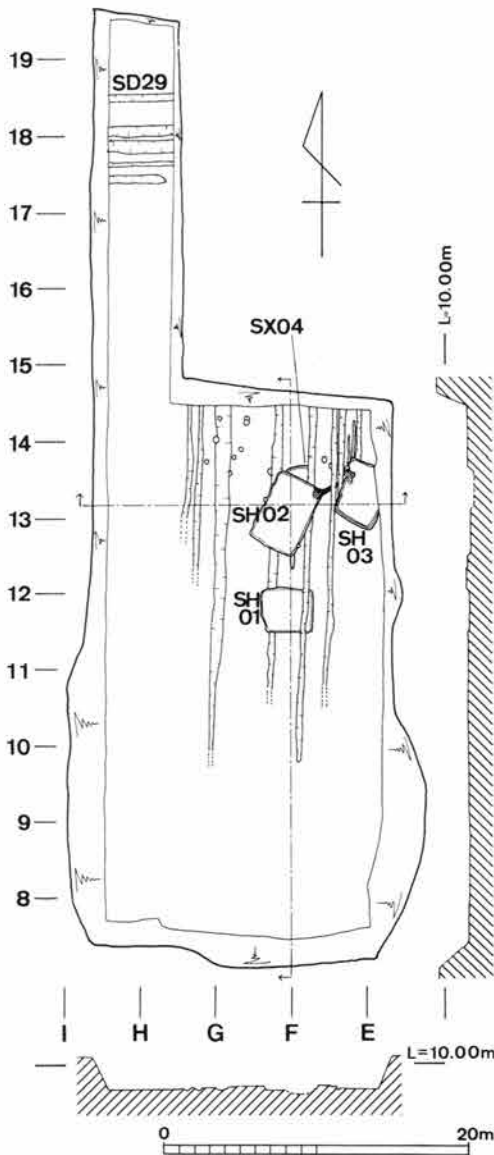
バース測量を行った。以下にそれぞれの測量精度及び算出した国土座標を記す。<sup>(注9)</sup>

OD総角誤差5秒・精度15,405分の1  $P_1(X=-123,661.943\text{m}, Y=-26,309.182\text{m})$

JH総角誤差2秒・精度27,524分の1  $P_2(X=-123,757.096\text{m}, Y=-26,345.234\text{m})$

1P総角誤差14秒・精度20,953分の1  $P_3(X=-123,707.530\text{m}, Y=-26,162.387\text{m})$

次に各トレンチの区割りについて述べておく。各調査地区ともトラバース測量によって得た点より整数となる値を算出し、それを基準に真南北・真東西方向に5mずつの方眼を



第19図 OD地区検出遺構実測図

割り付けた。各ラインは南北方向に数字、東西方向にアルファベットの記号を付し、南東隅の交点をもって地区の名称とした。なおライン・ナンバーは南から北、東から西へ進むものとした。

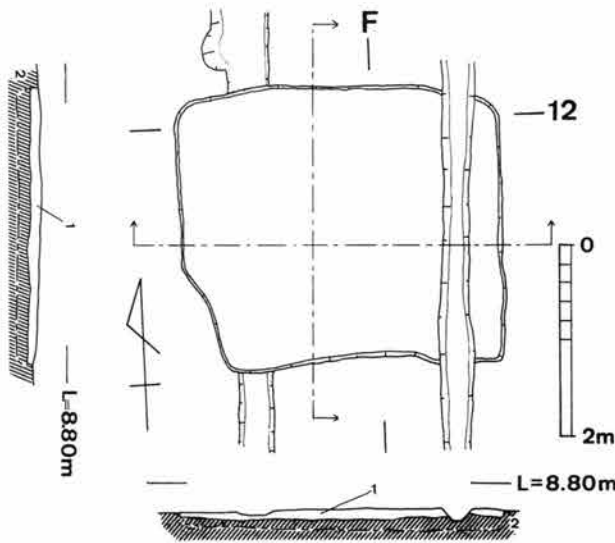
OD地区は、南北方向を8～19、東西方向をE～Hとした。8Eの国土座標は $X=-123,690.000\text{m}, Y=-26,300.000\text{m}$ である。

JH地区は、南北方向を10～12、東西方向をJ～Lとし、12Jの国土座標は、 $X=-123,700.000\text{m}, Y=-26,200.000\text{m}$ である。

1P地区は、南北方向に1～6、東西方向にE～Mの記号を付けた。1Mの国土座標は、 $X=-123,700.000\text{m}, Y=-26,160.000\text{m}$ である。

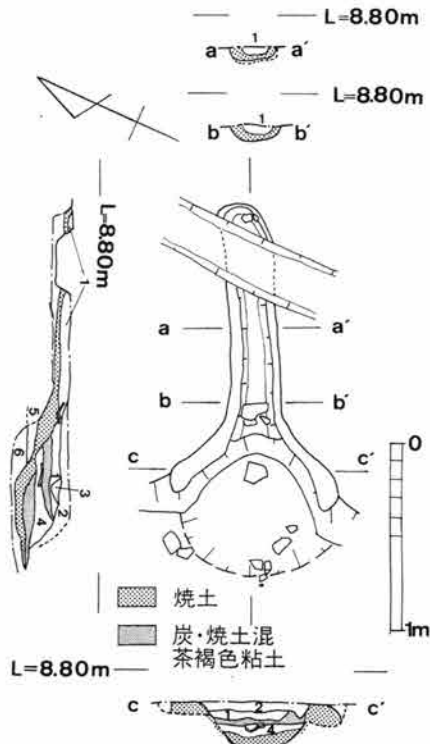
なお、各調査地区の区割名はそれぞれ任意に付けたものであり、相互に関連性を持たない。

木津川河床遺跡では、昭和58年度より国土座標を導入しており、各調査地の位置関係を正確に把握できるようになった<sup>(注10)</sup>(第18図)。今後とも国土座標によって各調査地点の遺構の関連性を捉えていく必要がある。(福富 仁)



第20図 OD地区堅穴住居跡(SH01)実測図

1. 暗茶褐色粘土 2. 青灰色粘土



第21図 OD地区堅穴住居跡(SH02)カマド実測図

1. 青灰色粘土(炭混) 2. 暗茶褐色粘土  
3. 暗茶褐色粘土(焼土混) 4. 青灰色粘土  
5. 青灰色粘土 6. 青灰色砂

#### 4. 調査概要

**OD地区の調査** OD地区は、昭和58年度に調査を行った管理本館下調査地(以下「KH」)の西方約35mに位置している。その調査においては古墳時代後期の堅穴住居跡10棟をはじめとする集落跡を確認しており、OD地区の調査でもそれに関連する遺構が検出されることを期待した。掘削は、地表下1.6~1.8m(L=8.8m付近)までを重機で行

い、以後手掘り作業に切り替えた。調査面は2面あるが、上面のものは住居の埋土を素掘り溝と誤認して掘ってしまい、本来的には同一遺構面であるものを上下に分けて調査していた。ここで報告するのは、下面で調査したものに止める。検出した遺構は堅穴住居跡3基(SH301~03)、土坑1基、柱穴群、素掘り溝である(第19図)。

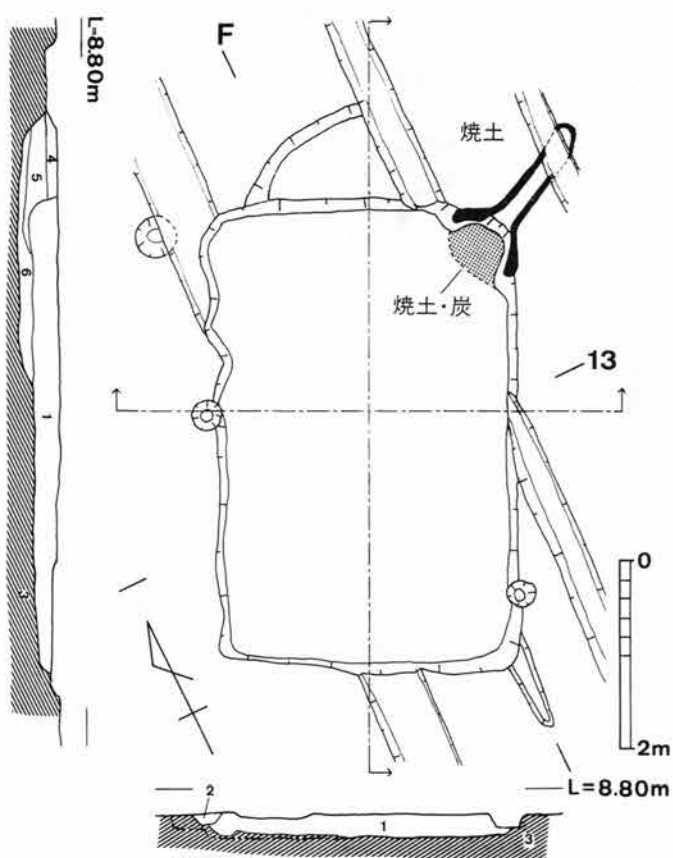
SH01は調査地のほぼ中央で検出した住居跡で、ほぼ南北方向にある(第20図)。堅穴の規模は南北2.8m、東西3.3m、検出高は約10cmであるが、セクション土層の観察によると、その深さは30cm以上あったものである。埋土は暗茶褐色粘土の1層のみである。カマドはなく、焼土・炭化物の広がりには認められなかった。また、柱穴・壁溝・貯蔵穴などの遺構は検出されなかった。埋土中も含めて遺物の出土は少なく、土師器の細片が数点あったのみで、時期を示すものはない。

SH02は北東隅にカマドを作り付けた竪穴住居跡で、短辺3.1m、長辺5.0mの長方形を呈し、検出高約20cmを測る(第22図)。床面では主柱穴などの遺構は検出されなかった。カマドの煙道は、上半が消失しているが、長さ1.26m、幅28cmと細長いものである(第21図)。焚口部は、床面より約5cm掘り凹めている。内部の堆積層は炭と焼土の互層である。煙道の底面・焚口の埋土及びその周辺より、土師器杯(第29図-2)が出土しており、この住居の使用期間を示すものといえる。

SH03は、東北部が調査

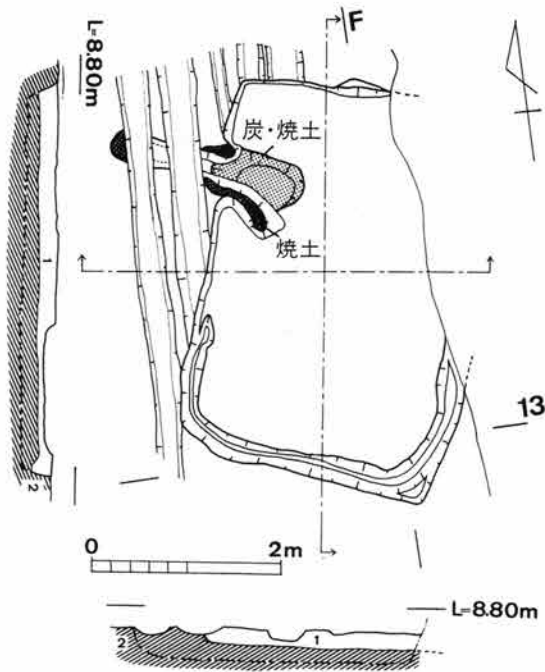
地外に伸びるため、完掘はできなかったが、短辺2.75m、長辺4.2mの竪穴住居跡である(第23図)。柱穴・貯蔵穴は検出されなかったが、南辺と東辺に壁溝が検出された。カマドは、西辺中央のやや北寄りに作り付けられている(第24図)。袖部は、南側のものが残っているのみで、北側のものは削平されたためか検出されなかった。煙道は長さ1.25m、幅30cmにわたって、熱により赤化している。焚口部は、SH02と同様、浅く掘り凹めている。支脚の石・土器等はなかった。北西コーナーの床面に土師器甕片(第29図-3)がまとまって出土しており、厨房のものと思われたが、接合しても完形とはならない。

SX04は、SH02と重複して検出した土塚である。調査最終日に掘削したためSH02の床面での範囲は完掘はできなかった。断ち割り土層や土器の出土地点等の検討により、2.2×2.7mの平面規模と推測される。内部より第29図4～6の土師器が出土したが、床面よりやや浮いたところであった。

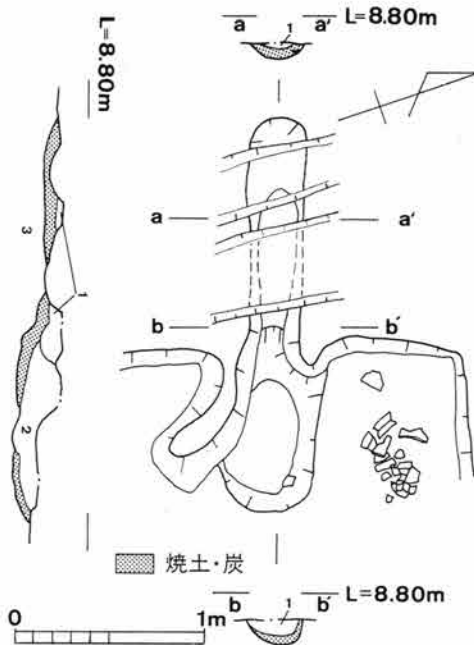


第22図 OD地区SH02実測図

- |             |                 |
|-------------|-----------------|
| 1. 暗茶褐色粘土   | 2. 暗茶褐色粘質土      |
| 3. 青灰色粘土    | 4. 暗茶褐色粘質土      |
| 5. 淡青灰色炭混粘土 | 6. 暗茶褐色砂混粘土(炭混) |



第23図 OD地区堅穴住居跡(SH03)実測図  
1. 暗茶褐色粘土 2. 青灰色粘土



第24図 OD地区(SH03)カマド実測図  
1. 茶褐色土(火を受けている)  
2. 暗茶褐色粘土 3. 青灰色粘土

柱穴群は調査地の北部、13・14-F・G区周辺で検出された。柱穴内より遺物の出土は皆無でその時期決定は困難である。ただ、柱穴の一部は、素掘り溝との重複関係があり、それとの先後関係はわかる。

素掘り溝は調査地の南半以北で検出されている。北端地区においては東西方向、中央より南側では南北方向とその方向が異っている。KH地区では東西方向にあり、棟下調査地(59年度調査Aトレンチ)においては南北方向の素掘り溝が検出されている。

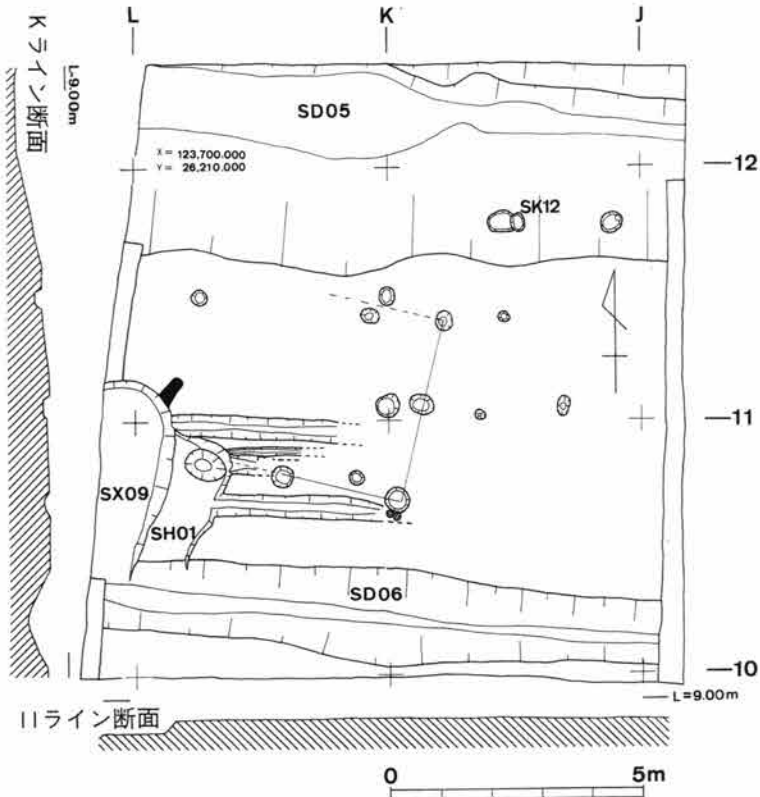
8ライン近辺で東西方向に断ち割ったところ、住居跡等の検出面(L=8.6~8.7m)より約40cm下にまで住居跡等の遺構のベースである、青灰色粘土層があり、その下は黄色砂が厚く堆積している。この砂層をさらに1.2m程度下げてもその堆積が続き、その時点で湧水があり、これより掘り下げを断念せざるをえなかった。また、調査地の西壁に沿って断ち割りを行ったところ、40~50cmで黄色砂が全域に見られたが、それ以上の掘り下げは南壁部の状況をかんがみて行わなかった。ともに土器の出土は見られない。

**JH地区の調査** JH地区はKH地区の東方約20mに位置しており、古墳時代後期の集落の東限が確認され

ることが期待された。

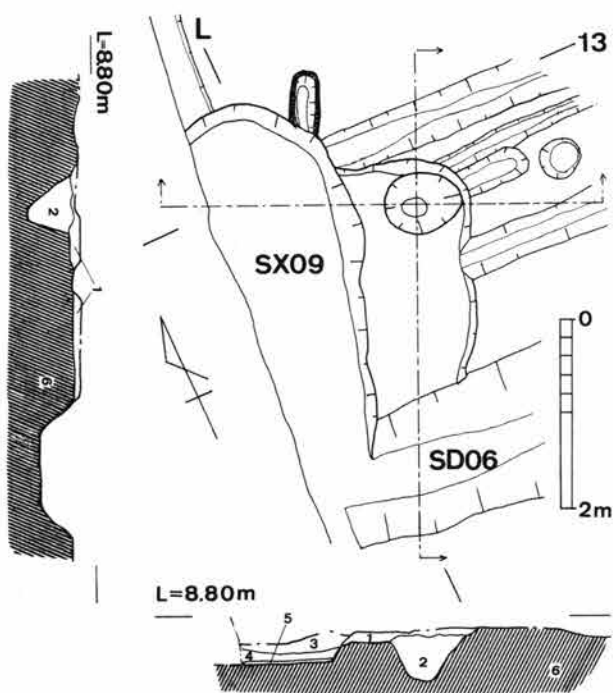
検出面は二面あり、上面(第I面)がL=9.0m程度で、東西方向の素掘り溝及びSD05・06が検出された。下面(第II面)は、L=8.6m程度で、検出した遺構は、竪穴住居跡(SH01)・土壇・溝・素掘り溝・柱穴群である(第25図)。第I面で検出した素掘り溝は、SD05の埋土上面でも検出している。幅は30~40cm、深さ20cm程度のものであり、OD地区をはじめとする各調査地区で検出しているものと大差はない。検出層位より、近世のものといえる。SH01はSX09とSD06によって削平を受けており、その平面規模は不明である(第26図)。カマドは北辺に設けられているが、SX09に大半が削平されており、煙道の一部が検出されたのみである(第27図)。東北コーナーに貯蔵穴状の土壇(64×80cm、深さ40cm)が検出され、第30図-17・19の土器が出土している。また、住居跡床面上からは、18の土器が出土している。柱穴や壁溝は検出されなかった。SX09はSH01の上から掘られたもので大半が調査地外に伸びる。20・21の須恵器が出土している。その性格は不明であるが、出土遺物がSH01のものと同接していることから、竪穴住居跡の可能性はある。

SD05は東西方向の溝で、西から東へ下る傾斜をもつ。流路の幅は推定で5~6mをは



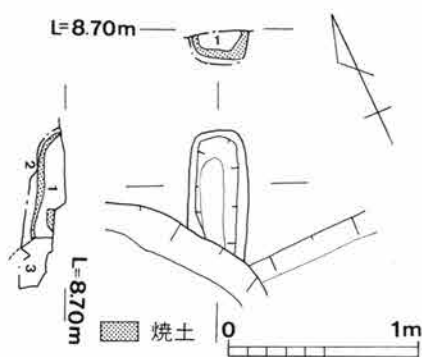
第25図 JH地区検出遺構実測図





第26図 JH地区堅穴住居跡(SH01)・SX09実測図

1. 茶褐色混黄褐色粘質土
2. 暗褐色混暗黄褐色粘質土
3. 白砂混淡茶褐色粘質土
4. 白灰砂混褐色粘質土
5. 白灰砂混褐色砂
6. 淡暗茶褐色粘質土



第27図 JH地区SH01カマド実測図

1. 焼土混淡茶褐色粘質土
2. 淡暗茶褐色粘質土
3. 白砂混淡茶褐色粘質土(SX09)

検出層及び今までの調査例より、大まかに中世の時期区分が与えられる。

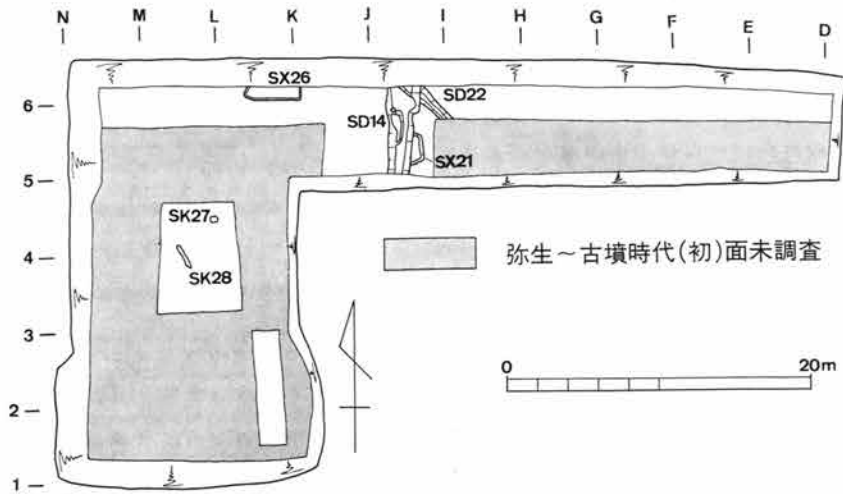
中央の平坦地には、柱穴群が見つかったが、掘立柱建物に復元できるものがある。柱間距離は北から南へ1.75m, 1.8m, 東西に2.25mである。出土遺物はなく、時期は不明

かる。土層は大きくⅣ層に分かれているが、Ⅰ・Ⅱ層は第Ⅰ面より掘り込まれている。Ⅲ・Ⅳ層は第Ⅱ面より掘り込まれており、掘り返しがなされた状況を呈する。Ⅰ・Ⅱ層中及びベース層より近世の磁器片が出土していることから、その時期に相当するものと思われる。Ⅲ・Ⅳ層よりは第30図-25の土器が出土しているが、他に遺物の出土が皆無であるので掘削の時期を示すのは判然としない。第Ⅱ面には素掘り溝や住居跡があり、かなりの時間幅がある。ただ、SK12は、Ⅲ層上面より掘り込まれていて、第30図22の甕

片を出土しており、Ⅲ・Ⅳ層の堆積はそれ以前—出土土器が示す弥生時代後期の可能性が高い。

SD06も東西方向の溝で、幅1.4~2.0m、深さ約40cmである。大きくⅤ層に分かれ、Ⅲ層中より磁器片が出土している。第30図-23・24が出土しているが、Ⅰ・Ⅱ層内出土のもので、後世の流入物である。

調査地中央部で柱穴群、東西方向の素掘り溝を確認している。出土遺物は僅少で、細片ばかりであり、実測図をとれるものもない。



第28図 1P地区弥生時代検出遺構平面図

である。

**1P地区の調査** 1P地区はJH地区の東方約30mに位置しており、昭和57年度調査のエアレーション・タンク棟のA・Bトレンチの南側にあたる。この時の調査のB・C・Fトレンチよりは弥生時代後期～布留式段階の土器が集中して出土しており、今回の1P地区の調査ではそれに関連する遺構が確認されるものと期待された。

調査対象地は30×50mと広大なため、対象地内の北辺に沿って東西方向の細長いトレンチと、西辺に沿っての南北方向のトレンチを設け、「L字形」に調査地を設定した。これにより、北側部分では弥生～古墳時代初頭の遺構を確認し、南側部分では、KH地区を中心とする古墳時代後期の集落跡の広がりを捉えられるものと考えた。遺構調査面は4面にわたり、近世が2面、中世1面、中世・弥生1面である。ここでは、弥生～古墳時代(初)に関する検出遺構を報告する(第28図)。

SD14は、SX21、SD22を切って掘られた溝で、検出長6.0m、幅1.4～2.1m、深さ30cmを測る。埋土より、弥生時代後期～庄内期の土器片が出土しているが、細片が多く、実測図がとれるものは第31図-28のみであった。SD22は、北西-南東に伸びる溝で、検出長2.8m、幅65cm、深さ15cmである。弥生土器片が出土しているが、細片のみで量も少ない。SX21は、土坑であるが、内部より弥生土器小片数点が出土したのみである。SD14により削平を受けているため、その幅は不明である。検出長1.95m、深さ0.3mである。SX26は、その大半が調査地外にあるもので、南辺の長さ3.8mである。深さは3～10cmと浅く、その形態から竪穴住居跡と見られたが、柱穴や焼土は検出されなかったため、その性格は不明である。第31図29の土器が出土した。

**立会調査** 今年度の立会調査は南北水路や排水溝・上下水道の埋設等の場内整備の掘削に係わるもので、総延長約3,700mに及ぶものである。本遺跡においては、古墳時代～中世の遺構面は地表下約1.6～1.8mに広がっているが、大半の掘削は地表下30～50cmと比較的浅く、包蔵されている遺構・遺物を損傷するものではなく、遺物も磁器片や瓦片などが散見される程度であった。

場内整備の掘削で中世以前の遺構面に達するのは、南北水路の新設工事のみであった(第18図)。この工事は浄化センターの東限に、幅5m、長さ450mの水路を設けるものである。この掘削工事は、木津川と宇治川の堤防を結ぶもので、木津川河床遺跡の範囲外も含んでいたが、不確定な遺跡範囲を確認しうるものと考え、あわせて立会調査を行った。

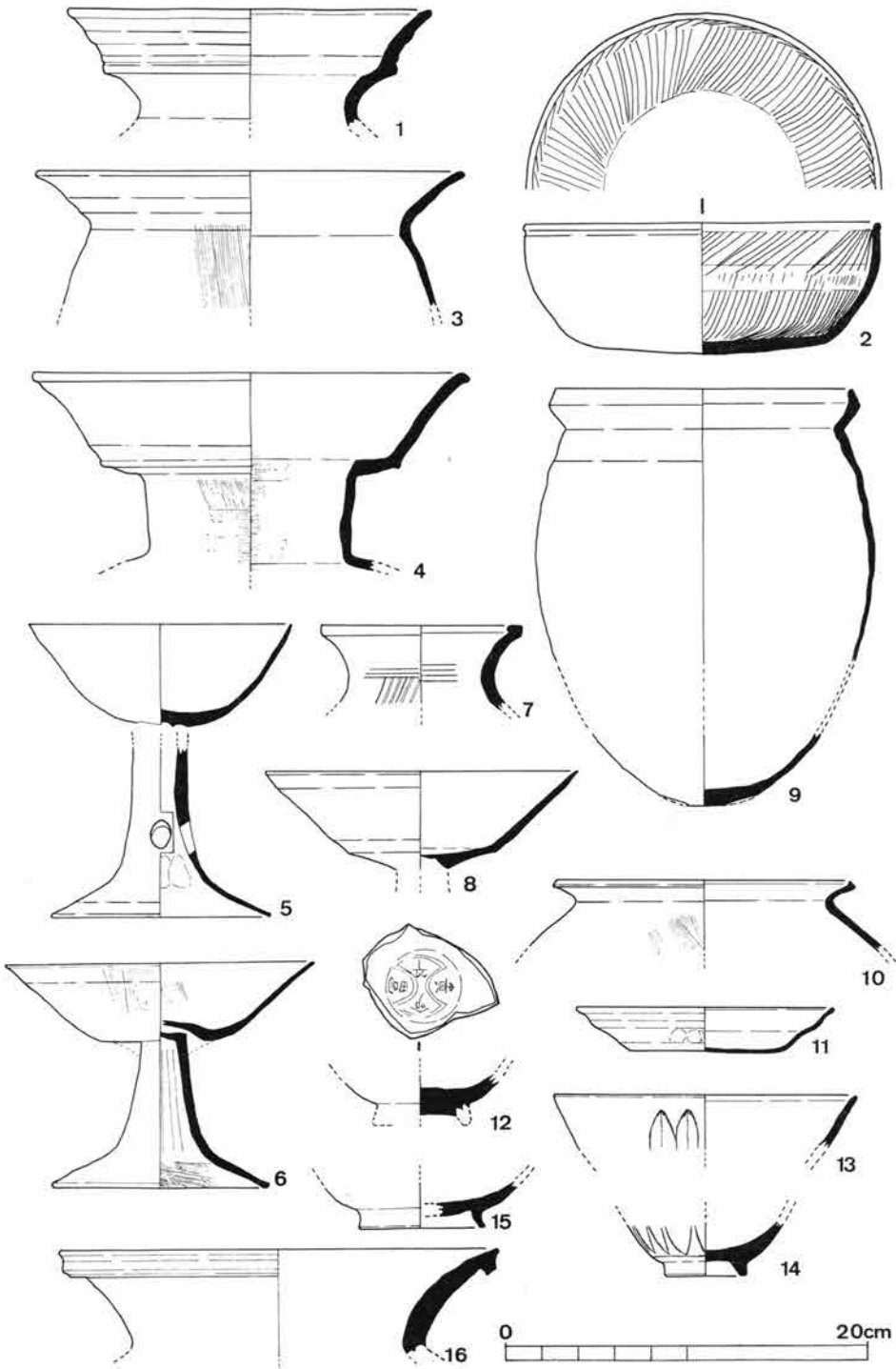
掘削は大きく2か所に分かれ(第18図の南北水路の途切れる部分)、北側は地表下約1.6m程度、南側は2.4mに及ぶものであった。北側部分は平面的に見ると茶褐色粘土(幅8m)と青灰色粘土(幅10m)が東西方向に縞状に広がっており、用水路的な「溝」と思われる。一方、南側部分は、「a」の地点より南に、地表下1.3mに厚さ50cm程度の暗褐色粘土層が堆積している。「b」地点では、幅約7mの溝状の遺構が断面観察によって見てとれ、この暗褐色粘土層自体が生活面の堆積層と判断される。また、この土層の下の淡緑灰色粘土層より弥生土器の脚部が出土しており、弥生時代の集落がこの地点以東にも広がっている可能性がある。

(岩松 保)

## 5. 出土遺物 (第29～31図)

出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、国内外の陶磁器片や木製品、銭貨、鉄釘等の金属器など、整理用コンテナ・パット約10箱分があるが、細片が多く、実測できるものは少ない。

第29図はOD地区出土遺物の実測図である。1・2は、SH02内より出土したものであるが、2はカマドの燃烧部と煙道部にかけての焼土に接して出土したもので、SH02の時期を示すものと判断される。内面にヘラ状のもので施文した暗文が2帯ある。外面は火を受けて剝離している。口径19.6cm、器高7.1cmである。3はSH03より出土したもので、「く」の字形に立ち上がる頸部と外反する口縁を有し、端部は四角形を呈する。復元径23.4cmを測る。4～6はSX04内より出土したもので、古墳時代前期のものである。5は脚部と杯部は接合できないが、同一個体となるものである。杯の口径は14.4cm、脚の底径は12.0cmを測る。6は杯部の底を内湾させ、脚との接合部が凹むものである。脚と杯との接合には粘土をその凹みに充填している。杯部の口径は17.0cm、脚の底径は11.8cm、器高12.4cmである。11・15は素掘り溝中より出土したもので、11はSD17、15はSD29より出土した。11

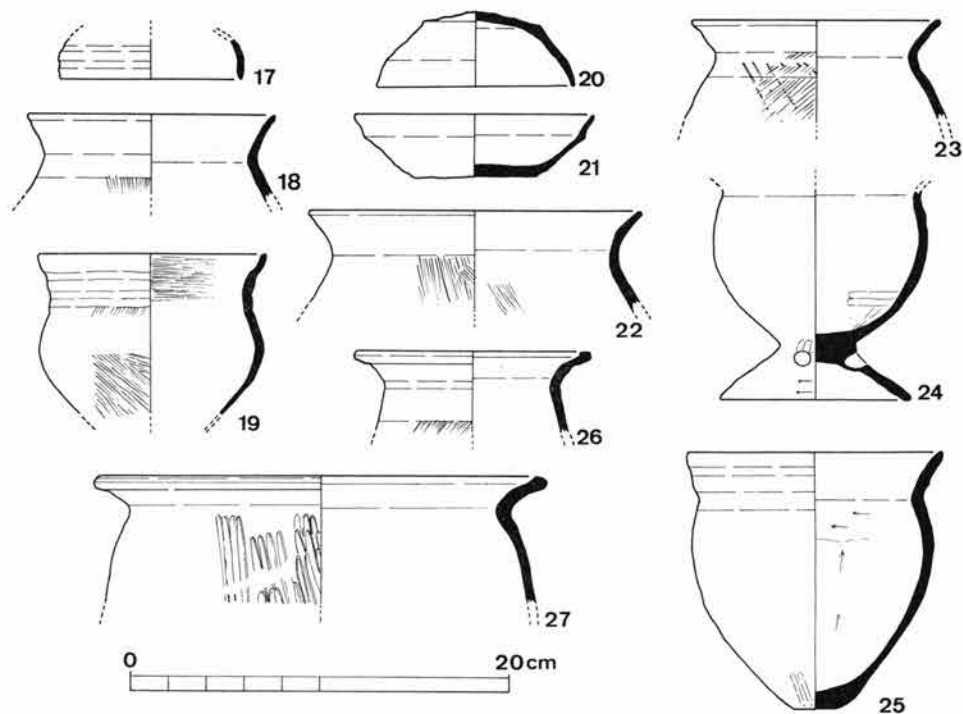


第29図 OD地区出土遺物実測図

1~11: 弥生土器・土師器 12・13: 中国製陶磁器 14: 磁器 15・16: 須恵器  
 1・2: SH02内出土 3: SH03内出土 4~6: SX04内出土 15: SD29内出土  
 11: SD17内出土 7~10・12~13・16: 青灰色粘土層他出土

は土師器皿で、復元径14.4cm、器高2.4cmを測る。器壁を強くナデて段をなしている。15は須恵器高台付椀で、約1/4が残存している。高台径(復元)で6.6cmを測る。7~10, 13, 14, 16は包含層及び調査地壁面より出土したものである。12・13はともに中国製陶磁器で、龍泉窯系の青磁である。12は、内面見込みに「長命富貴」と読み取れる印文を施している。13は外面に蓮華文をあしらったもので、復元口径16.8cmである。

第30図はJH地区より出土した遺物の実測図である。17~19はSH01及びその貯蔵穴状土坑内より出土したものである。17は須恵器杯蓋で、復元径9.6cmを測る。18・19は土師器甕で、18は「く」の字状に外反する口縁を持つものに対して、19は内湾しつつ上方に外反する口縁を有する。18は口径13.0cm、19は口径12.0cmに復元される。20・21は須恵器杯蓋と杯身で、共にSX09内より出土したものである。20は天井部の狭い範囲をヘラ削りで調整をしているが、21の底部は未調整である。20の口径(復元)10.4cm、器高4.0cm、21は口径(復元)12.6cm、器高3.2cmである。22の甕はSK12より出土したもので、復元口径17.4cmである。23・24はSD06内より出土したものであるが、ともに後世の流入物である。23は頸部付近まで、細かいタタキメがあり、その上にハケメが見てとれる。復元口径13.0cm

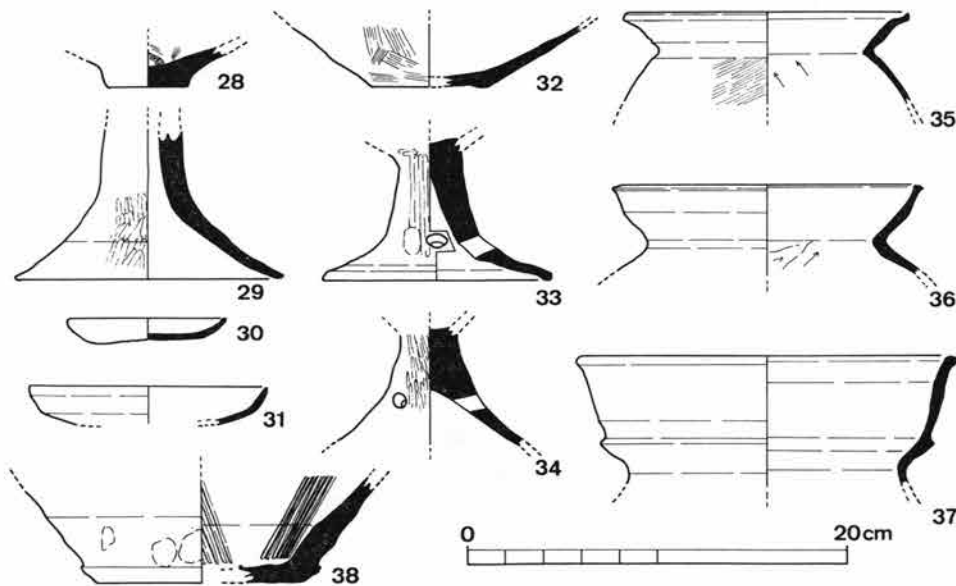


第30図 JH地区出土遺物実測図

17・20・21：須恵器 18・19, 22~27：弥生土器・土師器 17~19：SH01内出土  
 20・21：SX09内出土 22：SK12内出土 23・24：SD06内出土 25：SD05内出土  
 26：淡茶褐色粘土層内出土 27：茶褐色粘土層内出土

である。24は脚付鉢で、外面の大部分が磨滅しているが、所々に調整痕が残っている。脚から鉢への屈曲部にヘラ磨キ、脚部下方外面は横方向のヘラ削り(単位不明)がある。スカシは4方向から穿孔しているが、うち2か所が貫通していない。内面はヘラ磨キの後、ナデで仕上げている。25は板状工具で口縁部を横方向に成形し、その後、ヨコナデで整形している。体部はハケメ調整の後、部分的にヘラ磨キを行っている。内面は体部をヘラ削りしている。10円玉程度の底部を持つ。口縁の形状から、「丹後」系の甕と類推する。SD05より出土した。26・27は包含層中より出土したもので、27は体部外面に粗いハケメで調整を行なっている。復元口径23.6cmを測る。

第31図は、1P地区より出土した土器である。28はSD14より出土したもので、底径4.2cmである。29は、SK26より出土したもので外面をタテ方向にヘラ磨キを行っている。スカシは認められない。22はSD20より出土した土師器皿で、口径8.4cm、器高1.3cmを測る。31は茶黄色粒混淡灰色粘土層中より出土した土師器皿で、口径12.6cmである。32～37は灰色粒混茶黄色粘土層中より出土したもので、この層は布留式以前の土器のみであり、主体となるのは庄内へ布留式のものである。35の庄内式甕は、その色調が「チョコレート」色を呈し、胎土中に角閃石やウンモ類の混入が目立ち、生駒西麓よりの搬入品と見られるものである。(復元)口径15.0cmを測る。36は口縁端部を横方向につまむもので、内面は頸部



第31図 1P地区出土遺物実測図

28～37：弥生土器・土師器 38：陶磁器 28：SD14内出土 29：SK26内出土  
30：SD20内出土 31：茶黄色粒混淡灰色粘土層内出土  
32～37：灰色粒混茶黄色粘土層内出土 38：SD06内出土

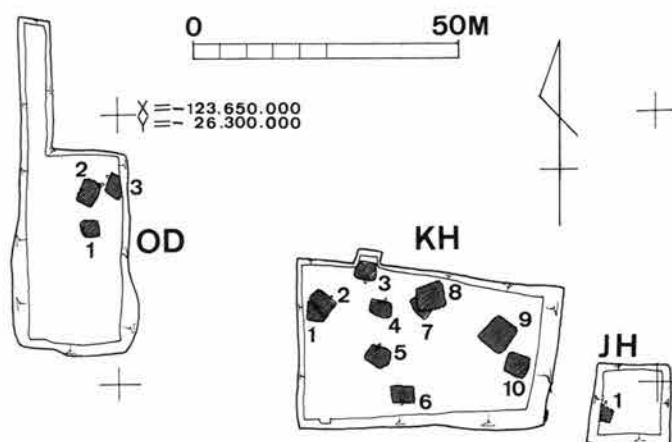
屈曲部まで削りで成形している。復元径16.4cmである。37の甕口縁部は内面が二次焼成によりススが付着しているが、外面は口縁端部の一部のみスがついている。復元口径20.0cmである。38は陶器挿り鉢で、SD06内より出土した。復元の底径は11.0cmである。内面の線刻は、板状工具により行っているが、破片であるためその単位は不明である。

(岩松 保)

## 6. ま と め

木津川河床遺跡の調査は今年で4年目を迎え、古墳時代後期の集落跡を中心とした遺構が確認されつつあり、徐々にその様相が明らかとなっている。しかし、「2. 歴史的環境」で触れたように、南山城地方においては低地の集落跡の調査は稀であり、木津川流域の低地集落跡の研究はその一步を踏み出したばかりと言えよう。また、八幡市においては同時代<sup>(註1)</sup>の集落跡の調査例は新田遺跡が挙げられるのみで、木津川河床遺跡を周辺遺跡との関連で捉え、論じ得る段階にまで資料が蓄積されてはいない。そのため、ここでは今までの本遺跡の調査をふまえ、古墳時代後期を中心とした整理を行い、併せて主要な問題点を挙げることで、以後の調査・研究の指針としたい。

第一に、古墳時代後期の「集住区」の広がりが捉えられ、その範囲が推定され得た。今年度は、OD地区とJH地区において竪穴住居跡を検出し、KH地区のものを含めて14棟の住居跡を確認している(第32図)。時期は古墳時代後期でも後半に属するものばかりである。調査地が限られているが、住居跡の分布は、南東-北西に伸びている。OD地区の3棟は調査地の北東部に集中していて、西側には空白地帯があり、ここからの包含層内の土器の出



第32図 木津川河床遺跡調査地内検出竪穴住居跡分布図  
 OD：汚泥脱水機棟，KH：管理本館，JH：自家発電機棟  
 (番号は各調査地内での報告番号)

土量は極めて希薄である。このことから、OD地区の中央付近でKH地区を中心とする集落の「集住区」が途切れるものと推定する。「集住区」の東端は、1P地区では住居跡が検出されていないことから、JH地区の住居跡がそれに近い位置のものとする。この「集住区」の範囲は、東西100m、南北50mに及ぶものと推定される。

第二に、住居跡の併存関係を明らかにする必要がある。しかし、本遺跡では住居内からの遺物の出土が少なく、極めて困難である。KH地区の1と2、7と8のように重複関係を有するものや、OD地区の2と3ではカマドが互いに近接していて同時併存が困難なものがあり、すべてが同時に建ち並んでいたものではないことは明らかである。数少ない出土で須恵器では2～3段階の差があり、これをそのまま時期差と考えると1～2回の建替えがあったこととなる。土師器を含めた土器の詳細な検討は言うに及ばず、一堅穴住居が占有する空間を設定し、併存関係の否定等の手法から、その変遷を考えていく必要がある。

第三に、柱穴が住居床面及び堅穴周辺から検出されないことがあげられる。本遺跡の土壌にその要因を求めることも可能であるが、以下の理由によりその考えを否定したい。床面において貯蔵穴や壁溝を検出しているものがあり、土色の差が床面上で全く認められないことはない。もし主柱の穴が穿たれていたとすると、そのうちの何割かは検出できているはずであるが、実際にはそうではない。また、城陽市芝ヶ原遺跡<sup>(注12)</sup>や向日市鴨田遺跡<sup>(注13)</sup>などの府南部の多くの遺跡<sup>(注14)</sup>で、主柱穴のない同時期の堅穴住居跡が報告されている。これらのことから、本遺跡の堅穴住居は主柱穴を持たないタイプのものとする。

第四に、他時代の様相について見てみたい。今までの調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が多数出土していたが、遺構としては、わずかに、KH地区のSX01・02や昭和59年度のCトレンチの掘立柱建物跡が確認されていたのみである。今年度の調査ではOD地区の土壇、JH地区の溝(?)、1P地区の溝・土壇が検出された。1P地区の様相と昭和57年度のB・C・Fトレンチの遺物の出土状況から、古墳時代後期の集落の東北にその集落が広がっているものと思われる。中・近世のものとしては、簡単な掘立柱建物が確認されている程度である。出土遺物は瓦器・土師器の細片が多いが、輸入陶磁器片が散見され、その意義付けを考えていく必要がある。

第五に、他地域との交流の問題を考えていく必要がある。今回の調査で他地域との交流をうかがわせる遺物には、弥生時代後期から庄内併行期の25や35の「丹後系」や生駒西麓の胎土を持つものがある。

第六に、立会調査によって木津川河床遺跡の範囲外にも遺構が存在することは事実となった。以後、遺跡地図の記述にとらわれない柔軟な対応をしていく必要がある。

(岩松 保)

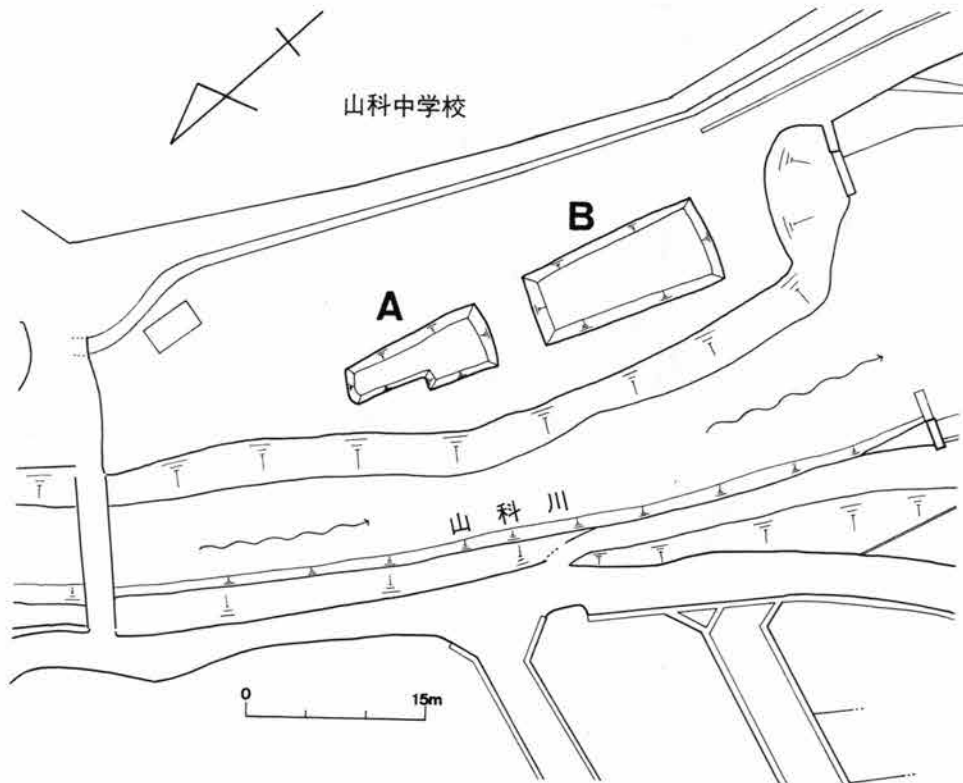


- 注1 現在までの木津川河床遺跡内の発掘調査報告は各年度毎に行われている。  
長谷川達「木津川河床遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983  
黒坪一樹・長谷川 達「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984  
黒坪一樹・松井忠春「木津川河床遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注2 調査中及び整理作業には多くの方々に参加していただいた。  
福富 仁, 川本 英(仏教大学卒業生), 中井英策(仏教大学生), 浜口和宏・城田正博(立命館大学生), 飛田浩一(関西外国語大学生), 清滝 龍, 水野哲郎・河野一臣(近畿大学生), 立川明浩・古賀敦子・小早川志穂・大松千尋・水口幸子(龍谷大学生), 平野仁佳子(嵯峨美術短大生), 野田侑記子
- 注3 中塚 良「木津川下流域の表層地層と遺跡立地」(『京都考古』第33号) 1984
- 注4 奥村清一郎・橋本清一「長岡宮跡第98次調査概要」(『埋蔵文化財調査概報』第2分冊 京都府教育委員会) 1980
- 注5 都出比呂志・井上満郎「古墳時代」(『向日市史』上巻) 1983
- 注6 『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室 1972
- 注7 奥村清一郎「南山城の横穴」(『京都考古』第27号) 1982  
江谷 寛「畿内単人の遺跡と伝承」(『舟ヶ崎正孝先生退官記念畿内地域史論集』) 1981
- 注8 それぞれの三角点の座標値は次のとおりである。  
「美豆」 X=-123,063.88 「生津」 X=-124,215.19  
Y=-26,035.10 Y=-25,345.22
- 注9 農耕地の閉合比の許容範囲は1/3,000~1/1,000(兼杉 博編『測量公式活用ポケットブック』オーム社) 1970
- 注10 昭和57年度調査においては、国土座標を算出していないため、おおよその位置を示す。
- 注11 奥村清一郎「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』京都府教育委員会) 1984
- 注12 近藤義行「芝ヶ原遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第11集 城陽市教育委員会) 1982
- 注13 宮原晋一「長岡京跡左京第106次7ANFTB-3地区~左京四条二坊六町・鴨田遺跡第5次~発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集 向日市教育委員会) 1984
- 注14 城陽市芝山遺跡・森山遺跡・正道遺跡, 京都市常盤仲ノ町集落跡, 宇治市羽戸山遺跡, 長岡京市今里遺跡などがある。

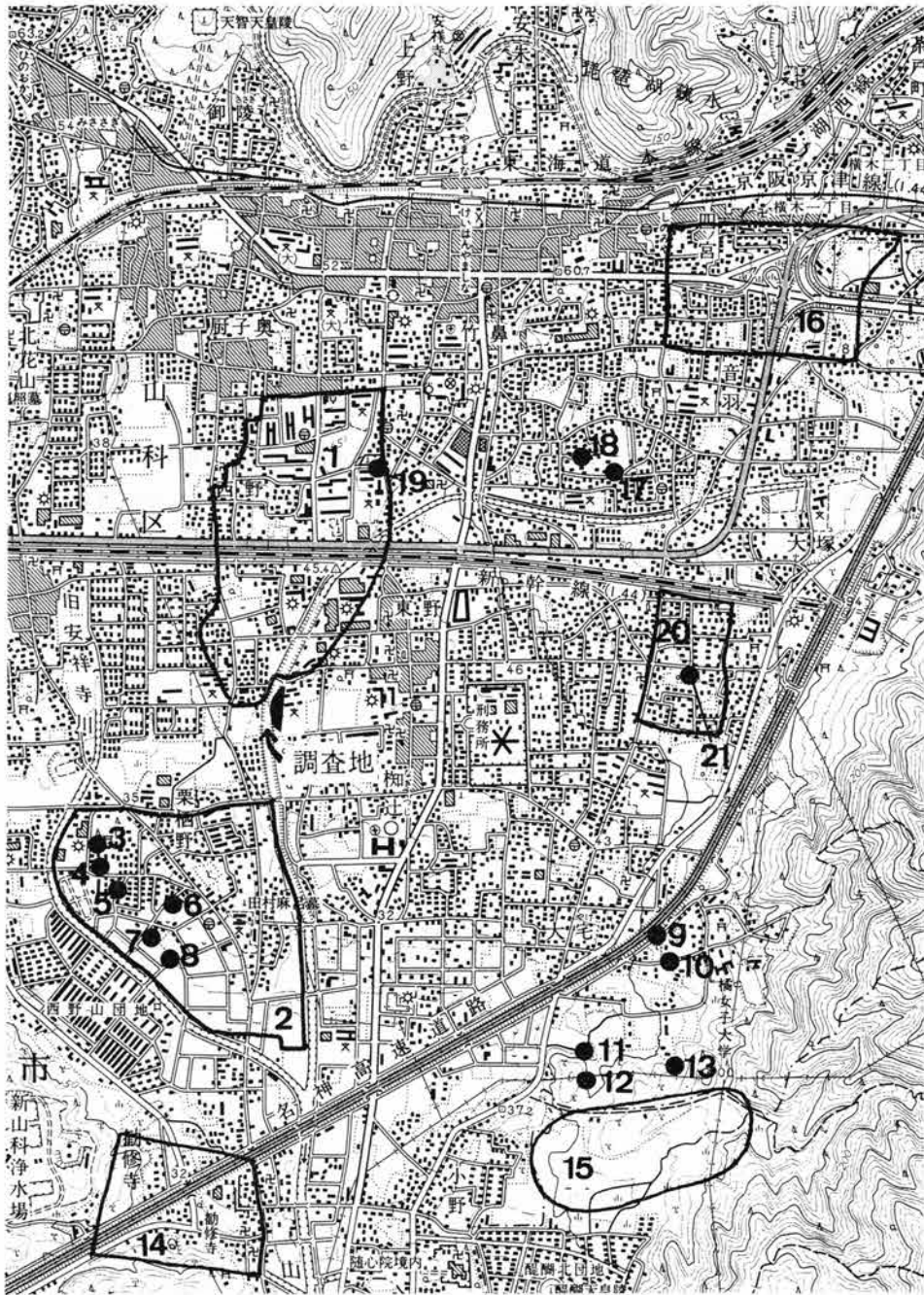
## 5. 山科本願寺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

この調査は、京都府土木建築部の依頼を受け、山科川の河川改修工事に伴い実施したものである。調査地は、京都市山科区東野舞台町に所在する。市立山科中学校と山科川に挟まれた河川敷で、発掘調査面積は約200㎡(第33図)である。現在、調査地のすぐ南までは河川改修工事が終了し、白いコンクリートで固められた護岸部と広い川幅をもつ川となっている。調査地の北側に隣接して山科本願寺跡が広がる。今回の調査では、本願寺に関連する遺構・遺物は得られなかったが、山科川の旧堤防状遺構・流路の痕跡を捉えた。現地調査は当調査研究センター調査課主任調査員辻本和美、同調査員黒坪一樹が担当し、昭和60年10月29日から同年12月16日まで実施した。現地調査および整理作業を通じて、学生諸氏をはじめとする方々の協力<sup>(注1)</sup>を得た。(黒坪一樹)



第33図 調査地位置図



第34図 調査地周辺遺跡分布図 (S=1:25,000)

1. 山科本願寺跡 2. 中臣遺跡 3. 稻荷塚古墳 4. 中臣十三塚一号墳 5. 中臣十三塚二号墳 6. 中臣十三塚三号墳 7. 中臣十三塚四号墳 8. 宮道古墳 9. 大宅古墳
10. 大宅廃寺 11. 向山古墳 12. 大宅瓦窯跡 13. 須恵器散布地 14. 勸修寺旧境内
15. 小野群集墳 16. 芝町遺跡 17. 山科本願寺南殿跡 18. 御指図の井 19. 蓮如上人墓 20. 元屋敷廃寺 21. 妙見宮

## 2. 位置と環境

山科盆地は京都市東山地区の東側に広がり、北を大文字山・如意ヶ嶽、東を行者ヶ森・音羽山の連峰、西を稲荷山・日ノ岡峠に囲まれている。南北に細長く、ちょうど京都盆地を縮小した地形になっている。これらの山々は比叡山系の連続したものや、その分脈である。各々の山は標高こそ低いが、断層と浸食により急斜面を形成している。したがって、平野部に遷りかわるあたりは扇状地が複合的に発達している。また、行者ヶ森の北西山麓から東に流れ出る山科川は、西本願寺山科別院の南端をかすめて南西方向に大きく流れをかえる。音羽川、四ノ宮川、安祥寺川が順に合流し、やがて伏見区に入り宇治川へ注ぎ込む。こうした地理的環境<sup>(注2)</sup>、歴史的な史跡や遺跡も数多く存在する<sup>(注3)</sup>。以下、山科本願寺を筆頭に、調査地付近の歴史的環境について概観しておきたい。

山科本願寺<sup>(注4)</sup>は、蓮如により文明10年(1478)から5年の歳月をかけて完成された本願寺教団初期の寺院である。中心部には御影堂・阿弥陀堂など、豪壮を極めた建物が造営され、六町にも及ぶ寺内町として繁栄した。当寺院は、土塁(土居)によって広大な寺域をとり囲むいわゆる城塞形式をもち、このことが「山科本願寺ノ城」といわれる最大の由縁となっている(第35図)。しかしながら、天文元年(1532)の法華宗徒らの焼き打ちによって、本願寺は大坂の石山へ本拠を遷し、当寺院の繁栄も終焉をむかえた。

この山科本願寺の南に広がる中臣遺跡<sup>(注5)</sup>は、山科川と旧安祥寺川との合流的から北の栗栖野丘陵を取りまく一帯に広がる。昭和48年度以来、数10次にわたる発掘調査がすすめられ、特に勸修寺西金ヶ崎地区の調査(第56・57次)では弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡が14基以上検出された。その他でも縄文～飛鳥時代さらに江戸時代に至る遺構・遺物も検出され、広域な複合遺跡としての重要性をさらに高めた。また、当遺跡内には、中臣十三塚一～四号墳<sup>(注6)</sup>(4～7)・稲荷塚(3)・宮道<sup>(注7)</sup>(8)・大宅<sup>(注8)</sup>(9)などの後期古墳(円墳)が分布し、これらは当地の古墳文化を語る上で貴重な資料である。奈良・平安時代に入ると、勸修寺<sup>(注8)</sup>(14)・大宅寺<sup>(注8)</sup>(10)・安祥寺などの寺院とともに栗栖野・大宅<sup>(注8)</sup>(12)などの瓦窯も造られた。そして、近世の山科は禁裏御領の性格を帯び、山科郷土が町を統轄した。

(宮本英子)

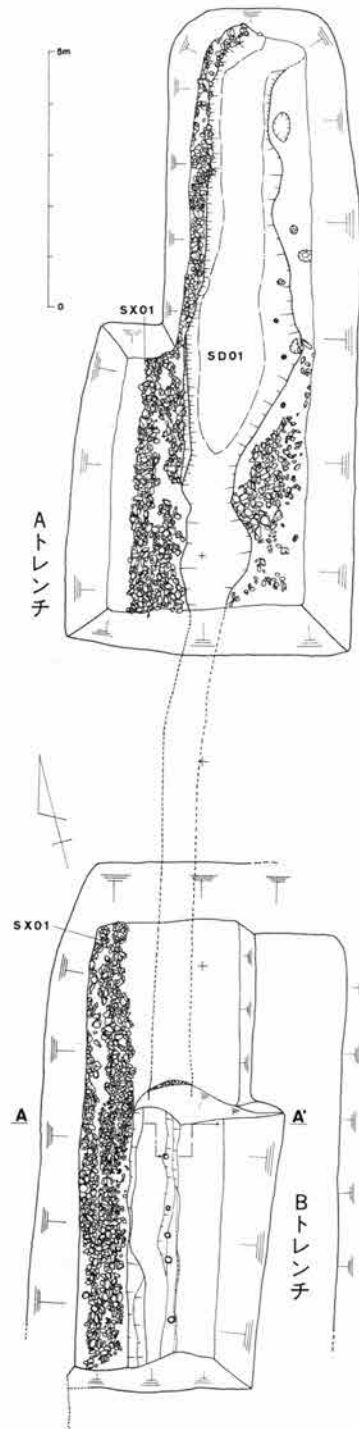


第35図 土居 (西野左義町付近, 南から)

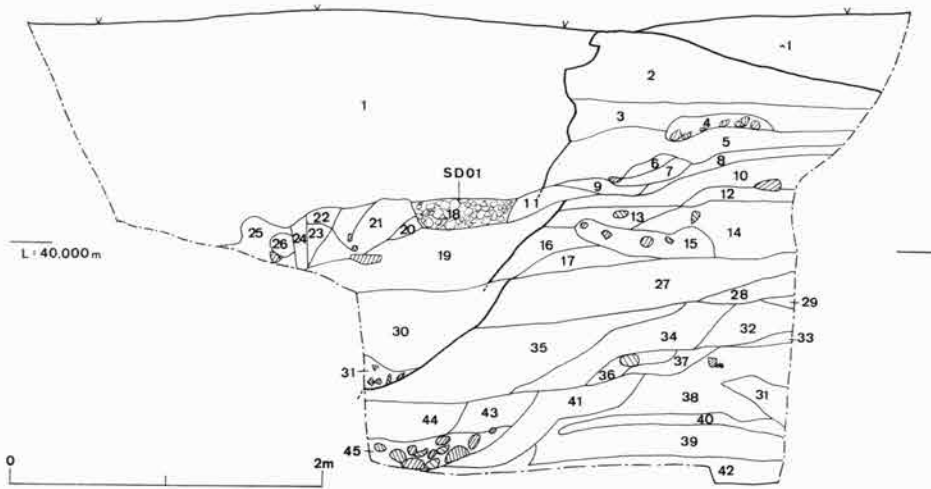
### 3. 調査経過

今回の調査地は、西側を流れる山科川との比高差が約3m(標高約40m)もあり、河川の氾濫を防ぐため、後世にかなりの土砂が盛られていた。したがって、盛土部分は重機で除去し、遺構の有無を確認することにした。北から順にA・B二つのトレンチを設定し、先にBトレンチから掘削を開始した。Bトレンチ南東部では、約60cmの厚さで暗褐色有機質土の表土層があり、この下層には暗褐色砂礫層が厚く堆積していた。一部を地表下約5mまで掘り下げたが、この砂礫層に切れ目はなかった。下位にいくほどやや砂礫は粗大になる。遺物・瓦礫を一切含まないことから、少なくとも地表下2.5mより下層は、段丘礫層であろう。Bトレンチを西側に掘り進むと、東側の礫層とは全く異なる暗黄褐色粘質細砂土が、表土直下で現われた。この暗黄褐色粘質細砂土を北方向に削り出していくと、トレンチ西壁から約1.2mの幅でこの層が現在の山科川と並行して延びていくのが確認された。北側のAトレンチでもこの続きをほぼ同じ深さで捉えることができた。人力掘削に切りかえ、この暗黄褐色粘質細砂土を水平に少しずつ削平していく作業にかかった。精査の結果、この暗黄褐色系の粘質細砂土の堆積は、版築技法で築かれた堤防状遺構と判断した(第37図)。中間部に石を敷きつめて全体を補強している。

さらに、この遺構の東側に並行して流れていた旧流路跡(SD01)を検出した。この東岸にはいくつかの杭跡も残っていた。各トレンチの写真撮影と、石列・流路跡などの実測を終えたあと、壁面直下に最終的な断ち割り溝を入れた。その結果、Aトレンチ西壁の断ち割り溝中から、弥生土器片が出土した。なお、Bトレンチでは堤防状遺構の東側斜面の全体



第36図 遺構平面図



第37図 Aトレンチ南壁断面図

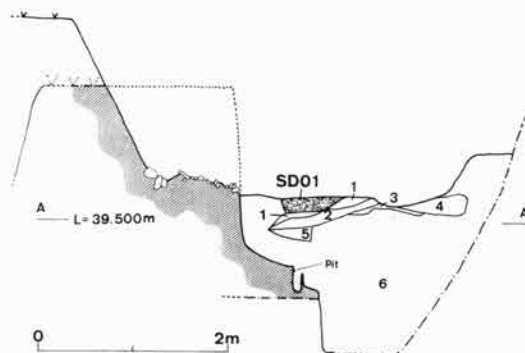
1. 暗褐色砂礫層 2. 濁赤黄褐色土 3. 明赤黄褐色粘質極細砂土 4. 暗黄褐色礫層
5. 暗黄褐色粘土層 6. 黄白色粘土混り黄褐色極細砂 7. 暗黄褐色粘質細砂土 8. 黄褐色礫混り粘質土 9. 暗黄褐色粘質細砂土 10. 暗黄褐色細砂質土 11. 黄赤褐色極細砂質土 12. 橙色粘土塊混り暗褐色粘質土 13. 暗黄褐色粘質土 14. 濃黄褐色細砂質土
15. 石列を形成する層 16. こげ茶土混り橙褐色粘質土 17. 黄褐色極細砂 18. 流路
19. 橙褐色極細砂質土 20. 明青灰褐色細砂 21. 濁赤褐色粘質細砂 22. 茶褐色有機質土 23. 暗赤褐色有機質土 24. 濁暗青灰色粘土 25. 橙褐色極細砂 26. 暗灰青色粘土塊
27. 淡赤灰褐色粘質極細砂 28. 暗(赤)褐色細砂質土 29. 暗赤灰褐色細砂質土
30. 淡赤褐色極細砂土 31. 礫混り淡赤褐色粘質砂粒層 32. 暗褐色細砂質土 33. 暗赤褐色粘質土 34. 暗黄褐色粘質極細砂土 35. 明赤灰褐色極細砂土 36. 濁赤褐色細砂
37. 明淡褐色細砂質土 38. 暗赤褐色極細砂土 39. 橙灰褐色極細砂 40. 暗赤褐色細砂粒層 41. 青灰色粘土斑(不定形)混り橙黄色極細砂土 42. 濃茶褐色細砂 43. こげ茶斑混り暗赤褐色細砂質土 44. 明青灰褐色細砂 45. 暗灰褐色細砂粒層(礫混り)

形を完掘し、西側についても断面で確認することができた(第38図)。(黒坪一樹)

#### 4. 遺構と遺物

今回検出した主な遺構は、両トレンチにまたがって検出された堤防状遺構(SX01)と旧流路跡(SD01)である(第36・38図)。

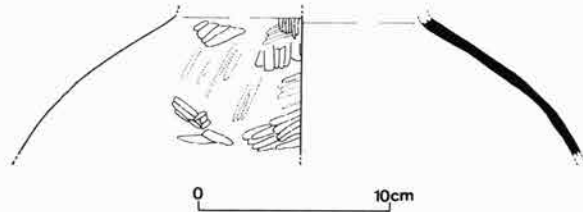
堤防状遺構(SX01)は、その規模をBトレンチ中央部でみると、高さ約2.5m・基底面の推定幅約3.5m・最上面推定幅約2mを測る(第38図)。赤褐色系の粘土や、黄褐色系の礫混り粘質土を中心に版築状に積み重ねられている。ちょうど中間あたりに、



第38図 堤防状遺構・旧流路跡断面図(Bトレンチ)

1. 暗青灰色極細細砂粒 2. 濁黄褐色細砂
3. 濁青灰色粘質土 4. 灰褐色細砂質粘土
5. 濁青灰色粘質極細砂 6. 暗褐色砂礫

拳大の石を敷きつめた層がある。おそらく全体を強固にするための一工法なのであろう。なお、東側斜面の裾部で土止めに使ったと思われる杭跡を検出した。いずれも径10cm前後の細いものである。



第39図 弥生土器実測図

旧流路跡(SD01)は、幅約0.8~2.0m・深さ約10~40cmを測る(第36図)。流路内は、粗砂礫がぎっしりと詰っていた。かなりの流れがあったものと思われる。杭跡は東側にのみ並存していた。いずれも青灰色粘土の詰った直径10cm前後のものである。なお、この流路は、堤防状遺構が河川の氾濫などで半ば埋没して以後に形成されたことが窺える。

先にこれら2つの遺構が現在の山科川に並行していると述べた。しかしながら、よく観察すると、Aトレンチの最北端部において、両遺構とも東側に緩やかな曲線を描いて曲がっていく様相をみせる(第36図)。河川の湾曲に沿って、堤防状遺構を築いたことによるのか、川幅の広がりによって、河川から距離を隔てて堤防を築く必要性が生じたものか詳細は不明である。いずれにしても、人為的な改変が加えられている。

出土遺物は、堤防状遺構の盛土中から出土した若干の棧瓦・陶磁器片・石工用鉄製ノミ・須恵器片・土師器片・弥生土器片などがあげられる。弥生土器片と器形の不明な須恵器と土師器の小片を除き、すべて近・現代の遺物が中心である。弥生土器片(第39図)は、破片ながら壺の胴部と思われ、口縁部の立ち上り付近のものである。チャート粒がまばらに混入した粗い胎土で、外面には幅の広い磨き痕が観察される。内面はナデによる整形を施す。色調は内外面とも暗灰褐色である。

## 5. おわりに

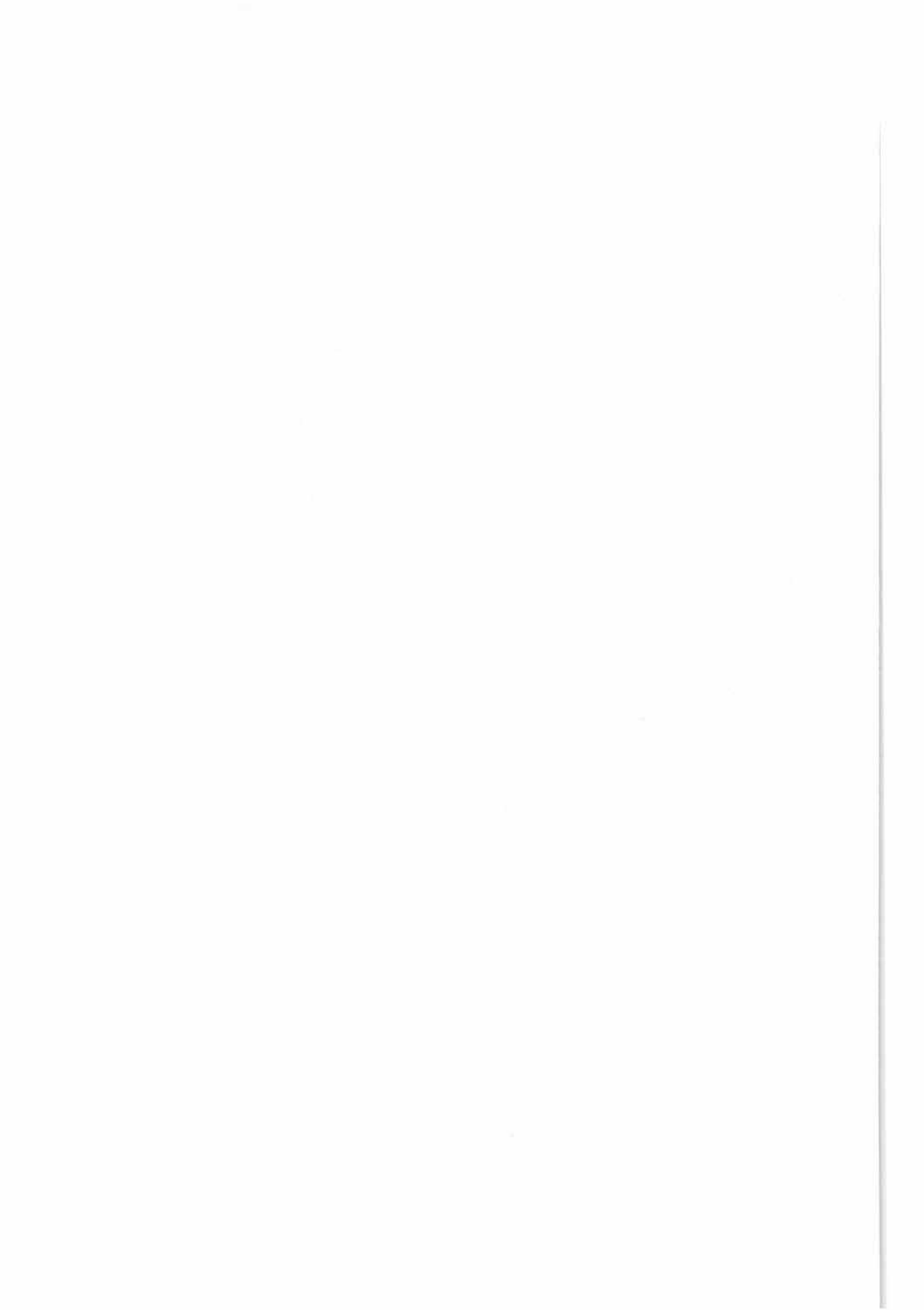
今回の調査では、現在の山科川に沿った近・現代の堤防状遺跡および流路跡を検出した。したがって、近隣の山科本願寺跡や中臣遺跡に関連する遺構の痕跡は認められなかった。わずかにAトレンチ西壁の断ち割り溝中から出土した弥生土器片が、集落跡としての中臣遺跡に関連する資料と言える。しかし、この遺物は堤防状遺構(SX01)の下位に包含され、原位置をとどめたものではない。この辺の事情は、集落跡の平面的な広がりを追及し得る土層の堆積状況が、今回の調査では確認されていない点をあげておけば充分であろう。さらに、山科本願寺跡に関わる遺構・遺物も皆無であった。城塞的色彩をもつ山科本願寺は、山科川を自然の堀として利用していた。外敵に対する防御や水利の観点から、山科川が本願寺に果たした役割には甚大なものがある。今回、山科川が本願寺に及ぼした何らかの影響

の片鱗でも捉えられないかと念じたが、この点についても成果を上げられなかった。

(黒坪一樹)

- 注1 澤田尚子(京都女子大学)・城田正博(立命館大学)・宮本英子(橘女子大学)・野田侑記子・平野仁佳子(嵯峨美術短期大学)。なお、発掘調査期間中、市立山科中学校には調査に対する様々な便宜を図って頂いた。山科本願寺や山科の地誌について、先生方から多くの有益な御教示も得た。調査関係者一同、心より謝意を表しておきたい。
- 注2 山科町役場編「第一章 地理」(『京都府山科町誌』所収) 1973
- 注3 梶川敏夫・平田 泰・吉村正親『京都市遺跡地図台帳』 1977  
京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化観光局文化財保護課編「京都市遺跡地図」 1977  
『第5次 山科分布調査概報』橘女子大学考古学研究会 1982
- 注4 竹岡 林・芦田 完・乾幸次郎他「山科本願寺」(『日本城郭大系』11) 1980  
山田良三「山科本願寺跡」(『古代学研究』69 古代学研究会) 1973
- 注5 『中臣遺跡発掘調査概報』京都市文化観光局文化財保護課編 1984
- 注6 高橋美久仁「東山区中臣十三塚群墳採集の須恵器」(『京都考古』第9号) 1974
- 注7 有光教一・坪井清足「大宅廃寺の発掘調査概報」(『名神高速道路線地域内埋蔵文化財報告』)1963
- 注8 坪井清足「大宅廃寺の発掘」(『仏教美術』第37号) 1958





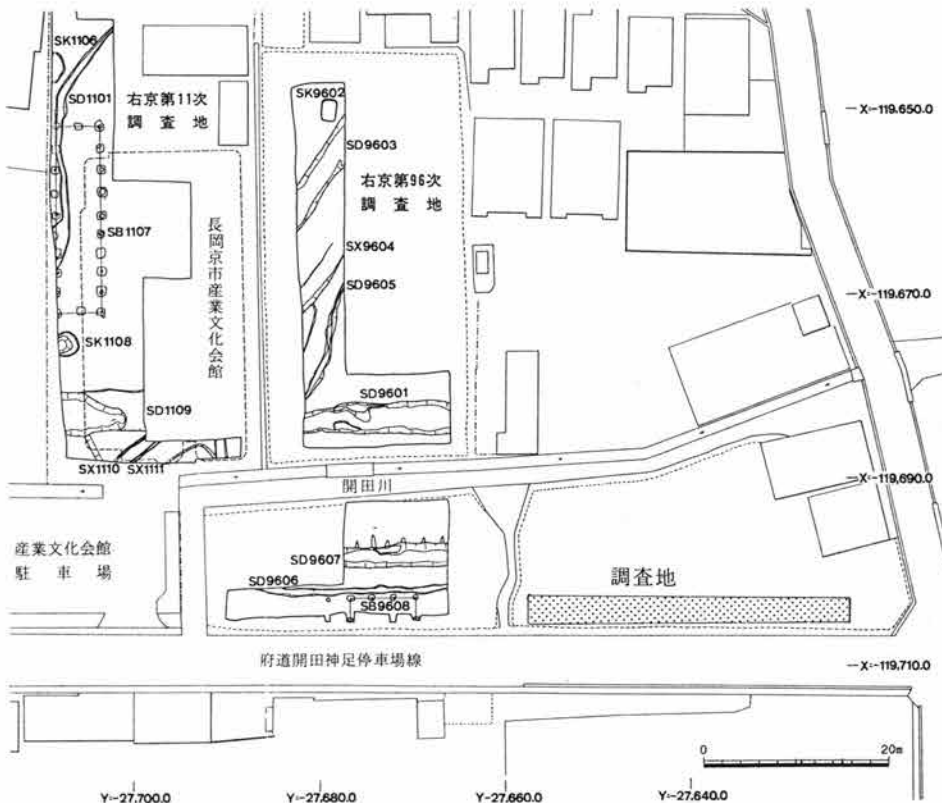
## 6. 長岡京跡右京第194次発掘調査概要

(7ANKNT-2地区)

### 1. はじめに

本報告は、長岡京市開田三丁目に当る府道開田神足停車場線を拡幅し、交通安全施設を設置する工事に先立ち実施した発掘調査の概要である。京都府乙訓土木事務所の依頼を受け、当調査研究センター調査課主任調査員辻本和美と同調査員黒坪一樹の2名が現地調査を担当した。府道に沿った畑地の調査地は東西方向に細長く、掘削面積は約85㎡(2.4×36m)である。調査期間は、昭和60年6月19日から同年8月2日までで、期間中には京都文教短期大学教授中山修一氏、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの木村泰彦氏から、さまざまな御教示を受けた。現地調査・整理事業についても、<sup>(注1)</sup>多くの方々の協力を得た。

調査地は、長岡京跡の条坊復原図によれば右京六条二坊八町～九町に推定される(第40



第40図 調査地位置図

図)。従って、南北道路の西二坊坊間小路に関わる側溝などの遺構が検出されるものと期待した。西二坊坊間小路と五条大路との交差点は、調査地から北へ約10数mと推定される。この開田地区という所は、数多くの考古学的資料が調査・報告されてきている。とりわけ、西側の隣接地で検出された五条大路南北両側溝と掘立柱建物跡などの遺構が重要なものとしてあげられ(注2)る。また、調査地の東側には、前方後円墳として周濠が確認された塚本古墳が存在する。今回の調査に当たり、これらの遺跡群と関連する遺構の検出に努めた。長岡京期における本地区の整備状況や、塚本古墳周辺部の遺構の残存状況などを慎重に調査することにした。

## 2. 調査経過

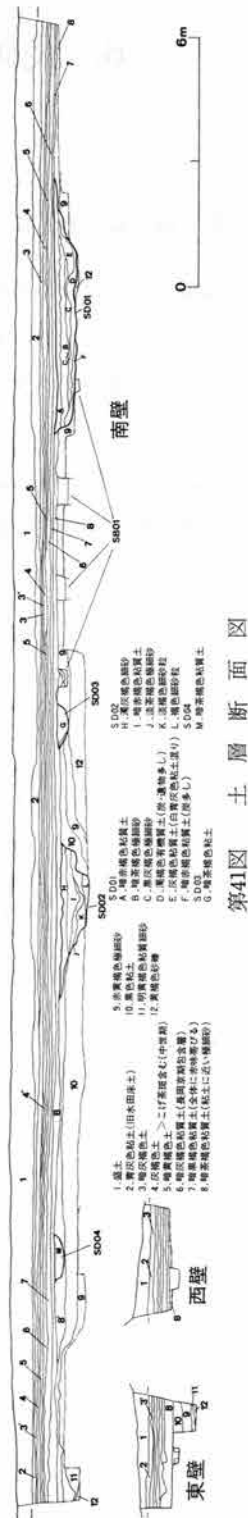
調査はまず、トレンチ西端から盛土と旧水田耕作土・床土を重機で排除することから始めた。そして、旧水田床土直下の暗灰褐色土(第3層)が露出した時点で、人力掘削に切り替えた。この第3層は中世期のものと考えたが、遺構はなく、遺物もごく少量しか出土しなかった。さらに水平掘削をすすめ、濃い暗茶褐色粘質土(第8層)の広がりをトレンチ西側で捉えた。ここから長岡京期の遺物と共に、柱穴痕や溝状遺構(SD19401)を検出した。トレンチを東に掘りすすめていき、さらに3本の南北溝(SD19402~04)をはじめ、南壁断面にかかって掘立柱建物跡(SB19401)などを検出した。トレンチ東端部においても、柱穴痕や浅い溝状遺構が存在していた。遺物は、溝状遺構(SD19401)にはなはだ多かった。

西二坊坊間小路の東西両側溝は、SD19402(西側溝)とSD19404(東側溝)である。なお、東に隣接する塚本古墳に伴う遺構は確認し得なかった。遺構各部の写真撮影と実測の後、発掘区を埋め戻してすべての作業を終了した。

## 3. 層位

調査地における土層断面は、第41図に示すとおりである。

第1層と第2層は、近・現代の盛土および旧水田床土で、こ



の直下の第3層から第5層にかけては中世期の遺物が若干出土した。しかしながら、遺構の検出はかなわなかった。第3層は、赤褐色味を帯びた暗灰褐色土で、約10cmの厚さを測る。この層からの出土遺物ははなはだ少ない。第4層は、茶褐色粘土塊を斑らに含む層である。植物遺存体や鉄分が観察される。厚さは約12cm。続く暗黄褐色土の第5層とともに、中世期の包含層と言える。

第6層は、暗灰褐色粘質土である。長岡京期の遺物がわずかながら出土する。厚さは約15cm。第7層では長岡京期の遺物が多く出土したが、遺構は認められなかった。第6層・第7層は、長岡京期の遺物包含層として捉えられる。

第8層は、暗茶褐色粘質土で厚さは約20cmを測る。炭化物を含む有機質土で極めて黒っぽい色調である。トレンチ西側でのみ存在し、長岡京期の遺構面を形成している。トレンチ中央部から東側にかけては、第9層(赤黄褐色極細砂)および第8・10層がそれぞれ長岡京期の遺構面となっている。

厚さは、第9層が約25cm、第10層が約35cmである。第8層からは溝状遺構(SD19401)、第9層からは掘立柱建物跡(SB19401)・溝状遺構(SD19403)、第8・10層からは溝状遺構(SD19402・04)、柱穴・その他の溝などの遺構をそれぞれ検出している。

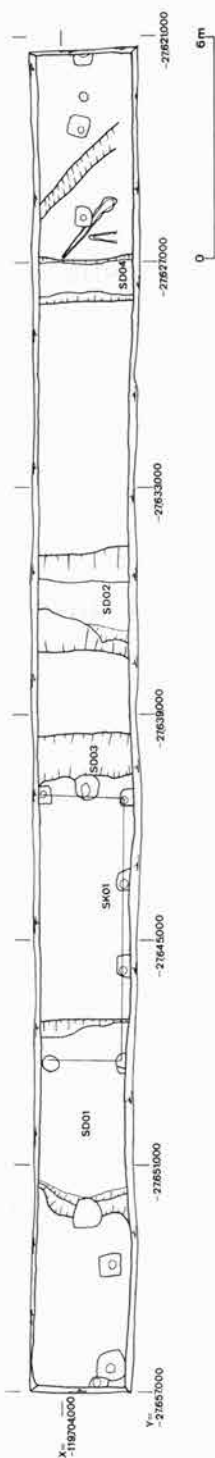
第11層は、明黄褐色粘質細砂である。無遺物層で、このあたりの低地性扇状地を形成している地山の層といえる。厚さは、約50cmを測る。礫はまったく含んでいない。

第12層は黄褐色砂礫で、この層もまったくの無遺物層である。全体に明るい色調を帯びる。また、直径1~5cm大のチャート礫を多く包含している。全体に、当地の土層堆積は細を極めるが、残存状況の良好な点が特徴的である。

#### 4. 遺 構

遺構平面図(第42図)によって、溝状遺構(SD19401)から順に説明していきたい。

溝状遺構(SD19401)は幅約5.3m、深さ60~80cmを測る南北溝



第42図 遺構平面図

である。その幅が他の溝と比較してはなはだ広いことから、溝よりも土坂あるいは小規模な水溜り(池)のような遺構になる可能性もある。埋め土は第A～H層に分けられる(第41図)。これらのうち、濁った黒灰褐色極細砂(第C層)から下位にいくにつれ、多量の炭化物とともに遺物出土量も多くなる。土師器類、須恵器類、土馬、平瓦片、製塩土器などが出土した。とりわけ、製塩土器の多さは特筆される。また、炭化物が製塩土器の周辺に多かった点もあげておく。

溝状遺構(SD19402)は幅約2.8m、深さ約60～80cmの南北溝である。埋め土は、第H～L層に分層し得る(第41図)。下層ほど粘性を帯び、上層ほど砂粒が多くなる。遺物は長岡京期のものばかりである。遺物量は溝状遺構(SD19401)の半分以下であるが、製塩土器のみは3分の2を上回っている(第46図)。なお、本溝は西二坊坊間小路の西側溝に当る。

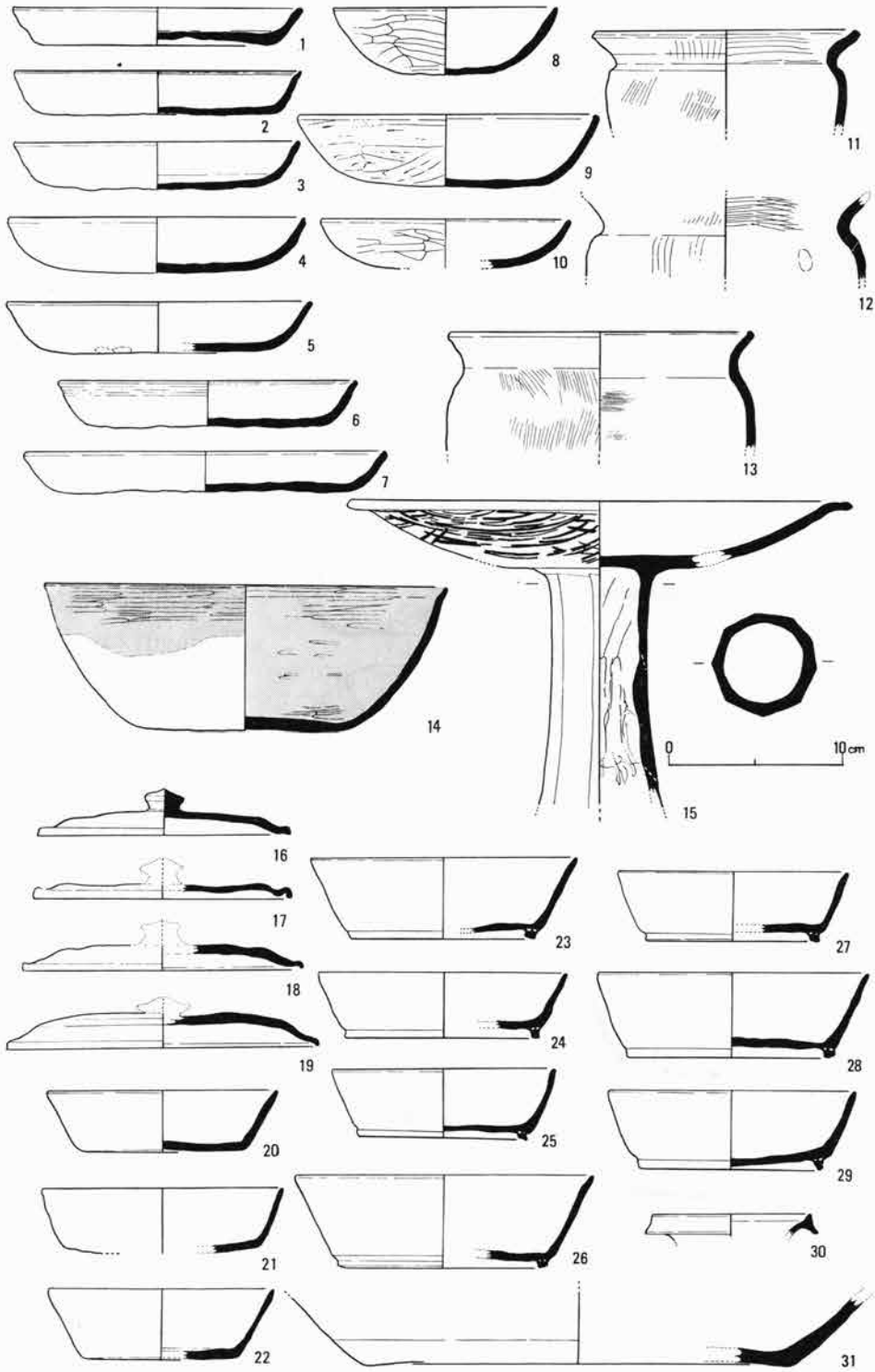
溝状遺構(SD19403)は、幅約1.2m、深さ約30cmの規模である。南北方向の溝で、前二者の溝と比較すると小規模である。埋め土は、赤味をわずかに帯びた暗茶褐色粘土である。出土遺物は、土師器類、須恵器類、製塩土器などである。すべて長岡京期に比定される。

溝状遺構(SD19404)は、幅約1.3m、深さ約25cmの大きさである。溝状遺構(SD19403)とはほぼ同一の規模を有する。埋め土が暗茶褐色粘質土で、この点も溝状遺構(SD19403)とはほぼ共通している。出土遺物は、土師器杯が1点出土したにすぎず非常に少ない。この溝は、西二坊坊間小路の東側溝で、溝状遺構(SD19402)と対応する。

掘立柱建物跡(SB19401)は、二間×三間のものである。柱間距離は、東西2.4～2.2m、

付表3 検出溝座標値

項	国 土 座 標		標 高 (m)	名 称	
	X	Y			
SD 01	N	-119.703.392	-27.649.280	17.318	
	S	-119.705.680	-27.649.880	17.560	
SD 02	N	-119.703.350	-27.636.060	17.263	西二坊坊間小路 西側溝
	S	-119.705.820	-27.636.040	16.988	
SD 03	N	-119.703.320	-27.640.290	17.640	
	S	-119.705.840	-27.640.080	17.428	
SD 04	N	-119.703.380	-27.327.480	17.593	西二坊坊間小路 東側溝
	S	-119.705.940	-27.327.430	17.428	



第43図 SD19401内出土遺物実測図

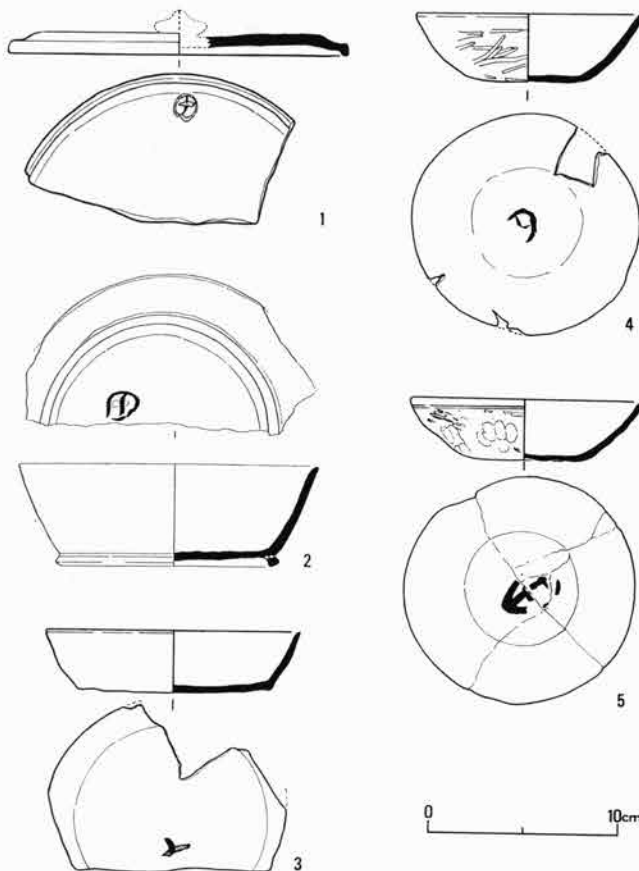
南北2.2m(東側)である。柱穴は、1辺約70cmを測る。暗赤褐色粘土の埋土に、暗灰褐色粘土の柱芯痕が観察された。同様の規模をもつ柱穴痕は、溝状遺構(SD19401)の西側および溝状遺構(SD19404)の東側で3基ずつ検出している。

また、溝状遺構のSD19401と03の東側の肩を切って隅丸方形の土壇が穿たれていた。柵あるいは杭列になるのであろうか。

溝状遺構(SD19404)の東側には柱穴痕とともに3本の溝状遺構が存在していた。これらのうち2本は、南東から北西方向に走り、溝状遺構(SD19404)に流れ込む様である。また、柱穴により寸断された箇所があり、新旧関係も捉えられた。いずれの溝も暗灰褐色極細砂を埋め土とし、深さは約5cm前後で浅く、遺物も皆無であった。

### 5. 遺物

出土遺物は、長岡京期に属するものがほとんどすべてであると言える。したがって、今



第44図 墨書土器実測図

回の報告ではこれらを最も多く出土した溝状遺構(SD19401)を例にとり、ここからの出土遺物についてみておきたい。なお、4本の溝状遺構(SD19401~04)から出土した遺物については、器種ごとの出土点数を算出し、グラフで提示しておいた(第46・47図<sup>(注3)</sup>)。

溝状遺跡(SD19401)からの出土遺物を、細片のために図化し得なかったものを含めて列記すると、土師器皿・杯・碗・甕・高杯、黒色土器杯、須恵器杯蓋・杯・壺・甕・盤、製塩土器、土馬(足部)、平瓦片、鉄釘1点、サヌ



第45図 製塩土器実測図

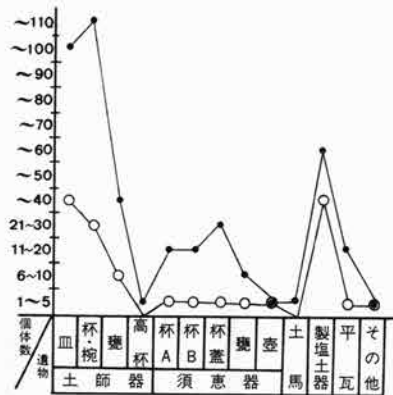
カイト剥片1点となる。

土師器皿(第43図1~7)は、底部に指頭圧痕を残す未調整のものが多く、内・外面は横ナデにより調整される。図示した中では7が最大径を有し、20.4cmを測る。

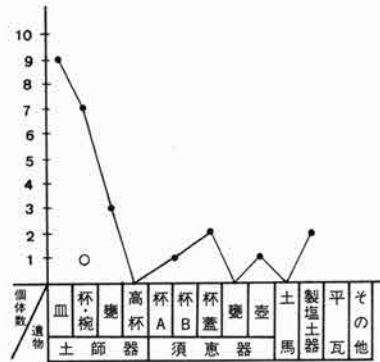
土師器碗・杯(第43図8~10, 第44図4・5)は、外表面を底部まで篋削りするものがほとんどである。また、碗の中には小形で、体部上半にて口縁部をやや外反さすものがわずかながら存在する。これらは体部下半から底部にかけて指頭圧痕を残し、口縁部は横ナデを施している。いわゆる「碗口」といわれるものがこれに当る。

土師器甕は3点図示した(第44図11~13)。全体にみて、胴部から口縁部にかけての屈曲部全周に、指によるナデ押えのまわるものが多く、口縁部内面と胴部外面に粗いハケ目痕





第46図 遺物量器種別集計グラフ1  
(●SD1940101, ○SD19402)



第47図 遺物量器種別集計グラフ2  
(●SD19403, ○SD19404)

をとどめる。

黒色土器杯(第44図14)は、口縁部径22.9cm, 器高8.1cmと大型である。内面および外面上半部を真っ黒に燻している。調整はこの黒色部に施され、細かな磨き痕が観察される。橙褐色の外面向下半部は、器壁が荒れて調整不明である。なお、底部外面には内面と同じく細かな磨き痕をとどめる。

高杯(第44図15)は、上杯部の外表面に細長い磨き痕がみられる。脚柱部は九角形に面取りされている。胎土は良好で細かく、焼成も堅くしっかりしている。

須恵器杯蓋・杯(第44図16～29)は須恵器類の約9割を占める。杯蓋は内・外面を回転ナデにより仕上げたものである。いずれも平坦に近い頂部と屈曲する端部をもつ。特に16は先の尖った文字通りの宝珠つまみを有する。直径は12.5cmを測る。また、杯には高台をもつもの(B)とこれを貼り付けないもの(A)がある。すべて体部および口縁部の内外面に回転ナデを施す。須恵器壺(同図30)は、真上と斜め下方に張り出す口縁部をもつものである。内外面には回転ナデがかかる。口縁部径は約9cmを測り、胎土は良精で焼成もしっかりしている。須恵器盤(同図31)は、底部から体部にかけての破片である。胎土はあまりよくないが、焼成は非常に堅い。内外面ともナデによる整形である。底部径は約22.5cm。

墨書土器は5点出土している(第44図)。土師器碗の底部外面(4・5)、須恵器杯蓋の内面の縁辺部(1)・杯身の底部外面(2・3)にそれぞれ書かれている。3～5は不明瞭であるが、他は「⊕」と判読される。なお、3のみは溝状遺構(SD19402)から出土した。

製塩土器は13点図化した(第45図)。出土遺物全体に占める比率は高く、およそ50個体分はある(第46図)。ほとんど淡赤褐色の厚い器壁をもつ。口縁部の形態でみると、内側にややふくらみをもたせながら曲がるもの(1・4・8・15)、まっすぐで端部をまるくおさめるもの(3・5・6・7・9・18・19)、外反するもの(16・17)指による細かなつまみ上げを全周

に施し、凹凸になっているもの(2)などがある。13は、現時点で底部までの復原ができた唯一のもので、砲弾形を呈する。また体部の裏面に、絹布のような極めて細かい布痕を観察し得るもの(12)がある。さらに(10)は、克明なハケ目痕を外面は縦方向に、内面は横方向にとどめている。この(10)は、砂粒を多く含む胎土で器壁が薄く、なおかつ灰黄色を呈する特徴的なものである。(12)と(10)は、それぞれ1片ずつしか出土していない。なお、(14)～(19)は溝状遺構(SD19402)から出土した。

## 6. おわりに

今回の調査結果として、まず西二坊坊間小路の東西両側溝の検出があげられる。溝状遺構(SD19402)が西側溝に、同(SD19404)が東側溝になると考える。両側溝の規模をここでもう一度記すと、SD19402は幅約2.8m、深さ約60～80cm、一方のSD19404は幅約1.3m、深さ約25cmであった。長さはいずれもトレンチ幅の約2.4mである。西側溝であるSD19402は東側溝の2倍以上の幅を有し、深さにおいてもその差は瞭然としている(第42図)。埋め土の堆積状況や出土遺物量についても大きな差異がうかがわれる(第41・46・47図)。1本の条坊遺構で、両側溝の規模を著しく違えた例として、R96次における五条大路南北両側溝が想起される。五条大路北側溝(SD9601)は南側溝(SD9607)に較べて約1.5倍の規模をもっていた。条坊側溝の一つの在り方として注意しておくべきであろう。この五条大路と今回検出された西二坊坊間小路の交差点の状況がどういったものか将来の調査に期待をかけた。

なお、西二坊坊間小路は、両側溝の心々間距離が7.8m、路肩間距離が5.9mである。この路面内から西側に大きく外れて、朝堂院中軸線および西二坊大路中軸線の座標値から割り振られた中軸線が通る。座標値を示すと、 $Y = -27.639$ となる。

条坊側溝以外の溝の中では、SD19401の存在が目される。幅約5.3m、深さ60～80cmを測り、検出溝中最大の規模である。長岡京期の多くの遺物が出土している。土層観察からすると、この溝はSD19403や掘立柱建物跡(SB19401)のある層よりも1層上から掘り込まれている。建物跡や条坊側溝などが消失して以後の溝である可能性が強く、いかなる理由でこういった幅の広い溝を掘り、多量の遺物を投棄したのか理解に苦しむところである。また、SD19403はSB19401に極めて近接しているのが気掛かりであるが、条坊側溝と建物のある地域とを画する溝と考えている。埋土は茶褐色系の粘土であり、あまり流れがなかったものと推察している。このことは、条坊の東側溝であるSD19404にも当てはまる。

建物跡についてであるが、今回の調査では二間×三間の掘立柱建物跡(SB19401)が確実なものである。しかしながら、トレンチの東西端で検出されたような柱穴痕は何らかの建

物跡を構成しているものとみられる。

この開田地域における長岡京の整備の完成度はかなり高いようである。西の市推定地を中心とする周辺の調査地から出土する多種多様な遺物、二間×三間以上の規模をもつ多くの掘立柱建物跡の存在が完成度の高さを示唆している。今回の調査において、この点をさらに裏付けるためのささやかな資料を得たと言えよう。 (黒坪一樹)

注1 調査補助員 片岡利広・飛田浩一

整理員 赤司 紫・加藤由美・関本典子・丹新千晶・土屋桂子・中島恵美子・西岡ひろみ  
・吉田恵子・山本彌生・和田正子

注2 木村泰彦・伊辻忠司・中井正幸「第3章 長岡京跡右京第96次調査概要(7ANKUT-4地区)」  
〔『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集』長岡京市教育委員会) 1984

注3 各出土点数はすべて個体数を出すように努めた。同一個体と思われるものを可能な限り集め、それらの個体を数えた。したがって、1片の資料でも極めて特徴的なものは1個体として取り扱っている。こうしたものはごく少量であるが、一言ことわっておきたい。なお、破片の点数が多く、これらを含めた正確な点数が割り出しにくかったので、SD19401とSD19402内の資料については10点の幅を敢えて設定した。

# 圖 版



長岡京周辺航空写真



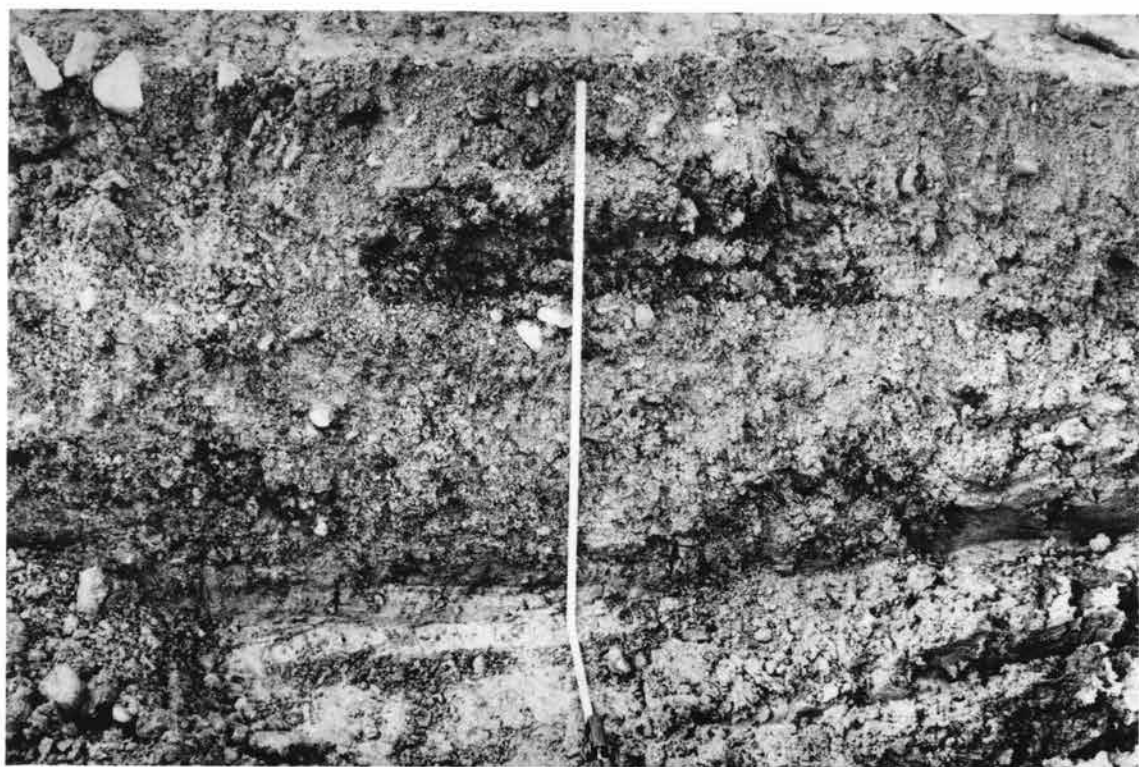
(1) 下植野大山崎線立会調査状況



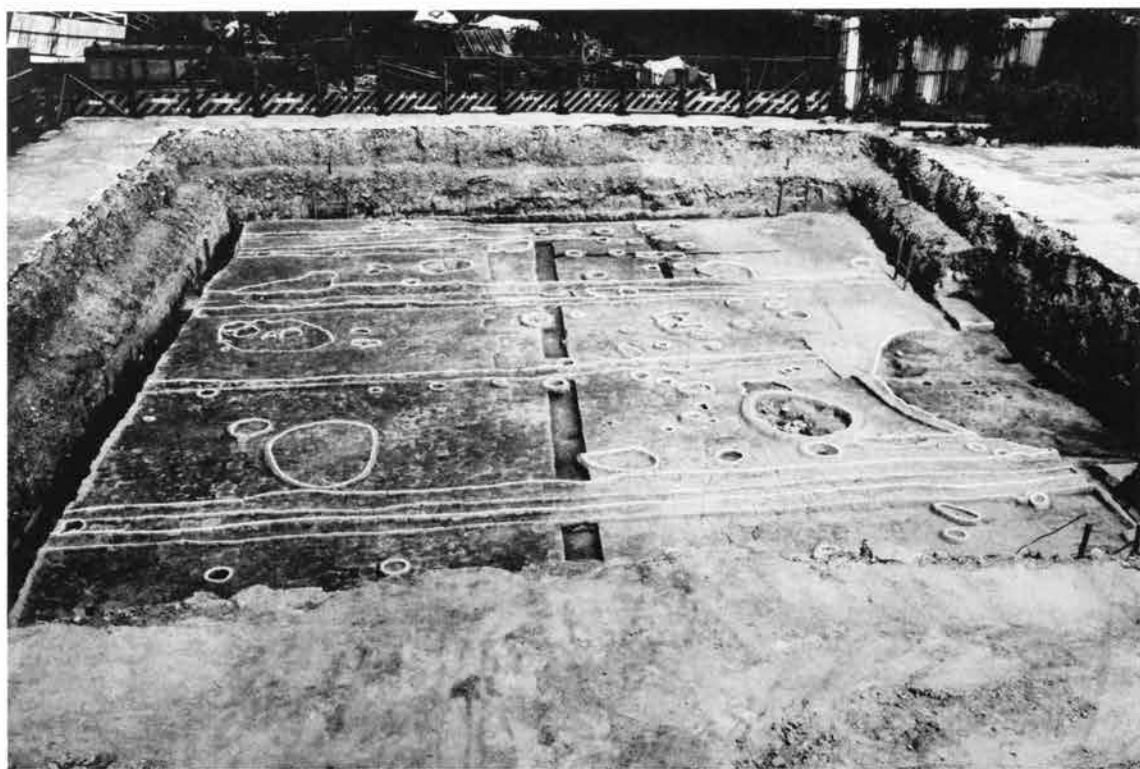
(2) 同上 掘剖面土層状況



(1) 檜原高槻線(中海道遺跡)立会調査状況



(2) 同上 掘削面土層状況



(1) 第1トレンチ全景 (西から)



(2) SH12450・SK12451 (北から)





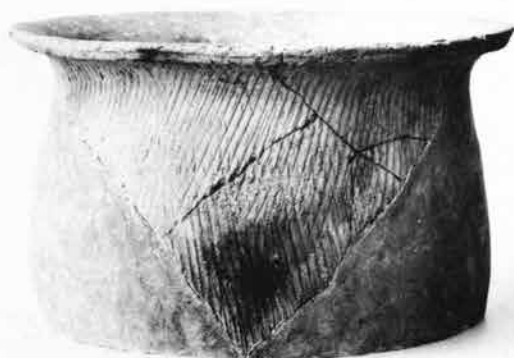
(1) SK12451遺物出土状況(東から)



(2) SH12451中央土壇遺物出土状況



1



2



3



4



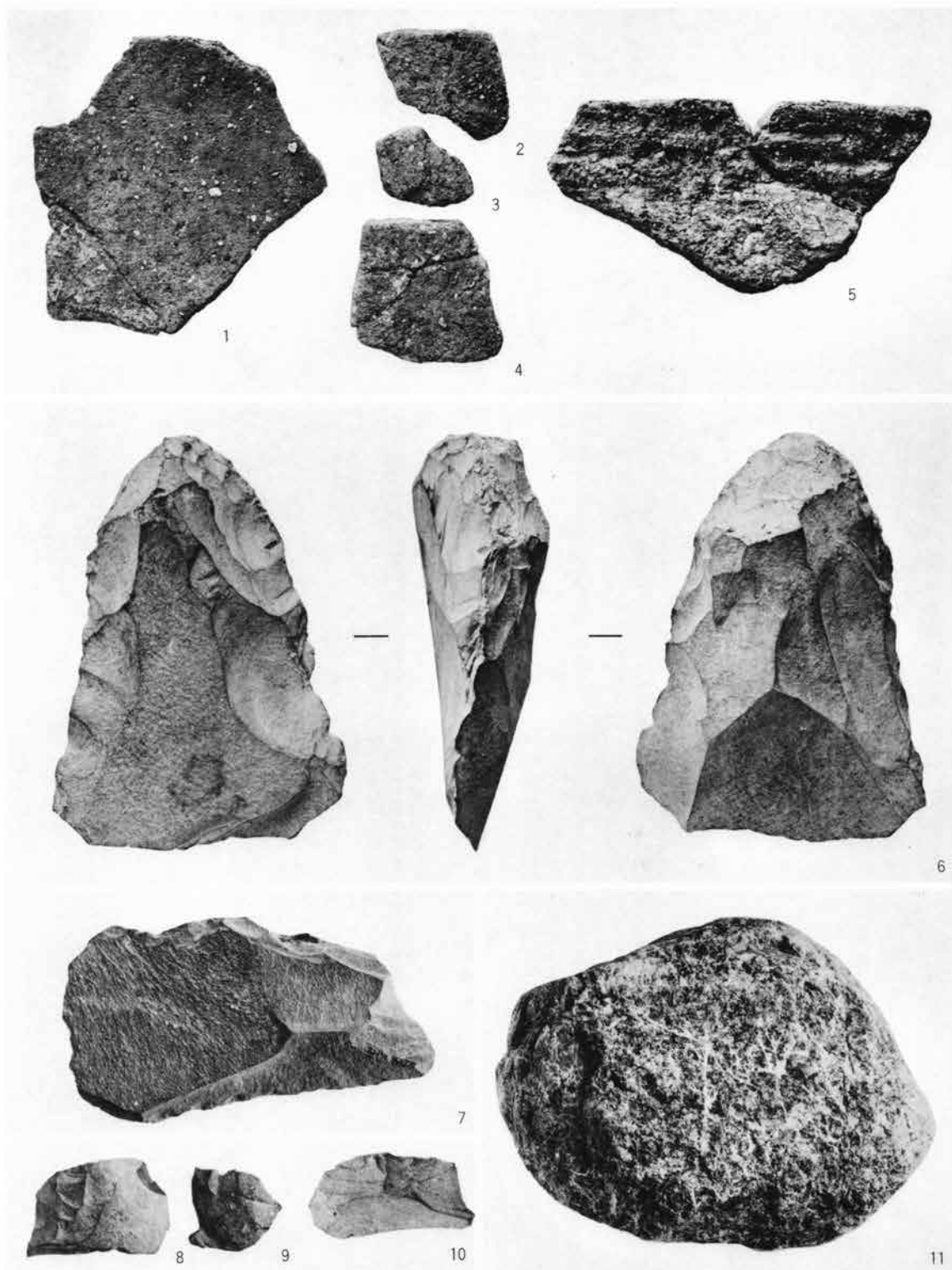
5



6

出土遺物(1)





出土遺物(3)



(1) 調査地近景 (南西より)



(2) 第2トレンチ (南西より)



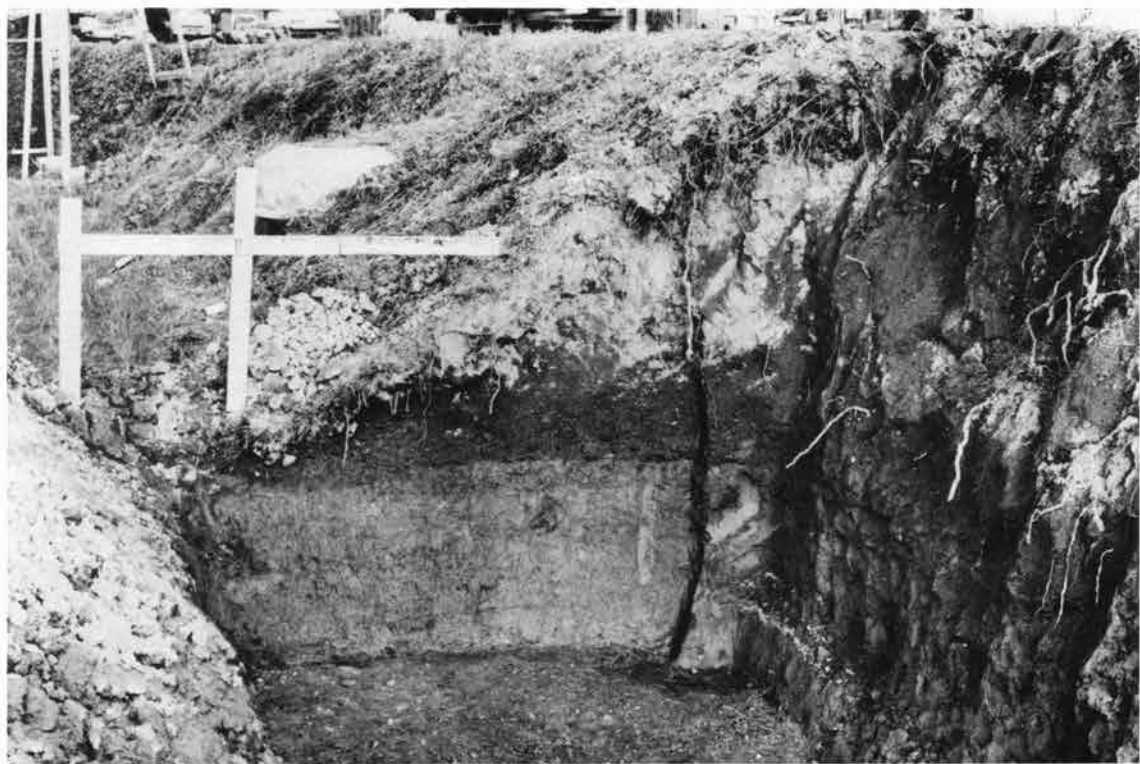
(1) 第3トレンチ (北東より)



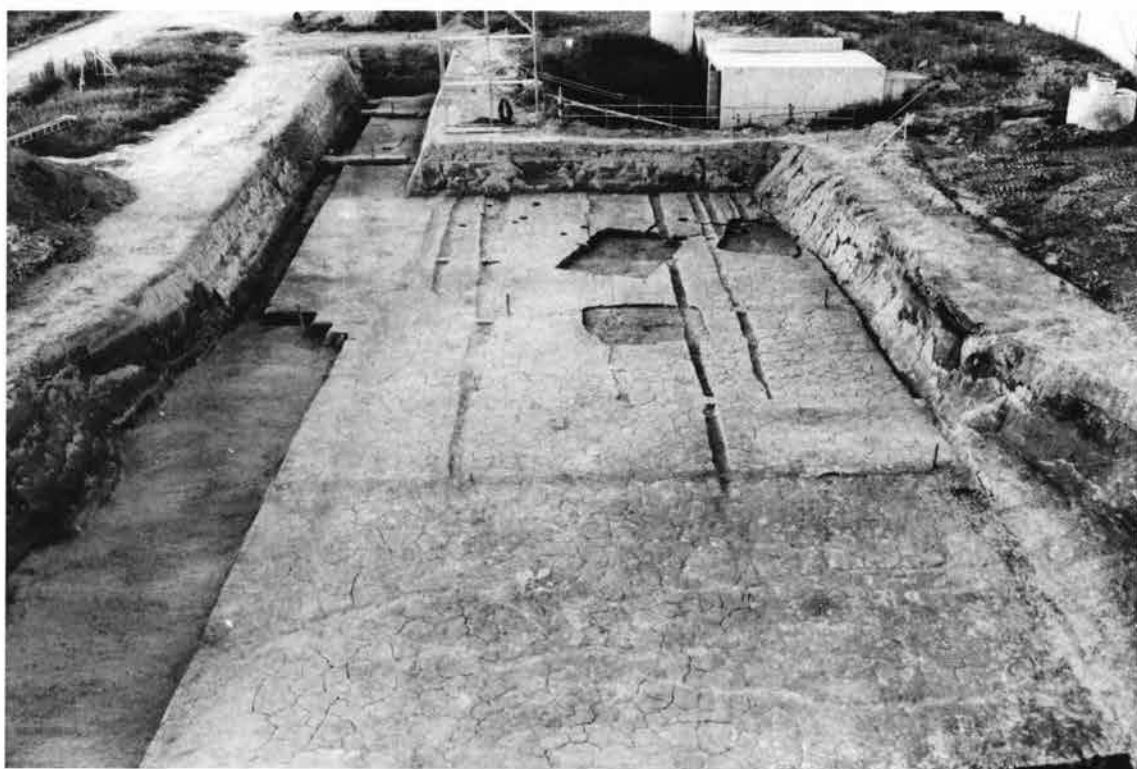
(2) 第3トレンチ土層断面



(1) 第5トレンチ (北東より)



(2) 第4トレンチ土層断面



(1) OD地区調査地全景（南から）



(2) OD地区素掘り溝・柱穴群検出状況（北西から）





(1) OD地区検出竪穴住居跡群（北西から）



(2) OD地区 SH01（東から）



(1) OD地区 SH02 (南東から)



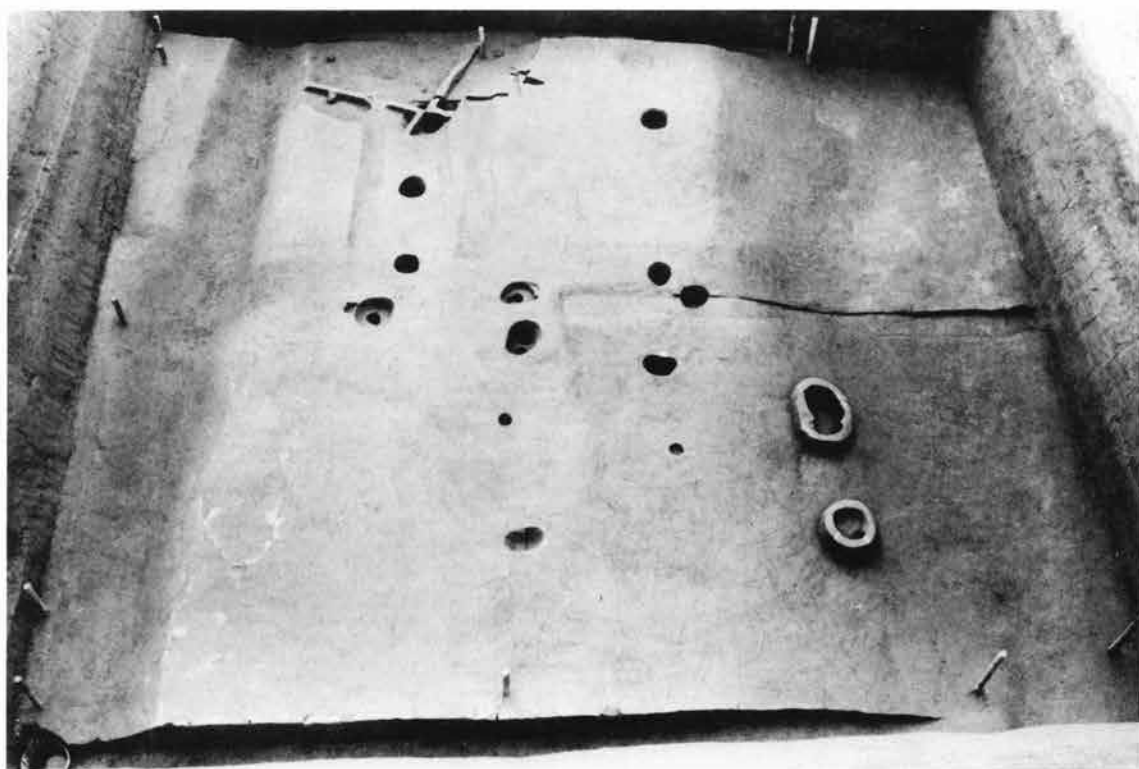
(2) OD地区 SH02カマド検出状況



(1) OD地区 SH03 (南東から)



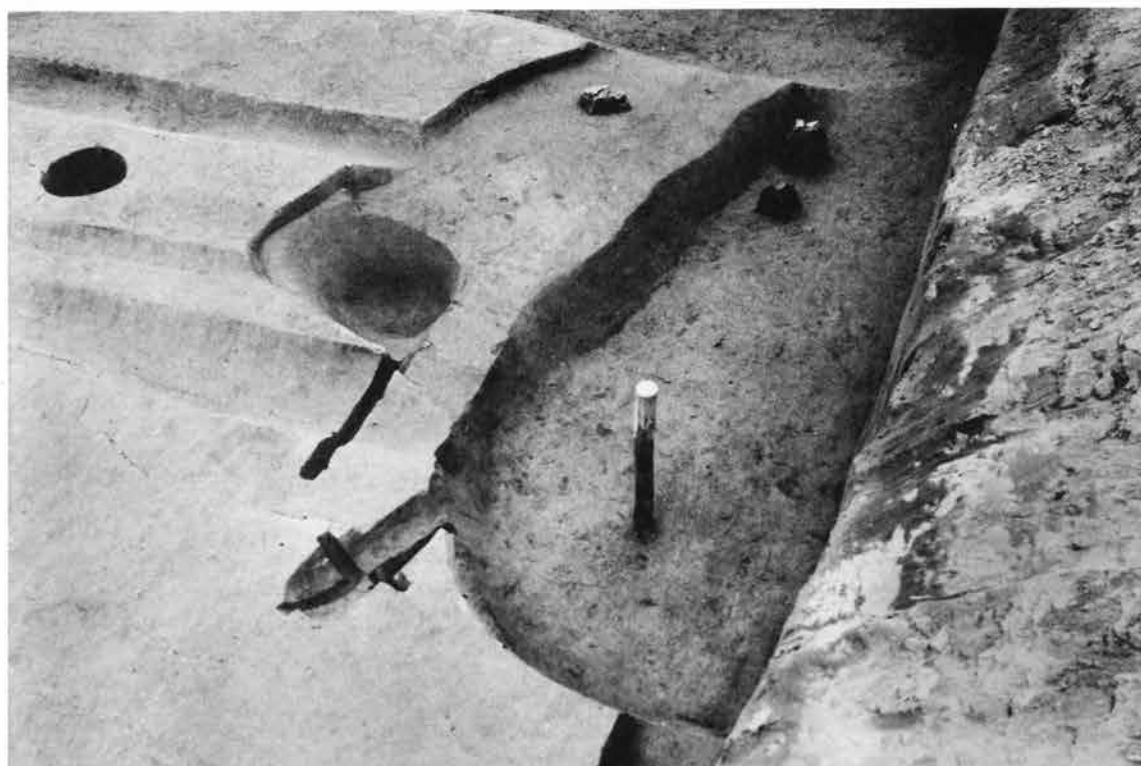
(2) OD地区 SH03カマド検出状況



(1) JH地区調査地全景（東から）



(2) JH地区断割り状況（北から）



(1) JH地区 SH01・SX09 (北から)



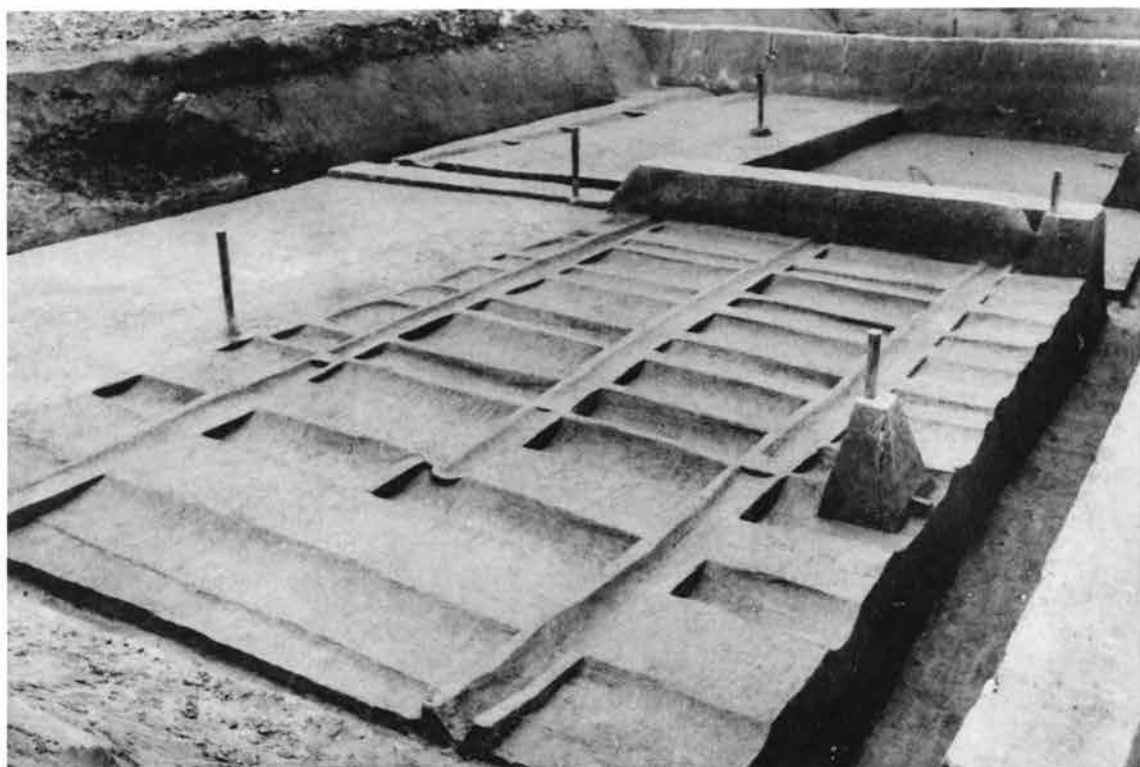
(2) 同上 (南から)



(1) IP地区調査前風景（南東から）



(2) IP地区上層検出遺構（西から）



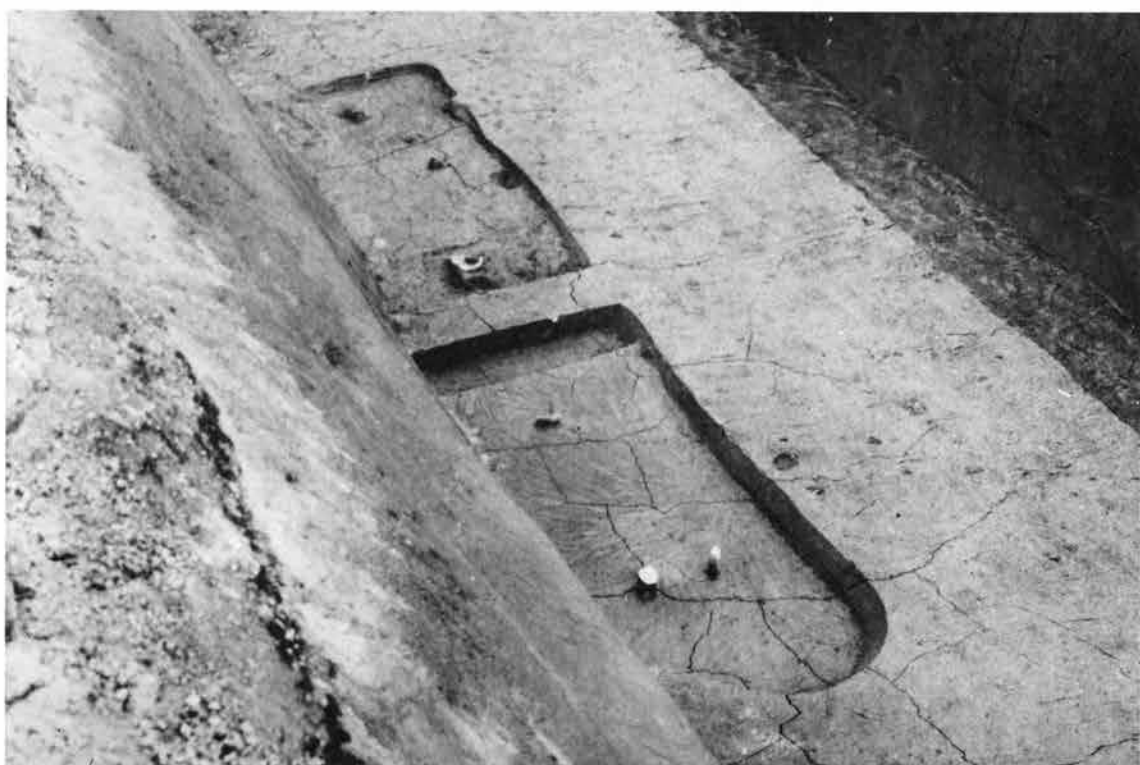
(1) IP地区素掘り溝群（南東から）



(2) IP地区 弥生時代～中世検出遺構（西から）



(1) IP地区 SD14・SX21 (南から)



(2) IP地区 SX26 (北東から)





出土遺物（番号は実測図と一致）



(1) 調査地全景 (南西から)



(2) 遺構検出状況 (南から)



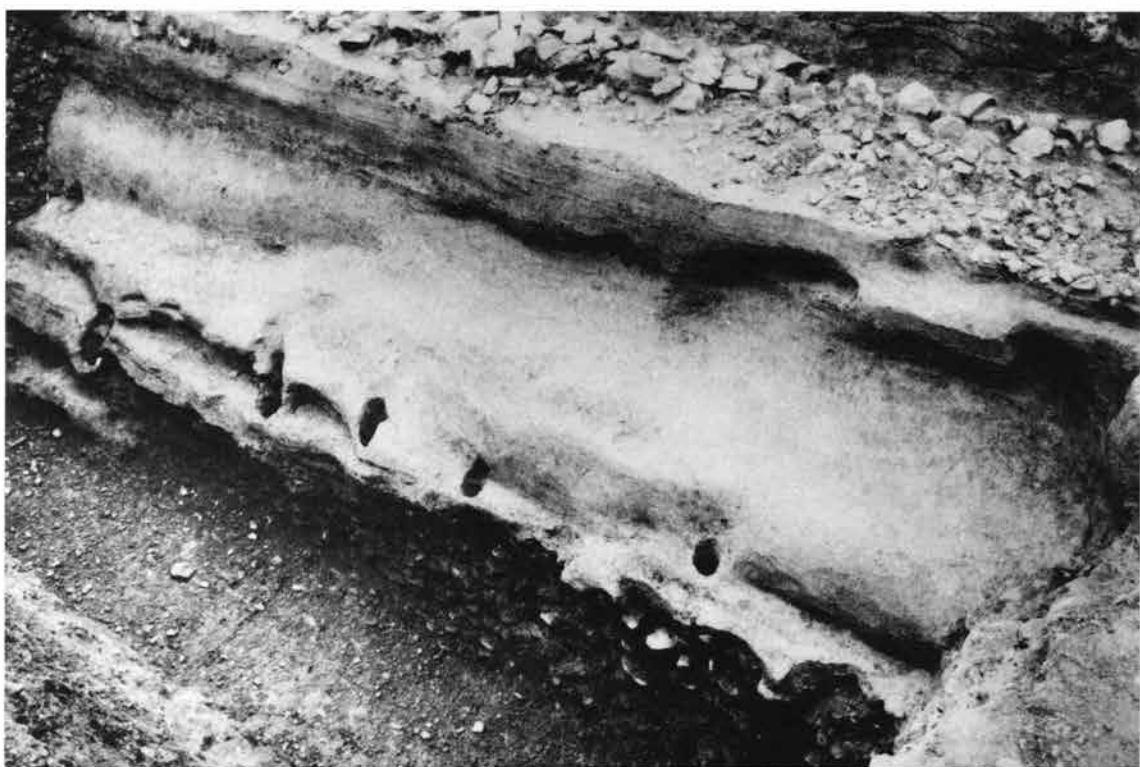
(1) Aトレンチ全景 (北から)



(2) 旧流路跡(S D01)検出状況



(1) Bトレンチ全景（北から）



(2) 堤防状況遺構(SX01)検出状況（北東から）



(1) Aトレンチ南壁断面



(2) 堤防状況遺構(S X01)西側斜面 (Bトレンチ)



(1) 調査地全景（北西から）



(2) 遺構検出状況（西から）



(1) 溝(S D 19401)検出状況



(2) 溝(S D 19402・04)検出状況(東から)



S D 19401出土土器



## 京都府遺跡調査概報 第19冊

昭和61年3月20日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40の3  
TEL (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
TEL (075)441-3155 (代)